



Title	『実学報』東文報訳から見た中日語彙交渉の研究
Author(s)	陳, 静静
Citation	北海道大学. 博士(文学) 甲第13405号
Issue Date	2019-03-25
DOI	10.14943/doctoral.k13405
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/80759
Type	theses (doctoral)
File Information	Jingjing_Chen.pdf



[Instructions for use](#)

博士学位論文

『実学報』 東文報訳から見た中日語彙交渉の研究

平成 30 年度

北海道大学大学院文学研究科

言語文学専攻

陳 静静

目次

序章	1
第1章 先行研究とその問題点	5
1.1 先行研究	5
1.1.1 個人の著作に関する研究	5
1.1.2 辞書、教科書に関する研究	6
1.1.3 専門用語の研究	7
1.1.4 新聞、雑誌の研究	8
1.2 先行研究の問題点	10
第2章 『実学報』と近代日本新聞の資料性	13
2.1 『実学報』と「東報輯訳」「東報訳補」欄	13
2.1.1 『実学報』の書誌	13
2.1.2 「東報輯訳」「東報訳補」欄	16
2.2 『実学報』訳文のソース記事の再調査	18
2.2.1 先行研究	18
2.2.2 調査資料	19
2.2.3 調査結果	19
2.3 『実学報』に翻訳された日本の新聞記事	30
2.4 まとめ	32
第3章 同一記事の翻訳から見る翻訳者の用語傾向	33
3.1 『中外商業新報』掲載記事	34
3.2 漢字、語彙、文単位の考察	35
3.2.1 漢字単位の考察	35
3.2.2 語彙単位の考察	37
3.2.3 文単位の考察	43
3.3 二人の翻訳者について	45
3.4 まとめ	46

第4章 『実学報』における日本漢字語の受容.....	48
4.1 清末中国人の日本視察記録の語彙との対照.....	49
4.1.1 何如璋が使用した語.....	49
4.1.2 黄遵憲が使用した語.....	49
4.1.3 傅雲龍が使用した語.....	50
4.1.4 葉慶頤が使用した語.....	50
4.1.5 黄慶澄が使用した語.....	50
4.1.6 梁啓超が使用した語.....	51
4.2 注釈付き語の翻訳から見る日本漢字語の受容.....	52
4.2.1 『実学報』以前の日本漢字語の注釈.....	52
4.2.2 『実学報』の注釈付き語.....	53
4.2.3 『実学報』注釈付き語の翻訳.....	55
4.2.4 本節のまとめ.....	59
4.3 注釈なし語の翻訳から見る日本漢字語の受容：「時間」を例に.....	60
4.3.1 現代日本語と中国語における「時間」の意味.....	61
4.3.2 『実学報』における「時間」とその翻訳.....	63
4.3.3 時をかぞえる単位の「時間」とその訳語.....	65
4.3.4 本節のまとめ.....	72
4.4 まとめ.....	73
第5章 『実学報』における外来語の翻訳.....	74
5.1 片仮名語の語数と特徴.....	75
5.2 漢字あり片仮名語の翻訳.....	76
5.2.1 漢字表記を継承した語.....	78
5.2.2 既存の中国語に変更した語.....	79
5.2.3 未訳出の語.....	81
5.3 片仮名单一表記語の翻訳.....	81
5.3.1 音訳の語.....	83
5.3.2 意識の語.....	85
5.3.3 未訳出の語.....	86
5.4 『実学報』「中西合璧表」の訳語との関係.....	87
5.5 まとめ.....	89

第6章 音訳語から見る『実学報』の参照書物.....	90
6.1 『実学報』における『東語入門』の利用.....	90
6.1.1 『東語入門』とその研究.....	90
6.1.2 『東語入門』の利用.....	93
6.2 『実学報』における『策鰲雜摭』の利用.....	99
6.3 他の日本語研究記録との関係.....	101
6.4 まとめ.....	104
第7章 音訳語から見る『実学報』と『時務報』の関係.....	105
7.1 研究資料と研究対象.....	106
7.2 両紙における共通外来語の翻訳.....	107
7.2.1 両紙とも音訳した語.....	107
7.2.2 片方が音訳した語.....	109
7.3 両紙における片仮名と漢字の対応.....	110
7.3.1 両紙における片仮名と漢字の字数対応関係.....	110
7.3.2 両紙における片仮名の音に合わない漢字.....	111
7.3.3 両紙における片仮名と漢字の安定した対応.....	111
7.3.4 両紙における撥音、長音、促音の音訳.....	112
7.4 両紙訳語と用字異同の原因.....	114
7.4.1 既存語と新語の利用.....	114
7.4.2 両紙における母語干渉.....	114
7.4.3 「中西文合璧表」との関係.....	115
7.5 まとめ.....	115
終章.....	117
参考文献.....	120
付図.....	125
付録.....	127
謝辞.....	137

凡 例

1. 表記方針について、日本語は現代日本語の字体で、中国語は繁体字を用いる。
2. 日本語と中国語を区別しにくい場合、引用符号は、日本語は『』「」を使用し、中国語は《》“”を使用する。
3. 『実学報』における「東報輯訳」「東報訳補」欄は特記しない限り「東文報訳」と略す。
また、『実学報』ソース記事の掲載紙は日本の新聞と雑誌ともあるが、特筆しない限り「新聞」で代表する。
4. 中国語の日本語訳は特記しない限り、筆者による。
5. 例文などの下線は筆者による。日本語の新聞記事は総ルビのものもあるが、日本語の例文は必要な箇所だけ振り仮名を付け、ほかは省略する。
6. 本論文における『実学報』の例文の所在は、参照の便を配慮して、1991年刊の中華書局複製本により示す。

序 章

0.1 研究の背景

日清戦争後、中国では、近代文明を取り入れるために、「同文」である日本からのルートが近道だと認識されていた。日本を視察したり、日本に留学生を派遣したり、日本書籍や日本の新聞記事を翻訳したりするなど、様々な方法が実施されていた。日本及び世界の最新情報を知るには、日本の新聞記事を中国語に翻訳することが最も近道だった。

新聞記事の翻訳は大きな役割を果たしてきたが、初期の頃は、翻訳者が極めて不足していた。初代駐日公使の何如璋が日本に赴任した際、日本側に通訳を依頼したことから窺える。そのため、清国駐日公使館でいち早く日本語教育が始まった。中国国内では 1897 年に北京、広州の同文館で「東文館」が開設されたが、生徒が若い八旗子弟が多く、新聞の翻訳者の養成には間に合わなかった。

そして、1896 年に最初に日本に赴いた清国官費留学生は、初期の 13 名から、1899 年に 200 人を超えて、1902 年には 400～500 人にもものぼった。日本で語学力を身につけた留学生たちは、1900 年から盛んに翻訳、出版活動を繰り返した（沈 1995：3）。留学生の唐宝鏗と戢翼翬は教科書『東語正規』3 巻（1900）を出版した。汪榮宝、葉瀾は日本で『新爾雅』を執筆し、1903 年に発行した。また、留学生たちは日本で新聞を創刊して、新知識を中国に紹介し、日中文化交流に大きな役割を果たした。最初のもは『訳書彙編』（1901-1903）であり、『国民報』（1901.5-1901.8）、『遊学訳編』（1902 末-1903.11）、『湖北学生界』（1903.1-1903.9）、『浙江潮』（1903.2-1903.12）、『直説』（1903.2-）、『江蘇』（1903.4-1904.5）などが続いた。

ところで、中国人留学生たちが活躍する前は、優れた日本人漢文学者達が代わりに翻訳活動に携わった。『時務報』（1896.8-1898.7）の古城貞吉のほか、『農学报』（1897.5-1906.1）の藤田豊八、『訳書公会報』（1897.10-1898.5）の安藤虎雄などはその代表である。古城氏はこの経験を公にせず、活動記録も少なかった。一方、藤田氏の渡清については、日本建国三千年以来始めて中国に招請された一大事として『東京朝日新聞』で報道された。

『先秦文学』の著述を以て有名なる文学士劍峰藤田豊八氏（帝国大学漢文科専攻）は今回清国にて発刊する農会報及時務報（共に馬建忠氏の機関たり）の招請に応じ昨夜渡清の途に上れり我建国三千年以来漢文学を以て支那より聘せられたることは是を以て嚆矢とせん

（「漢文学者の渡清」『東京朝日新聞』1897.7.6）

沈（2009）『時務報』の東文報訳と古城貞吉」は、「本格的に日本の新聞記事を訳出し、中国社会に提供したのは『時務報』の「東文報訳」が最初」と指摘し、古城氏の汪康年宛の書簡などによって古城氏が『時務報』のために中国に赴任した経緯、滞在期間などを始めて明らかにした。

実際に日本人漢学者たちは新聞の翻訳だけではなく、様々な分野で活躍していた。古城氏は『時務報』のほか、本を翻訳・出版し¹、藤田氏は『農学报』の翻訳のほか、中国で最初の日本語学校「東文学社」（1898年開校）で中国人に対する日本語教育も始めた。教育の経験を積んで、最初の日本語教科書や辞書も出版された。清末民国の有名な国学者である王国維も青年時代に『時務報』の仕事の傍ら、東文学社で日本語や物理・化学などを学び、西洋の学問に触れた。

初期の日本語翻訳者が不足する状況下で、『知新報』（1897.2-1901.1）²、『集成報』（1897.5-1898.5）、『実学报』（1897.8-1898.1）は、日本の新聞記事を翻訳・掲載するも、日本人翻訳者を用いなかったため、中国人に日本語の新聞記事の翻訳を依頼した。『知新報』は詳しい出典記録を残さなかったため、ソース記事を探すのが困難であり、対照研究が極めて難しい。『集成報』は第13冊から第16冊まで、上海の葉慶頤によって32本の記事が翻訳されたが、『実学报』の翻訳より刊行時期が遅かった。『実学报』は第1冊の東文報訳が間に合わず、第2冊からは「口訳」と「筆述」の共同作業という体制を取るが、次第に一人によって翻訳できるようになった。王宗海、王仁俊、孫福保、程起鵬によって139本の訳文を中国社会に提供した。『実学报』は中国人翻訳者による最初のものの一つとして、貴重な言語資料である。

近年は、中国の近代定期刊行物に関する研究が多くなってきた。『時務報』に関する研究は、翻訳者古城貞吉とその翻訳に関する沈国威（2010）、借用語に関する朱京偉（2012a、2012b）の研究などがあり、思想の伝播に関しては竹内弘行（2014）の研究がある。『実学报』に関しては、秦春芳（2007、2008、2010a、2010b）などがある。近代中国の定期刊行物に言語資料としての研究価値があることが示され、特に日本からの借用語を中国に導入するのに定期刊行物が大きな役割を果たしたことが示唆された。

さらに、李益順（2015）「試析晚清期刊中的科学概念認知」では、梁啓超が「変法通義・論変法不知本原之害」（『時務報』第3冊）で使った「科学」は「科挙」の印刷ミスであり、中国で初めて「科学」という言葉を使用したのは1897年11月15日³『実学报』第9冊掲載の「台湾植物之盛」である。さらに、李益順、陽徴雄（2016）では「台湾植物之盛」が日本の新聞

¹ 沈（2010）、『時務報』本館告白など。

² 『知新報』は、初期に中国人唐振超、後に日本人山本正義に変更した。康同薇も日本語の翻訳に携わった。

³ 『実学报』の表紙にある出版日は旧暦であり、第9冊の日付は1897年10月21日（旧暦）である。

『時事新報』1897年9月26日の記事の訳文であり、程起鵬の翻訳であることを明確にした。李氏らは中国近現代史の観点からの研究であるが、語彙的に「科学」の初出を明らかにしたうえ、『実学報』の言語資料としての価値を一段と高めた。

日本漢字語の借用は確かに近代語彙研究の大きな貢献の一つであるが、重要な研究資料として研究がまだ不十分であり、先行研究の行き届いていない研究課題が数多く残っている。例えば、『実学報』の翻訳者たちが日本の新聞記事について、どのように日本漢字語を紹介したか、大量の片仮名で表記された語をどう訳したか等、解明されていない大きな問題がある。

0.2 研究の目的

『実学報』の訳文には詳細な出典情報が記録され、それらの出典記録によって、ソースとなる日本の新聞記事を探ることができる。中国語訳文と日本語原文と対照し、当時の語彙交渉の実態が分かる。今までの研究は中日同形語の観点から行われ、『実学報』の翻訳を通して日本漢字語の導入における役割が明らかになったが、日本漢字語の判定基準が明確ではなく、単なる中日同形語の角度からの考察に限られている。

ゆえに、本研究は、中日同形語の視点からの研究を補うために、翻訳という語彙交渉の過程における日本漢字語の使用状況を明確にするほか、外来語の翻訳から当時の教科書や同時代の新聞との関係を考察するという新しい研究方法で以下の問題の解明を試みる。具体的には、

- ① 『実学報』翻訳者の中で使用された用語にどのような傾向があるか
- ② 翻訳者は日本漢字語をどのように受容したか
- ③ 日本語の外来語を翻訳する際、参照した書物があるか
- ④ 先に刊行された『時務報』の訳語との影響関係があるか

という4つの問題の究明を目指して研究を進めたいと思う。

まず、翻訳者が複数いるため、日本語能力、漢文素養に差異がある。したがって、日本漢字語の使用にも積極的な態度と慎重的な態度が現れる。慎重的に翻訳を施した翻訳者は新語に自分なりの理解で注釈を付けている。それが日本漢字語の受容の研究に手がかりを提供してくれる。注釈付き語と注釈なし日本漢字語を考察することによって、日本漢字語の判定基準、『実学報』の役割を一層明確にすることができる。

次に、当時の日本語の外来語には漢字表記が付いているものもあれば、片仮名单一表記のものもある。それぞれの翻訳状況を考察し、特に表意性のある漢字表記がないなか、後者の音訳語の作成に参照した書物、同時期の『時務報』との関係を明確にすることは、『実学報』に関する研究を充実にさせることになる上に、今後の研究に新しい視点を提供することで重要な意義があると思われる。

0.3 論文の構成

本論文は序章と終章を含めて9章からなる。各章の内容は次のとおりである。

第1章では、先行研究とその問題点を指摘し、本論文の研究課題を示す。

第2章では、先行研究の成果を踏まえた再調査によって、出典記録の間違いなどを修正して、『実学報』に翻訳された日本の新聞記事のソースを明確にする。

第3章では、『実学報』における同じ日本の新聞記事を手本にした2本の中国語訳文を対照し、翻訳者による翻訳の特徴、用語の傾向などを考察する。

第4章では、『実学報』における日本漢字語の受容を検討する。まず、注釈付き語を中心に翻訳者が日本漢字語と漢字表記語をどう理解したか注釈内容を通して考察する。一方、日本漢字語に注釈が付されていないことが多いので、注釈が付されていない日本漢字語として、「時間」を例にその受容状況を検討する。

第5章では、『実学報』における外来語の翻訳事情を考察する。漢字表記のあるものと片仮名表記のみのものに分けて、それぞれの翻訳状況を考察する。

第6章では、『実学報』の翻訳者が音訳に利用した日本語教科書『東語入門』の利用方法を検証する。音訳語における片仮名と漢字の対応から両者の関係を検討し、清末中国人に編纂された『東語入門』の教学以外の分野での利用を検討する。

第7章では、音訳語の比較を通して、『実学報』と『時務報』の関係を検討する。日本人漢学者の古城貞吉が翻訳した音訳語と中国人翻訳者による音訳語の異同、特徴、及びその原因を考察する。

0.4 用語の定義

まず、「日本漢字語」の定義について、秦(2010b)に従う。氏は中日同形語の観点から中国または日本において創造された漢字表記語(漢字語)の中で、西洋文明と接触する際、新事物・新概念を表わす意味・用法が日本語に出自を持っているものを日本漢字語と称すると述べている。本研究では、秦(2010b)の定義に則り、漢字表記語のうち、「会社」「警察」など日本語において西洋文明との接触で生じた漢字表記語を日本漢字語と称する。

「日本漢字語」と類似した用語には、「日本語借用語」「和製漢語」がある。「日本語から借りてきた言葉」を「日本語借用語」とし、沈(1994)第一章では詳しく説明している。劉ほか(1984)、李(2006)、朱(2012a, 2012b)、劉(2012)なども使用している。陳(2001)は日本で造られた字音語を「和製漢語」と称している。3つの用語には重なる部分もあれば、異なる部分もある。

また、「外来語」について、本研究では日本語における片仮名表記の付いている語を指し、考察の便宜上、やや範囲を広げて、片仮名で表記された日本固有語も含める。

第1章 先行研究とその問題点

1.1 先行研究

近年、日本と中国の学術交流や言語交渉などに関する研究が活発に行われている。個人の著作・新聞・雑誌・辞書・教科書から、人文科学・自然科学の専門用語にいたるまで、さまざまな事物が研究対象となってきた。

1.1.1 個人の著作に関する研究

①黄遵憲らの研究

沈国威（1994）は、日清戦争前に黄遵憲などの知識人が執筆した日本に関する紀行文9種を研究資料として、それらの文献から延べ488語を抽出し、そのうち102語が日本語からの借用語と認定した。

王宝平（2005）は、中日学術交流の視点から、黄遵憲の『日本国志』、姚文棟の『日本国志』などを取り上げ、日本の『国史紀事本末』『日本地誌提要』と対照し、それらの日本文献との関係を提示している。

劉凡夫（2012）は黄遵憲の『日本国志』（1895）を研究資料として語彙調査した結果、559語を日本語からの借用語と確定した。そのうち178語が既存の日本語であり、381語が幕末・明治期に作られた新漢字語であると指摘している。

②梁啓超の研究

李運博（2006）は『飲氷室合集』（1996）全文を研究資料として研究を行った。氏の研究によって、梁啓超は1896-1902年の間に、『時務報』『清議報』『新民叢報』に投稿した文章で大量の新造漢字語を使用したほか、様々な方法でそれらの言葉を解釈した。梁啓超が使用した142語の日本語借用語のうち、「哲学」1語だけが梁氏の使用以前にすでに定着したのに対し、141語は梁氏の努力によって近代中国に移入され、中日の近代語彙交流に大きな役割を果たしたことが分かる。

③魯迅の研究

常曉宏（2014）の研究によって、日本に留学した経験を持つ魯迅が文学作品を通して積極的に日本漢字語を使用し、3436語の中日同形語のうち1180語の借用語を使用したことが分かる。借用語の字数別では二字熟語が最も多く、時期別では五四運動（1919）以後の使用が最も多く、ジャンル別では雑文に最も多く、分野別では社会科学分野の語彙が最も多く使用された

と結論する。自作の文章だけでなく、留学中に翻訳した文章への考察も行っている。『月界旅行』『地底旅行』を取り上げ、日本語原文と対照して、日本語借用語の使用のほか、片仮名語の音訳語にも触れ、魯迅の翻訳の特徴を分析した。

日本語借用語と日本漢字語の研究に重なる部分があるため、本研究で日本漢字語を考察する際、『実学報』前後の中国人に使用された新語・日本語借用語を参照する。また、音訳語の考察に魯迅の音訳語に関する研究の方法も参考にした。

1.1.2 辞書、教科書に関する研究

①辞書に関する研究

沈国威（1995）は、日本に留学した中国人によって編纂された、中国最初の西洋の人文・自然科学の新概念・術語を解説する用語集である『新爾雅』（1903）を取り上げ、その書誌、出版背景、編者、収録語彙などを解明した。収録された 14 部の語彙を人文社会系の用語・術語（积政、积法、积計など）と自然科学系の用語・術語（积幾何、积天、积地など）に分けて、前者の考察では嚴復の訳語との関係を、後者の考察では 19 世紀の西学の伝播事情と関連づけて研究を行った。そして、傍点が付された語（見出語相当、2442 語）と説明の部分（地の文）に用いられた日本の新語・訳語（307 語）もリストアップしている。

黄彬（2008）は東亜語学研究会編の『漢訳日本辞典』（1905）を取り上げ、『言海』との比較を通して、その語の収録基準と語積の特徴を分析し、『言海』がその編纂の手本であると結論づけた。また、『新爾雅』の収録語との対照で、現代日本語の常用語となる言葉が収録されていない欠点も指摘している。

一方、朱鳳（2009）は、モリソンの「英華・華英字典」をめぐって、その成立、漢学史における位置づけ、漢訳語の日本における伝播と利用などを論じている。漢訳語の代表として、「銀行」の誕生を考察するために、中国の文献に出典を探った結果、宣教師による造語であり、日本漢字語とされていたことを否定し、3通りの日本への伝播ルートも検討した。

宮田和子（2010）は、19 世紀の英華辞典を総合的に研究し、モリソン、メドハースト、ウィリアムズ、ロプシャイト及び鄭其照の辞書を取り上げ、各辞書の影響関係、及び中国の辞書『康熙字典』『五方元音』とそれらの辞書との関係を論じている。最後に日本における英華辞典の所蔵状況を詳しく調査し、まとめている。

②教科書に関する研究

劉建雲（2007）は、清末の東文学堂に関する資料に基づいて、中国人の日本語学習史を研究し、歴史的視点から当時の日本語教育の実態を明確にしたうえ、清末の日本語教科書を 68 種紹介している。

陳娟（2012、2014）は、日本語教育の初期に出版された日本語学習書を 139 冊見つけ、分類・整理することにより、20 世紀初頭の中国人向け日本語教科書の全容を明らかにした。さらに『東語簡要』（1884）、『東語入門』（1895）、『東語正規』（1900）を詳しく論じている。

魏維（2016）は、清末の日本語学習書『寄学速成法』（1901）を取り上げ、『和文漢読法』（1902）と対照した。『寄学速成法』が『和文漢読法』に対する批判を唱えながらも、それを土台として、『和文漢読法』の不足分を補充し錯誤を是正することにより、日本語教育の速成法を発展させたことを論じている。

上記の辞書・教科書に関する研究成果は、本研究で日本漢字語を認定する際大きな役割を果たすと考える。例えば、留学生による『新爾雅』に 20 世紀初頭の中国人の日本漢字語が多数記載されており、その解釈から受容度がわかる。『実学報』がその約 5 年前に出版され、当時の翻訳者の日本漢字語への理解度、使用頻度など研究の助けになるだろう。また、「銀行」は秦（2010a、2010b）で日本漢字語と判定するが、朱（2009）の考察によると、日本漢字語から外すべきであるとする。また、教科書に関する先行研究も本研究の考察の視野を広め、有益な資料を与えてくれた。

1.1.3 専門用語の研究

荒川清秀（1997、2018）は、地理学用語を中心に、近代日中学術用語の形成と伝播を研究し、中国製漢語「熱帯」、和製漢語「回帰線」、日中でゆれのある語「海流」、日中で違いが生じた語「貿易風」などを取り上げて、詳しく分析した。

朱京偉（2003）は、自然科学と人文科学の専門用語を中心に、日本の近代植物学用語、音楽用語、哲学用語などの成立と中国語に与えた影響について、近代日中新語の創出と交流を論じている。

鄭艶（2015）は法律用語に関して、『法国律例・刑律』（同文館本 1880）、『日本国志・刑法志・刑法』（富文齋本 1895）を『（校正）法蘭西刑法』（法律館本 1907）と比較して、欧米からの訳語に代わって日本からの法律用語が中国の法律用語に溶け込んだことを明確にした。事例研究として、新義が付与された「重婚」の逆輸入、日本の新造語「動産・不動産」の受容も解明した。

一方、許春艶（2016）は二種の『全体新論訳解』を取り上げ、日本における漢訳洋書『全体新論』の伝播とその中の医学用語の受容過程について成果を上げた。

本研究の外来語の翻訳を考察する際、専門用語などの訳語について参考になる。例えば、荒川（1997）によると、「サンフランシスコ」の訳語「桑港」が中日合作の結果であり、片仮名表記と漢字表記とも出てくる「^{サンフランシスコ}桑港」に対して、中国人翻訳者にとって「サン」の音に近い「桑」の漢字表記は受け容れやすかった。

1.1.4 新聞、雑誌の研究

①『六合叢談』の研究

沈国威（1999）は、中国で出版された月刊誌『六合叢談』（1857-1858）を世界に関する情報とともに定期刊行物という出版の形態を日本に導入したのものとして取り上げ、近代中国と日本における学術用語の交流と受容の視点から、『六合叢談』とその中で使用された語彙について学際的研究を行った。

②『明六雑誌』の研究

邵艶紅（2011、2013、2014）は、『明六雑誌』の漢字語について研究した。文章の題目、文体、文法、語彙における中国語が日本語に与えた影響を指摘し、さらに『新青年』への語彙調査を通して、『明六雑誌』の漢字語が中国語に与えた影響も指摘した。

③『時務報』『清議報』『訳書彙編』『民報』の研究

沈国威（2010）は、『時務報』とその翻訳者の古城貞吉について詳しく考察し、古城氏が『時務報』の東文翻訳になった経緯、翻訳地、中国での活動、及びそれに関する著作『滬上銷夏夢』などを明らかにした。また、訳文が中国語に与えた影響や日本語原文に対して考察する必要性も提示した。

竹内弘行（2014）は『時務報』の東文報訳を取り上げ、古城貞吉が伝えた欧米・日本・中国の状況と思想の観点から考察した。

朱京偉（2012a、2012b、2013、2015、2017）など一連の論文では、一貫した基準で『時務報』（1896-1898）、『清議報』（1898-1901）、『訳書彙編』（1900-1903）から漢字語を抽出し、二字語、三字語、四字語とに分けて考察を行った。二字語の場合、「有典」（中国古典にある語）、「無典」（中国古典にない語）、「新義」（中国古典にあり、日本で新義が付与された語）、「漢大未収」（『漢語大詞典』未収録語）の4種類に分けて日本からの借用語の認定基準を提示したほか、三紙に出現した借用語の比較を通して、二字語使用の変化の様相も明らかにした。三字語、四字語の場合、日本のデジタル資料（「国立国会図書館デジタルコレクション」、『朝日新聞』記事データベース・「聞蔵Ⅱビジュアル」、『読売新聞』記事データベース・「ヨミダス歴史館」）を調査し、「日本側の用例が清末新聞より早い語」「日本側の用例がない語」「日本側の用例が清末新聞より遅い語」に分けて、日本からの借用語であるか、中国人による造語かについて判断をした。そして、語構成によって分類し、「～権」「～問題」「国際～」のような語を構成している要素（語）の造語力などについても考察した。

朱京偉（2009）は、『民報』（1905-1908）から1160語を抽出して、借用語の認定と語構成の特徴を分析した。『民報』には、688語が日本語から借用されたものと論じる。

④『実学報』の研究

秦春芳（2007）は、『実学報』の東文報訳記事 40 篇をもとに、日本語原文と中国語訳文に共通して出現した漢字語 731 語を見出し語として、『日本国語大辞典 第二版』『精選版 日本国語大辞典 全三巻』における記述内容を調査した。その結果、26 語は明治期の新聞における記述が両辞書の用例より早く見られ、4 語は明治の新概念語として両辞書において見出し語としてはあげられているが、用例が掲載されていないことが明らかになった。また、『日本国語大辞典』の初出用例を修正する際の参考として、明治期の新聞・雑誌などの定期刊行物における用例を提示している。

秦春芳（2008）は、『時務報』と『実学報』がともに原誌としている唯一の記事である『東京日日新聞』掲載の「清国膠州湾」と 2 本の訳文を取り上げ、それぞれの日本漢字語の使用状況、原誌との共通語彙・翻訳語彙・文単位における翻訳の正確性などを考察し、『実学報』の方がより原誌の日本語記事の語彙の使用状況を忠実に反映していて、漢文造詣の深い、優れた語学力を持つ古城貞吉がより正確に翻訳しているという結論を出した。

秦春芳（2010a）は、同形語の観点で、『実学報』の日本語原文と中国語訳文に共通して現れている二字漢字語を中心に抽出し、そのうち当時と現代の辞書に掲載されている語 2968 語を調査対象とした。辞書及び先行研究、中央研究院漢籍電子文献などの記述に基づいて考察した結果、『実学報』『東報輯訳』『東報訳補』（以下「東文報訳」と略す）欄を通して、日本漢字語 812 語が中国語に移入されたことを明らかにした。812 語を分野別で見ると、一般語が 298 語、専門語が 515 語と専門語が圧倒的に高い割合を占めている⁴。さらに、『分類語彙表』に基づいて分析した結果、「人間活動—精神および行為」の項目に属する語が圧倒的に多いと指摘した。また、近代新漢字語が中国語へ移入された原因を分析し、その後の辞書『新名詞訓纂』『辞源』『漢語大詞典』と魯迅の作品の調査を通して、『実学報』の日本漢字語の中国語における定着状況、中国語として定着するために果たした役割を論じている。

秦春芳（2010b）は、上記の論文を踏まえた上で書いた博士論文である。氏の調査によると、『実学報』『東文報訳』欄の翻訳を通して、下記の 10 種類の日本の新聞が中国社会に紹介された。

『大阪朝日新聞』	『大阪時事新報』	『大阪毎日新聞』	『神戸又新日報』
『時事新報』	『中外商業新報』	『東京経済雑誌』	『東京日日新聞』
『東京日日報』	『日本銀行半季報』		

⁴ 「時間」が 2 通りの意味を持ち、一般語と専門語でそれぞれ 1 語とされるため、合計 813 語と 1 語多くなる。

そして、出典記録がない記事 1 本を除き、翻訳された日本の新聞記事を 138 本とした。それらの記事における中日同形語のうち、下記の例のような 812 語の日本語借用語の使用を明らかにした。それらの語の性格、及び中国語に取り入れられた原因も論じた。

亜鉛、安堵、維新、運転、開会、改革、会社、改正、科学、革新、革命
艦隊、願書、汽車、汽船、技監、技師、極限、銀行、軍港、軍事、公園
市場、資本、時間、時期、条件、神社、世界、速度、卒業、炭坑、直径
図書館、博物館、場面、馬力、美術館、美術品、病院長、負傷者、文明

『実学報』のほか、近代韓国の『漢城旬報』『親睦会会報』『太極学報』における日本漢字語を考察範囲に入れて、近代中国語と近代韓国語における日本漢字語の比較も行った。

1.2 先行研究の問題点

前節にまとめたように、近代語彙交渉の研究は盛んに行われていて、中国から日本への影響に関して英華字典、漢訳洋書などの研究もあれば、日本から中国への影響に関して清末中国人の新語の使用、辞書・教科書の編纂、新聞・雑誌の翻訳への研究も多数ある。ただし、これらの研究は、主に中日同形語の観点で行われている。

また、近代新聞・雑誌に関して研究する余地が大いにあると思われる。完全に中国人の手によって創刊された『実学報』は近代中日語彙交渉の重要な資料であるにも関わらず、秦春芳の一連の論文のほかには、『実学報』に関する研究は殆どなされてこなかった。秦氏の研究によって、『実学報』の翻訳記事を通して、10 種類の日本新聞の記事 138 本を判明し、その記事の中で 812 語の日本漢字語が使用されたことが明らかになった点は評価すべきであるが、次の問題点が残っている。

① 10 種類のソース記事の掲載紙に検討の余地がある。

調査した結果、「東京日日報」出典と記された記事が『東京日日新聞』掲載の記事である。また、「銀行会計」という記事の出典記録が「日本銀行半季報西 8 月 24 日」とあるが、秦氏の考察では『日本銀行半季報』が存在しない新聞とされたが、実際に「日本銀行半季報告」という名称で、日本銀行が半年毎に編集した決算報告書がある。ただし、この報告書は何十ページにも達し、翻訳されたのは報告書そのものではない。筆者の調査によると『大阪毎日新聞』1897 年 8 月 24 日に掲載された「日本銀行の貸附割引高」という記事である。

② 138 本のソース記事の内訳が異なる。

秦氏は出典記録が記されていない訳文「下議院議長更迭」1本を除いて、ソース記事を138本と数えた。筆者の調査でも日本の新聞記事を138本とするが、内訳が多少異なる。

まず、「下議院議長更迭」の出典について、筆者が中国語訳の中の「日日新報」という記載を手掛かりに探すと、『東京日日新聞』1897年8月31日2頁に掲載された「衆議院議長更迭説」という依拠記事を見つけた。

そして、下記の2本のソース記事が同じく『中外商業新報』掲載「廣東金礦の發見」であることを確認できたため、ソース記事の本数が秦と同じになったのである。

「廣東金礦發見」 譯中外商業新報西9月14日 第6冊

「廣東金礦之發見」 譯中外商業新報西9月14日 第14冊

③ 中日同形語の観点の考察に限界がある。

秦氏は「清国膠州湾」とその2本の中国語訳文を対象にして、『時務報』では「清国」をほぼ完全に「中国」に統一するのに対し、『実学報』では日本語からの翻訳記事は「支那」「清国」を用い、それ以外の部分は「中国」を使用すると述べているが、実際に『実学報』東文報訳には「中国」と訳した場合も皆無ではない(王宗海：8回、孫福保：4回)。

翻訳という性質のものであるから、中日同形語を当てる確率が高いが、日本漢字語の意味が翻訳者にどのように受け止められたか判然としない。『実学報』訳文において新語を使用する際、注釈をつけたものが一部ある。翻訳者が付けた注釈を手がかりにして、日本漢字語への受容度は多少分かるだろう。また、注釈を付けずに使用された「時間」は翻訳記事では二通りの意味を持っており、それぞれ『分類語彙表』の区分「1.16 時間」と「1.19 量」に属する(秦 2010b : 53)が、日本語原文において、空間と相対する概念の「時間」が現れず、単位としての「時間」には“時間”“點鐘”“時”の訳語が当てられ、それぞれ「時間」の意味を表わすことができるか詳しく調べないと分からない。つまり、翻訳者の日本漢字語の受容度の考察も不可欠である。

④ 語種別での考察が不十分である。

『実学報』の翻訳記事で使用された日本漢字語は812語あり、そのほとんどは音読みの漢語であるが、和語、外来語、混種語も含まれる。和語には「大蔵(おおくら)」「置物(おきもの)」「枕木(まくらぎ)」の3語、外来語には「洋燈(ランプ)」「軌條(レール)」「鉄軌(レール)」の3語、混種語には「大蔵省(おおくらしょう)」「大蔵大臣(おおくらだいじん)」「株式(かぶしき)」「粉茶(こなちゃ)」「時計(とけい)」「場面(ばめん)」「蒔絵(まきえ)」のような湯桶読み語7語、「角形(かくがた)」のような重箱読み語1語が挙げられる。

確かに中国語に借用された日本の和語（「打消」「手続」「取締」など）、外来語（「倶楽部」など）は限られているが、ソース記事に現れた和語、外来語は相当の量があったはずである。特に漢字表記がない場合、翻訳者の日本語能力が必要になる。当時の新聞記事に現れた外来語として、片仮名のみのもものと漢字表記が付いてるものがある、それぞれの翻訳状況を考察すべきだろう。

⑤ 『実学報』と『時務報』の関係の考察が不十分である。

『時務報』「東文報訳」が最初で、『実学報』より1年早く創刊され、しかも日本語翻訳者がネイティブの漢学者古城貞吉であるため、その訳語、特に音訳語が後の翻訳者に参考にされた可能性がある。秦氏は両新聞に「清国膠州湾」の訳文1本ずつを対象にして考察し、漢文の造詣が深い古城氏の翻訳は比較的正確で、読者にも配慮したことがある程度分かるが、『実学報』と『時務報』の関係について深く分析する必要がある。本研究では音訳語を比較し、両紙音訳語における参照関係を検討する。

第2章 『実学報』と近代日本新聞の資料性

2.1 『実学報』と「東報輯訳」「東報訳補」欄

2.1.1 『実学報』の書誌

『中文期刊大詞典』（2000）の記述によると、『実学報』は編集長が章炳麟氏で、1897年8月に上海で創刊され、1898年まで計14冊が発行された。寸法として26cmのみ記されている。『実学報』原誌を所蔵している上海図書館の「近代期刊目録」の書誌記録カードにも同じ内容を掲げている。

『実学報』/章炳麟。線装本。No.1（光緒23年8月[1897]）-no.14（光緒23年12月[1897]）。上海：該刊、1897-1898。14 no.、26cm。中国近代資産階級改良派弁的総合性刊物。「以講求學問、考核名實為主義、博采通論、広訳各報」……（後略）。

（『中文期刊大詞典』2000：1451）

しかし、no.14（光緒23年12月[1897]）の西暦年は間違っているようである。第14冊の表紙の刊行日（光緒23年12月11日）が旧暦であるため、西暦では1898年1月3日である。なお、26cmは縦の長さか横の長さか分からない。筆者は東洋文庫所蔵の『実学報』（請求番号：28746/（1-14））を現地調査し、縦26cm×横15cmと寸法を確認できた。

後世の記録のほか、『実学報』の「実学報啓」などからもその主旨、報名の由来、従業員、印刷技術などの情報が得られる。

「実学報啓」

一 本報之設、以講求學問、考核名實為主義、博采通論、広訳各報、内以上承三聖之緒、外以周知四国、故名実学報。

二 本報用石印装丁成冊、毎月刊布三次、每冊約三十葉

（後略）

筆者訳：

一 本新聞の創刊は学問を追究すること、名実を探求することを主な方針とし、通論を広く採録し、各外国語新聞を訳し、国内は三聖の事業を継承し、国外は各国の行動を周知させるために、名を『実学報』とする。

一 本社の新聞は石版印刷で装丁して本にし、毎月三回発行し、每冊約30頁ある。

（『実学報』1991：63-66）

まず、「実学報啓」（一）から主旨と報名の由来について、「学問の追究、名実を探求する」目的で通論を広く採録し、諸外国の新聞記事を翻訳・掲載し、新聞名を『実学報』と称したことが分かる。

また、「実学報啓」（二）によると、『実学報』は石印本⁵で、書籍のように装丁され（いわゆる線装本）、月に3回発行された旬刊である。毎巻約30頁ある。当時、新聞の読者と書籍の読者が重なっていたため、本に装丁すれば読者に受け入れやすく、保管もしやすい。

1874年前後、石版印刷技術が中国に伝わり、新聞や書籍などの印刷で大活躍した。表2-1に挙げた同時期の維新を主張する新聞と比べると、『湘学新報』が木活字本であり、『知新報』『国聞報』『湘報』が鉛印本であるのに対し、『実学報』は『時務報』『集成報』と同じ石印本である。

なお、新聞用紙について記録されていないが、現地調査で確認したところ、『時務報』『集成報』と同じ「連史紙」を使用していたことが分かる。連史紙は中国の手工製紙（土紙）で、原料は竹紙類で、竹紙のうち質的に最も優れているものである。

表 2-1 維新を主張する新聞紙の書誌情報

新聞名	創刊時間	種類	印刷	用紙
時務報	1896.8	旬報	石印本	連史紙
実学報	1897.8	旬報	石印本	連史紙
集成報	1897.5	旬報	石印本	連史紙
知新報	1897.2	週報→旬報	鉛印本	杭連紙
湘学新報 (湘学報)	1897.4	旬報	木活字本	未詳
国聞報	1897.1	日報	鉛印本	毛辺紙
湘報	1898.3	日報	鉛印本	未詳

（本表は『実学報』（1991）「影印説明」、及び李・陳（2012）により作成）

⁵ 石印とは、石版印刷である。平版印刷の一種。1798年ドイツのゼネフェルダーが発明した印刷法で、石版石の表面に脂肪を受け付ける部分と水を受ける部分をつくり、同じ平面ながらインキがつくところ、つかないところを科学的にこしらえる。脂肪性インキをつけたローターを転がせば、模様（画線部分）以外の部分は石が多孔質のために水分を含んでいるのでインキを受け付ける。このように石版は水と脂肪の相反発する性質を巧みに利用した印刷法であり、発明者は石の凸版をつくろうと種々の実験を試みているうち偶然にこの原理を発見した。印刷にあたっては、まず水で版面を湿し、ついでインキをつける。以上、『日本大百科全書』（第2版）（1994-97：13-556）より適宜要約。

従業員に関して、創刊号に掲げた「本館辦事諸君」のとおり、呉県の王仁俊が社長、余杭の章炳麟が編集長、呉県の孫福保が撰述・校正、元和の項思勛、元和の范禕、長洲の王季鍇が撰述、烏程の王斯沅が英文翻訳、上海の朱樹人がフランス語翻訳、呉泰宗が理事である。第2冊「本館辦事諸君」に「東文翻訳福建王宗海伯英」と日本語翻訳者を「法文翻訳」の後ろに追加した。

「本館弁事諸君」総理呉県王仁俊幹臣、総撰述余杭章炳麟枚叔、撰述編校呉県孫福保玉如、撰述元和項思勛玉書、撰述元和范禕子美、撰述長洲王季鍇小徐、英文翻訳烏程王斯沅松丞、法文翻訳上海朱樹人友芝、理事呉泰宗幼甫。

(『実学報』1991:70)

本紙の構成は「諭旨敬紀」「章奏彙編」「実学平議」「実学通論」「英報輯訳」「東報輯訳」「法文書訳」「実学報館文編」「東報訳補」「本館告白」などの欄からなる。『実学報』は当時上海で広く読まれていた『時務報』を模倣していて、体裁はほぼ変わらない。『時務報』創刊号のみに「京外近事」欄3本あるほかは、中国国内の出来事を中国語で書いた記事がないこと、「英報輯訳」「東報輯訳」「法文書訳」と3種の外国語新聞記事の中国語訳を掲載することも共通している。

『実学報』：諭旨敬紀、章奏彙編、実学平議、実学通論、英報輯訳、東報輯訳、
法文書訳、実学報館、文編、東報訳補、本館告白

『時務報』：論、恭録諭旨、奏折録要、京外近事、英文報訳、東文報訳、法文報訳、
路透電音、時務報館訳編

『時務報』が2年間刊行されていたのに対し、『実学報』は半年を以て廃刊になった。第10、13冊の「本館告白」から、繰り返し購買料を催促し、経済的原因が主だと推測される。政治的な原因はなかったか、更なる検証が必要である。

本報蒙外埠諸君広為伝播、足徴公誼、惟出報已届一季、外間閱報諸君、如仍有未付定洋者、務乞交本館、或各分售処彙寄、是所至禱。

筆者訳：本新聞は各地の購読者諸君によって広く伝播したのは、皆様のご厚情の証である。ただ既に一季分の新聞を届けていて、各地の購読者に、もし料金を払っていない者がいれば、本館まで届けていただくか、各販売所に送っていただければ幸いである。

(『実学報』1991:640)

本報於分售諸君、承蒙推广、足徴公誼、惟報資祈於年内交付、藉以維持本報、尤為感佩。

筆者訳：本新聞は販売所の諸君のおかげで広く宣伝されたのは、諸君のご尽力によるものである。ただ料金を年内に支払われて、その代金で本紙を維持したい。感謝の意を表す。

（『実学報』1991：819）

『実学報』原誌の所蔵について、清末の中国社会の混乱や、第2次世界大戦が原因で殆んど紛失した。『1833-1949 全国中文期刊連合目録（増訂本）』（1981）、『上海図書館館蔵近現代中文期刊総目』（2014）によると、中国では中国国家図書館、北京大学図書館、清華大学図書館、華東師範大学図書館、上海図書館の5箇所の図書館に原誌が所蔵しているが、筆者の調査では華東師範大学図書館には原誌が所蔵されていない。なお、日本では東洋文庫、東京外国語大学附属図書館の2箇所に所蔵している。14冊揃っているのは上海図書館と東洋文庫のみである。中国と日本における原誌の所蔵状況は表2-2のとおりまとめられる。

表2-2 中日両国における『実学報』原誌の所蔵状況

冊数	刊行年	所蔵図書館	請求番号
1、3	1897	北京大学図書館	53545/J (1897.no1,3)
3-14	1897	清華大学図書館	2842 (3-8,9-14)
6-14	1897	北京図書館（現中国国家図書館）	C55
1-14	1897-1898	上海図書館	5604
1-14	1897	公益財団法人 東洋文庫（日）	28746 (1-14)
1-2、6-9	1897	東京外国語大学附属図書館（日）	諸岡文庫 /X/10/1,2,6,7,8,9

なお、『実学報』の複製本は次のように編集、出版され、中日両国の複数の図書館に所蔵されている。

中華書局編集部編（1991）『中国近代期刊彙刊』 中華書局

沈雲龍編（1996）『近代中国史料叢刊』3編80輯792-1-2 文海出版社

姜亜沙、経莉、陳湛綺主編（2009）『晚清珍稀期刊彙編』 全国図書館文献縮微複製中心

2.1.2 「東報輯訳」「東報訳補」欄

「本格的に日本の新聞記事を訳出し、中国社会に提供したのは『時務報』の「東文報訳」が最初」（沈2009：49）と指摘され、594本の日本の新聞記事が日本人漢学者古城貞吉によって訳され、「東文報訳」欄に掲載された。『時務報』が創刊された1年後、『実学報』が創刊され

た。『実学報』には「東報輯訳」欄と「東報訳補」欄が設けられ、『大阪朝日新聞』や『東京日日新聞』など、日本で刊行された新聞・雑誌から日本語記事を選び、中国語に翻訳したものが139本掲載された。表 2-3 の通り、総本数から見れば、『実学報』の中国語訳は『時務報』ほど多くないが、『集成報』の32本よりはるかに多い。発行期刊が2年間に亘る『時務報』の発行数を半年ごとに分割すると150本ほどで、『実学報』とほぼ同じである。

表 2-3 『時務報』 『実学報』 『集成報』 三紙の東文報訳

新聞名	東文報訳欄	翻訳者	翻訳記事本数	
時務報	東文報訳	古城貞吉	594	
実学報	東報輯訳	王宗海、王仁俊、孫福保	82	139
	東報訳補	程起鵬	57	
集成報	本館翻訳（東文報）	葉慶頤	32	

『実学報』「東報輯訳」欄が第2冊から掲載され、第11冊まで計82本の中国語訳が掲載された。「東報訳補」欄が第9冊から掲載され、第14冊まで計57本の中国語訳を掲載した。第12冊から「東報訳補」欄だけが残った。

そして、翻訳者が不足していた状況下で、刊行初期の頃の『実学報』の東文翻訳者は、「福建王宗海口訳、吳縣王仁俊筆述」（第2、3冊）、「福建王宗海口訳、吳縣孫福保筆述」（第4、5冊）の形で翻訳作業を行った。第6冊から第11冊までは孫福保、第9冊から第14冊までは長洲の程起鵬を東文翻訳者として起用した。つまり、東文翻訳者は主に中国人の王宗海、孫福保と程起鵬の3人に加え、「総理」である王仁俊も筆述者として日本語の翻訳に携わった。139本の中国語訳を冊毎に掲載数をまとめると、下の表 2-4 のようになる。

表 2-4 『実学報』における日本の新聞記事の中国語訳の掲載数

翻訳者	所在冊														合計
	二	三	四	五	六	七	八	九	十	十一	十二	十三	十四		
福建王宗海（口訳） 吳縣王仁俊（筆述）	9	5												14	
福建王宗海（口訳） 吳縣孫福保（筆述）			13	12										25	
吳縣孫福保					12	9	8	7	3	4				43	
長洲程起鵬								7	9	4	17	15	5	57	
記事数の合計（本）	9	5	13	12	12	9	8	14	12	8	17	15	5	139	

掲載記事の内容から見ると、「廣東金礦之發見」、「清國於居留外國人及商店之數」のような「中国時務」に関する記事が 32 本、「日本製茶出口表」、「巴西土匪内變」のような「外国時務」に関する記事が 107 本ある。

上掲 3 紙はともに出典情報を残しているが、『集成報』は、新聞記事の場合「日設海事博覧会一訳東京朝日新聞」「日皇勅諭一訳東京時事新報」のように題目の下に新聞名のみを記録し、雑誌の場合は「日改税章一訳東京経済新報第六十冊」のように大まかに出典情報を記載した。一方、『実学報』「東文報訳」欄は『時務報』と同じように、「天気予報旗一訳日本神戸又新日報西八月二十五日」と訳文の題目の下に詳細な出典情報を記録している。

詳細な出典情報が備わっているおかげで、日本側のソース記事を探り出し、両国語の記事を対照することができる。しかし、出典情報がすべて正確であるかと言えば、実際はそうではないようである。そこから『実学報』のソース記事を再調査する必要性が生じてくる。

2.2 『実学報』訳文のソース記事の再調査

近代新聞の複製・出版は中日両国で行われているが、散逸したものもある⁶。近代という遠くなりつつある時代の記録を後世に伝えるためには、散逸する前に中国語に訳された新聞記事を網羅し、デジタル化・テキスト化する作業も⁷必要になる。この作業によって全文検索が可能になり、引用など再利用が容易になる。しかし、作業の前提条件としては、材料となる日中両国語の記事を見つけなければならない。

2.2.1 先行研究

『実学報』の出典記録によると、中国語に翻訳された日本の新聞・雑誌は 16 種である。

『大阪朝日新聞』	『大阪朝日新報』	『大阪時事新報』	『大阪毎日新聞』
『経済雑誌』	『神戸又新日報』	『時事新報』	『中外商業新報』

⁶ 例えば、『読売新聞』データベース 1897 年 9 月 13 日号は、4 頁と 5 頁が欠けている。北海道大学図書館所蔵『東京経済雑誌』は 1879-1885、1889-1891、1893-1923 の期間に編集されており、しかも蔵書は計 85 冊分が欠けている。『実学報』の翻訳対象となる 1897-1898 の間も 20 冊分欠けている。それぞれ 866、873、876-886、891、897、899、901-903、957 号である。

⁷ 作業手順として、まず、日本語原文記事と中国語訳文のデジタル化、つまり紙新聞のスキャンニング、『大阪朝日新聞』『東京朝日新聞』『大阪毎日新聞』『東京日日新聞』の記事の場合は現在公開している『朝日新聞』『毎日新聞』データベースから記事の画像を取る。そして、日本語と中国語で各記事内容を入力し、テキスト化する。

『中外商業報』 『東京経済雑誌』 『東京電報』 『東京日日新聞』
『東京日日新報』 『東京日日報』 『日本銀行半季報』 『日本報』

秦（2007）では、『大阪朝日新報』『中外商業報』が『大阪朝日新聞』『中外商業新報』の誤記と指摘し、14種に確定した。さらに、秦（2010a、2010b）では、『経済雑誌』『東京電報』『東京日日新報』『日本報』出典と記された記事の出典を指摘し、例えば、出典記録が「東京電報」と「日本報據紐約里拉羅道報」と記載された記事は『神戸又新日報』の掲載記事であり、原文記事の掲載紙を10種に確定した。なお、『銀行半季報』は実在しなかった新聞とし、出典が記載されなかった記事「下議院議長更迭」の出典は分からないままだった。

新聞記事のデジタル化作業を行うものとして、「聞蔵Ⅱビジュアル」「ヨミダス歴史館」「每索」データベースのほか、国立国語研究所の「近代語のコーパス」と神戸大学附属図書館「新聞記事文庫」がある。「近代語のコーパス」は『太陽』『明六雑誌』『国民之友』『女学雑誌』などの雑誌が中心で、しかも刊行の全期間からサンプル抽出した各冊を対象にした全文コーパスである。「新聞記事文庫」は明治末から昭和45年までの新聞を主に対象としたもので、一番古いものは明治44年である。『実学報』に翻訳された明治30年の新聞は取り扱われていない。

従って、筆者は『実学報』に翻訳された日本の新聞記事とその訳文のコーパスを構築する目的で、先行研究を踏まえ、『実学報』に翻訳された日本の新聞記事を調査することにした。

2.2.2 調査資料

筆者は下記の資料とデータベースを利用して、『実学報』「東文輯訳」欄に翻訳された日本の新聞記事を調査する。

『朝日新聞』データベース「聞蔵Ⅱビジュアル」：『大阪朝日新聞』『東京朝日新聞』
『毎日新聞』データベース「每索」：『大阪毎日新聞』『東京日日新聞』
『神戸又新日報』1897年 神戸大学所蔵
『東京経済雑誌』第893-896号 1897年 北海道大学所蔵
『時事新報』（復刻版）第16巻-（9） 1992年発行 龍溪書舎
『中外商業新報』（復刻版）第63巻 2005年発行 柏書房
『日本』（復刻版）第27巻 1989年発行 ゆまに書房

2.2.3 調査結果

2.2.3.1 実在しなかったとされた『日本銀行半季報』の発見

(1) 「日本銀行半季報告」

調査した結果、実在しなかったとされた『日本銀行半季報』は次のようにデジタル写真によって公開されたり、大学図書館に所蔵されたり、他の編纂書に収録されたりしていた。

なお、「日本銀行半季報告」とは、日本銀行が開業してから半季毎に決算報告を編集し、印刷に付して株主等に配布したものであり、「勘定の半季中における変動」「貸借対照表」「銀行券に関する貸借対照表」「国庫金勘定に関する貸借対照表」「銀行紙幣消却部勘定に関する貸借対照表」「損益勘定表」などから構成されている。明治 15 年下半季から昭和 16 年下半季まで、計 119 回発行され、明治以降における日本の金融・経済史の研究に重要な意味を持つ⁹。

① 近代デジタルコレクション公開

「日本銀行半季報」をキーワードで検索すると、大正 7 年分「日本銀行半季報告」（上半季と下半季）が近代デジタルコレクションで公開されていることが分かった。（図 2-1、2-2）



図 2-1 日本銀行第七十二回半季報告表紙

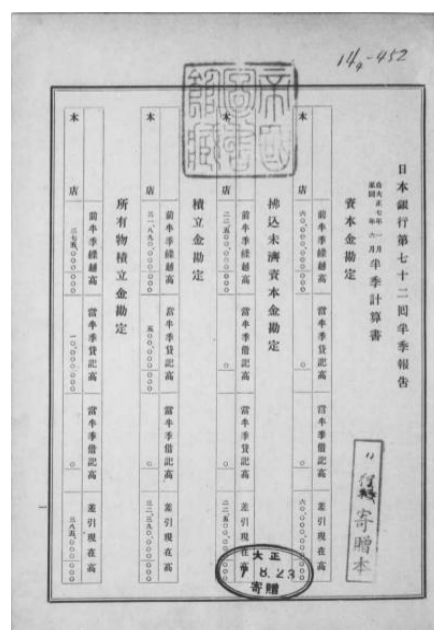


図 2-2 日本銀行第七十二回半季報告 1 頁

⁸ 『実学報』掲載の訳文について、タイトル、出典記録、冊数、頁数を挙げている。なお、頁数は 1991 年中華書局出版の影印本『実学報』による。以下同様。

⁹ 土屋喬雄（1956）『『日本銀行半季報告』解題』を参照。

② 原本の大学図書館の所蔵状況

慶應義塾図書館編『慶應義塾大学雑誌目録：和文編』（1967：113）によれば、慶應義塾大学には大正3年から大正14年までの「日本銀行半季報告」が所蔵されていることが分かる。さらに、慶應義塾図書館ウェブサイトで検索すると、大正3年から大正14年までの全期間ではないが、第65-74、81、82、87回と13冊の「日本銀行半季報告」が所蔵されていることが分かった。

また、CiNiiで検索すると、1894-1940年の報告書が「半季報告」¹⁰という書名で小樽商科大学（19冊）、東北大学（9冊）、長崎大学（4冊）、一橋大学（11冊）、龍谷大学（8冊）に所蔵されていることが分かった。1894-1941年の報告書が「日本銀行半季報告」という書名で小樽商科大学（8冊）、一橋大学（附属図書館26冊、経済研究所附属社会科学統計情報研究センター79冊）、大阪経済大学（6冊）、西南学院大学（12冊）、京都大学（32冊）に所蔵されていることが分かった。原本の所蔵状況を表2-5にまとめる。

表2-5 原本「日本銀行半季報告」の所蔵

所蔵大学	「半季報告」所蔵号	冊数	「日本銀行半季報告」所蔵号	冊数
慶應義塾大学			65-74、81、82、87	13
小樽商科大学	24、26、31-35、41-44、45、48、50、52、55、75、85、86	19	65、68-74	8
東北大学	108-116	9		
長崎大学	47、51、52、53	4		
一橋大学	51-61	11	23、26-29、31-39、41-47、49-50、52-54/39-117	26/ 79
龍谷大学	52、53、55-60	8		
大阪経済大学			109-112、114-115	6
西南学院大学			108-119	12
京都大学			86-117	32

③ 『日本金融史資料』への収録

¹⁰ タイトルについては、第1回-第2回が「半季実際報告書」、第3回-第7回が「日本銀行半季実際報告書」、第13回-第22回が「日本銀行半季決算報告」、第8回-第12回、第23回-第119回が「日本銀行半季報告」となっている。

原本のほかに、1956年『日本金融史資料 明治・大正編』（第8、9巻）と1963年『日本金融史資料 昭和編』（第5巻）収録「日本銀行半季報告」の復刻版がある。『日本金融史資料 明治・大正編』（第8、9巻）には、第1回（明治15年10月10日より年末まで）から第89回（大正15年/明治元年下半季）までを収録し、『日本金融史資料 昭和編』（第5巻）は第90回（昭和2年上半季）から第119回（昭和16年下半季）までを収録している。

半年ごとに一回報告書を出すため、1897年9月の新聞記事に出た報告書はその年の上半季報告のことであろう。第8巻581-607頁には「日本銀行第三十回計算書（明治30年1月1日至同年6月30日）」が収録され、即ち訳文で言及している「日本銀行半季報」である。

(2) 訳文の依拠記事

記事にした報告書は見つかったが、27頁もある報告書をそのまま中国語に翻訳、新聞に掲載するのは無理であろう。おそらく関係する日本の新聞記事を基に翻訳するか、その報告書を読んで短くまとめ、翻訳したのだろう。『実学報』の出典記録の時期「1897年8月24日」を手掛かりにして調べた結果、その日に出版された『大阪毎日新聞』の3頁に「日本銀行の貸附割引高」という記事が見つかった。さらに、照合した結果、中国語訳の冒頭以外、内容が一致していたため、『大阪毎日新聞』のこの記事が依拠記事であると考えられる。（図2-3）

三十一年六月末
廿九年六月末

項目	三十一年六月末	廿九年六月末
定期貸	3,000,000	1,000,000
当座貸越	1,000,000	500,000
割引手形	1,000,000	500,000
合計	5,000,000	2,000,000

図 2-3 『大阪毎日新聞』1897年8月24日3頁掲載「日本銀行の貸附割引高」

図 2-3 の一部を翻刻すれば次のとおりである（振り仮名を省く）。

「日本銀行の貸附割引高」昨今兩年度に於ける六月三十日現在の日本銀行本支店及び出張所の定期貸、当座貸越、割引手形の総金額を比較対照するに左の如し
(中略)

此の如く定期貸に於ては千三百万余円、割引手形に於ては千二百余万円を増加し而して当座貸越に於ては却て三百万余円を減少せしと雖も総額に於ては二千二百三十万余円を増加したるなり

次に、中国語訳の冒頭部分を見よう。

前二十一日、日本銀行第三十回股東總會情形、並銀行所得利益、若何分配之處、已張貼於電報欄内。日本凡新到電報、皆張貼通衢、外設柵欄以護之。

筆者訳：(8月)21日に開かれた日本銀行第30回株主總會の状況、並びに銀行の利益、利益分配案は「電報」欄に掲載している。日本は新着電報をまず貼って周知させ、別に記事を付けてそれを補足する。

中国語訳のみにあり、説明的な記述であるため、翻訳者が『大阪毎日新聞』掲載記事を翻訳した上、関係資料か新聞記事を基にして自分なりの言葉で付け加えた冒頭であると考えられる。内容から見れば、翻訳した際、翻訳者はある新聞の「電報」欄を参考し、関係内容を a「總會の状況」、b「銀行の損益」、c「利益分配案」の3点にまとめている。また、読者に分かりやすくするために、小文字で日本の新聞掲載ルールの紹介も加えている。

次に、参考記事について調べると、下記の関係記事があることが分かった。

- ①『東京朝日新聞』1897年8月20日2頁掲載「日本銀行總會」
- ②『東京朝日新聞』1897年8月22日2頁掲載「日本銀行總會」
- ③『東京日日新聞』1897年8月22日6頁掲載「日本銀行の定式總會」
- ④『大阪毎日新聞』1897年8月23日3頁掲載「日本銀行の株式總會」
- ⑤『大阪毎日新聞』1897年8月23日1頁「電報」欄掲載「日本銀行の總會」

内容を照合した結果、『東京朝日新聞』1897年8月20日掲載記事①は開会の予告で、1897年8月22日掲載記事②は冒頭内容のacの内容があるが、bについては触れていない。『東京日日新聞』掲載記事③はabcの内容をすべて含み、『大阪毎日新聞』掲載記事④はaを、「電報」欄に掲載された⑤はbcを含み、両方とも冒頭の参考記事になり得る。図3に示した『大阪毎日新聞』1897年8月24日掲載の「日本銀行の貸附割引高」が中国語訳文の依拠記事であるため、『大阪毎日新聞』掲載記事④⑤が冒頭内容の参考記事である可能性が高い。従って、『実学報』第4冊掲載の「銀行會計」訳文の出典は単一の記事ではなく、『大阪毎日新聞』1897年8月22、23、24日の記事と電報内容を参照してまとめたものであろう。

2.2.3.2 出典未記述の記事のソース記事の発見

『実学報』に掲載された日本の新聞記事の中国語訳 139 本のうち、出典記述がないものが 1 本のみ存する。それは第 4 冊掲載「下議院議長更迭」である。訳文の中に「日日新報」が記載されているので、それを手掛かりにして『東京日日新聞』を調べた結果、1897 年 8 月 31 日の 2 頁に掲載の「衆議院議長更迭説」という記事が見つかった。対照した結果、ソース記事の内容がほとんど訳出されているため、『東京日日新聞』のこの記事を下議院議長更迭の依拠記事とする。(図 2-4、2-5)

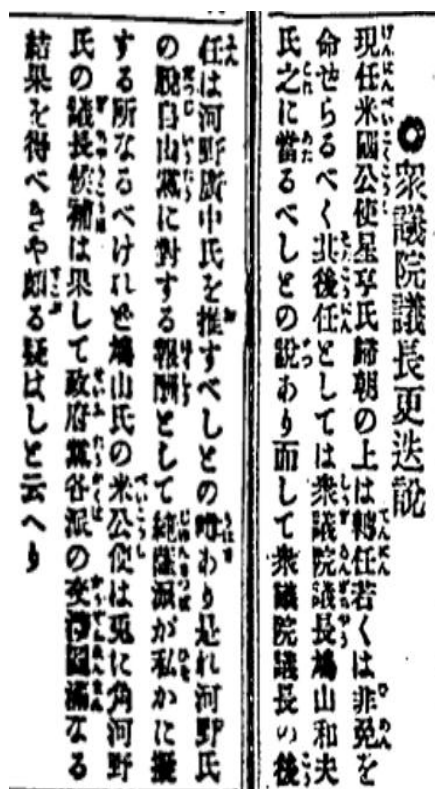


図 2-4 『東京日日新聞』明治 30 年 8 月 31 日 2 頁
掲載「衆議院議長更迭説」

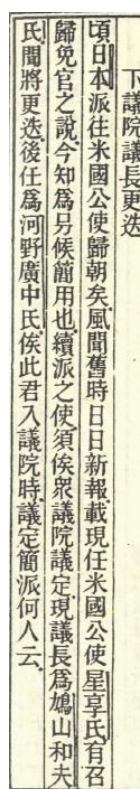


図 2-5 『実学報』第 4 冊 242 頁掲載
「下議院議長更迭」

図 2-4 を翻刻すれば次のとおりである（振り仮名を省く）。

「衆議院議長更迭説」現任米国公使星亨氏帰朝の上は転任若くは非免を命ぜらるべく其後任としては衆議院議長鳩山和夫氏之に當るべしとの説あり而して衆議院議長の後任は河野広中氏を推すべしとの噂あり是れ河野氏の脱自由党に対する報酬として純薩派が私かに擬する所なるべけれど鳩山氏の米公使は兎に角河野氏の議長候補は果して政府党各派の交渉円満なる結果を得べきや頗る疑はしと云へり

図 2-5 を翻刻すれば次のとおりである。(下線、句読点は原文のまま。)

<下議院議長更迭>頃日本派往米國公使歸朝矣。風聞舊時日日新報。載現任米國公使星亨氏。有召歸免官之說。今知爲另候簡用也。續派之使。須俟眾議院議定。現議長爲鳩山和夫氏。聞將更迭。後任爲河野廣中氏。俟此君入議院時。議定簡派何人云。

2.2.3.3 出典記録の間違いの修正

『実学報』中国語訳の出典記録に、「大阪朝日新聞」「時事新報」を「大阪朝日新報」「時事新聞」と付けたように、「新報」と「新聞」とが類似した表現であるため、何箇所か混用されている。出典記録に「東京電報」と「日本報據紐約里拉羅道報」と記載された記事は『神戸又新日報』が出典であり、『経済雑誌』が『東京経済雑誌』であることは秦(2010b)で指摘されている。これらのことを踏まえて、今回、出典記録の確認を行ったところ、新たに紙名と発行日の間違いを見出したので、それらを表 2-6 のとおりまとめた。表 2-6 は中国語の記事名、『実学報』出典記録(間違いの箇所¹に下線)、正確な出典情報(訂正部分のみ)、日本語の記事名を順に示した。

表 2-6 『実学報』出典記録の間違いと訂正

記事名(中国語)	出典記録	正確な出典情報	記事名(日本語)
小學生徒	<u>大阪時事新報</u> 日本9月8日	時事新報	小学生徒
議設職工同病院	<u>大阪時事新報</u> 日本9月7日	時事新報	職工の爲めに共同病院を設けよ
西班牙首相遭難顛末	<u>大阪毎日新聞</u> 西9月2日	大阪朝日新聞	遭難顛末(西班牙首相)
日紗近價	<u>大阪朝日新聞</u> 西9月3日	大阪毎日新聞	上海綿糸市況週報(自八月廿一日至廿七日)
本年世界之産金見積數	<u>東京日日新聞</u> 西9月11日	日本	世界の産金見積高
幼年學校	<u>大阪朝日新聞</u> 西9月2日	9月1日	幼年学校
臺南知事	<u>時事新報</u> 西9月12日	9月9日	臺南の物品陳列場
陸奥大臣事跡	<u>大阪朝日新聞</u> 西8月26日	神戸又新日報 8月26日	陸奥伯墓ず
清國湖北之棉市好況	<u>東京日日新聞</u> 西9月19日	東京朝日新聞 9月16日	支那の茶と絲

特に注意すべきことは、「陸奥大臣事跡」と「幼年學校」である。前者は『実学報』の出典記録によると、『大阪朝日新聞』1897年8月26日3頁では「陸奥伯傳(承前)」となってい

るが、内容を対照すると大きく異なる。『東京朝日新聞』1897年8月25日の「陸奥伯逝く」と26日の「陸奥伯在官履歴（承前）」があり、陳（2017a）ではソース記事としたが、冒頭部分の原文が見つからなかった。『神戸又新日報』のほうが訳文冒頭部分、本文部分とも合うため依拠記事としたい。なお、後者の出典記録によって、『大阪朝日新聞』9月2日に「幼年學校」という記事があったが、訳文と内容を照合した結果、同紙9月1日掲載「幼年學校」が翻訳の依拠記事であることが分かった。

2.2.3.4 類似度の高い記事の掲載

新聞は世界やある地域で発生した大きな出来事に注目し、すばやく報道するものである。各新聞の間に同じ出来事を扱う記事があるのも当然のことだろう。しかし、今回の調査で、ただ同じ出来事を扱っているというわけではなく、出来事に関する記事の内容もほぼ同じであるということが分かった。例を挙げながら具体的に見よう。

例1 「廣東金礦發見」	譯中外商業新報西9月14日	第6冊	363-364頁
「廣東金礦之發見」	譯中外商業新報西9月14日	第14冊	873-874頁

『実学報』の「廣東金礦發見」「廣東金礦之發見」は同じ日本の新聞記事を基に翻訳したものである。「中外商業新報西9月14日」と出典を記しているが、『中外商業新報』1897年9月14日2頁掲載「廣東金の礦發見」のほか、『東京朝日新聞』1897年9月15日2頁に「廣東の金鑛發見」が掲載されている。ほぼ同じ内容で、文の配列順序を変えたのみである。さらに、『時事新報』1897年9月14日2頁に『中外商業新報』と漢字や、振り仮名が数箇所程度異なる記事「廣東金鑛の發見」も見つかった。内容だけを検証すると、両訳文は『東京朝日新聞』か『時事新報』の記事を本に訳したと考えられる。類似度の高い記事があるにも関わらず、この2本の訳文は、日本語原文と一致していて、訳文の出典記録にも間違いがないので、ソース記事の掲載紙は『中外商業新報』として問題ないだろう。

次に、3本の類似記事の関係を見よう。『時事新報』の記事は『中外商業新報』と同じ日付で、タイトル、文の配列、内容もほぼ同じであるため、両新聞に掲載された記事は同じ作者による可能性が高い。また、『東京朝日新聞』が1日遅れて出版され、前日の『中外商業新報』か『時事新報』を参照して書いた可能性が高い。（各記事の異なる箇所を下線を付す。）

「廣東金鑛の發見」近頃清國廣東省城より派遣せられたる礦務委員莊鶴清及聶、楊兩鑛山技師の一行は德慶州開建縣管下の涌流地方に於て精良なる金鑛脈を發見したる由なるが試験の結果は鑛一擔に付き最上なるは所得金價洋銀五十弗に當り最下なるは同洋銀七八弗に當る由にて同省官吏は差當り官民合資を以て株金三十萬弗の會社を組織するの計

畫を為し該委員及技師は再び同地方に出張したる由、尚廣西の蒼梧縣に連亘して涌北卡、水黎、老金、雞山等の地方一帶均しく金礦に富めりと云ふ

『中外商業新報』1897年9月14日2頁掲載

「廣東の金鑛発見」清國廣東省城德慶州開建縣管下の涌流地方に於て精良なる金鑛脈を発見せり廣西の蒼梧縣に連亘して涌北卡、水黎、老金、雞山等の地方一帶均しく金鑛に富めり試験の結果は鑛一擔に付最上なるは所得金價洋銀五十弗に當り最下なるは同洋銀七八弗に當る同省官吏は差當り官民合資を以て株金三十萬弗の會社を組織するの計畫を為し該委員技師出張せり

『東京朝日新聞』1897年9月15日2頁掲載

「廣東金鑛の発見」近頃廣東省城より派遣せられたる礦務委員莊鶴清及聶、楊兩礦山技師の一行は德慶州開建縣管下の涌流地方に於て精良なる金鑛脈を発見したり試験の結果は鑛一擔に付き最上なるは所得金價洋銀五十弗に當り最下なるは同洋銀七八弗に當る由にて同省官吏は差當り官民合資を以て株金三十萬弗の會社を組織するの計畫を為し該委員及び技師は再び同地方に出張したり尚ほ同地は廣西の蒼梧縣に連亘して涌北卡、水黎、老金、雞山等の地方一帶均しく金鑛に富めりと云ふ

『時事新報』1897年9月14日4頁掲載

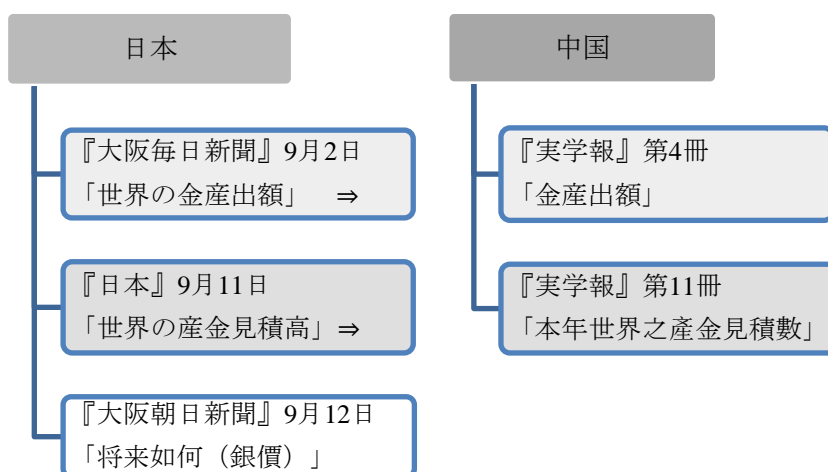
例2 「本年世界之産金見積數」 譯東京日日新聞西9月11日 第11冊 671頁

「本年世界之産金見積數」は「東京日日新聞西9月11日」と出典を記しているが、『東京日日新聞』では見当たらず、『日本』9月11日4頁と『大阪朝日新聞』9月12日6頁に類似した内容の記事が見つかった。中国語訳と対照して見ると、『日本』はタイトル、記事の長さ、内容、言葉遣いの面では、いずれも訳文に近く、『大阪朝日新聞』はタイトルも記事の長さも大きく違っており、内容的には記事の後半部分が訳文と合うが、言葉遣いの類似度は『日本』より低い。従って、9月11日の『日本』に掲載された「世界の産金見積高」が『実学報』のソース記事である可能性が高い。つまり、『日本』は『実学報』の訳文のソース記事、或いはソース記事に類似した記事の掲載紙として考えられる。

ここに1つの問題が残った。『実学報』の139本の訳文の出典記述には、1回も『日本』という雑誌が出ていなかった。もし本当に『日本』が翻訳者の翻訳の手本なら、1回という低頻度もほかの新聞と違って特別だと言える。同時代の『時務報』も『日本』から記事を選び、翻訳したが、1897年3月と4月に集中しているため、果たして『日本』はどのような経緯で『実学報』の翻訳者の手に入ったのか、そのルートも問題になる。

もし別のものが翻訳の手本なら、それは何だろうか。時間を遡って調べると、『大阪毎日新聞』9月2日3頁掲載の「世界の金産出額」が見つかった。『日本』掲載の「世界の産金見積高」と対照した結果、振り仮名と用語の違いが何箇所かあるのみである。時間的には『大阪毎日新聞』が先だったため、『日本』及び『大阪朝日新聞』の記事に参照された可能性が高い。訳文と対照して見ると、対応度の高い『日本』の掲載記事がソース記事として考えられる。

ちなみに、『大阪毎日新聞』掲載の「世界の金産出額」は一步早く中国語に訳され、その翻訳記事は『実学報』第4冊に掲載された「金産出額」である。従って、中国語訳の「金産出額」と「本年世界之産金見積數」も非常に類似した記事になった。以上の各新聞と記事の関係は次のようにまとめられる。



例3 「臺南知事」 譯時事新報西9月12日 第14冊 867頁

「臺南知事」のソース記事に関して、『大阪朝日新聞』『東京日日新聞』『日本』と『時事新報』に非常に類似した記事が5本あることが分かった。訳文の一文「磯貝静蔵氏昨日午後六點鐘来京」のみがいずれの記事でも見つからず、この欠けた記事以外の内容から判断すると、類似記事をすべて参照したとは言えないが、恐らく複数の記事を参考にして翻訳したのだろう。以上の考察から、『実学報』の出典記録「時事新報西9月12日」は誤りである。また、「臺南知事」の記事にある「磯貝静蔵氏昨日午後六點鐘来京」に触れている内容がある日本の新聞記事が見つかるまでは、出典記録について、同じ『時事新報』という点から「時事新報西9月9日」とする。

ほかに、「美國殖民地產物」「清國於居留外國人及商店之數」も『実学報』の出典記録以外の新聞から非常に類似した記事が見つかったが、『実学報』の出典記録に間違いがなく、記事内容の対照関係も成立するため、出典記録の記事を翻訳の手本とする。

今回の調査で類似度の高い記事情報をまとめると、表2-7のとおりである。

表 2-7 日本新聞の類似記事の掲載情報

記事名（中国語）	出典記録	類似記事の出典情報	記事名（日本語）
廣東金礦發見/ 廣東金礦之發見	中外商業新報 西 9 月 14 日	a.東京朝日新聞 9 月 15 日 b.時事新報 9 月 14 日	a.廣東の金鑛發見 b.廣東金鑛の發見
本年世界之產金見 積數/金產出額	東京日日新聞 西 9 月 11 日*	a.日本 9 月 11 日 b.大阪朝日新聞 9 月 12 日 c.大阪毎日新聞 9 月 2 日	a.世界の産金見積高 b.将来如何（銀價） c.世界の金産出額
臺南知事	時事新報 西 9 月 12 日*	a.時事新報 9 月 9 日 b.日本 9 月 9 日 c.大阪朝日新聞 9 月 11 日 d.大阪朝日新聞 9 月 12 日 e.東京日日新聞 9 月 11 日	a.臺南の物品陳列場 b.臺南縣物品陳列場 c.物品陳列（臺南縣） d.出品勧誘 e.臺南縣の物品陳列
幼年學校	大阪朝日新聞 西 9 月 2 日*	大阪朝日新聞 9 月 1 日	幼年学校
德國帆船	大阪朝日新聞 西 9 月 16 日	a.東京日日新聞 9 月 11 日 b.日本 9 月 11 日	a.世界の最大帆船 b.同上
美國殖民地產物	東京日日新聞 日本 9 月 12 日	日本 9 月 12 日	墨國殖民地の産物
清國於居留外國人 及商店之數	東京經濟雜誌 西 9 月 11 日	日本 9 月 11 日	支那居留外國人及其商 店の数
德國新出名礮	日本神戸又新日報 西 8 月 25 日	東京朝日新聞 8 月 23 日	獨逸の新發明砲
歐美諸國之酏醉者 禁遏法	東京日日新聞 西 9 月 11 日	東京朝日新聞 9 月 11 日	酏醉者禁遏法
田結領事	東京日日新聞 西 9 月 12 日	東京朝日新聞 9 月 11 日	芝罘新領事赴任期

注：*印の付いている記事は出典記述の不正確記事である。

各新聞に掲載された類似度の高い記事の発見により、紙面が汚れた記事を明瞭に判読でき、日本語原文記事の出典を掘り出すこともできる。例えば、「德国帆船」の出典は『東京朝日新聞』9月16日掲載の「世界の最大帆船」であるが、紙面に墨の汚れで判読しづらい。『日本』『東京日日新聞』に掲載された類似記事によって、その内容を明瞭に判読できたうえ、『東京日日新聞』掲載記事の最後に「本年七月六日の露国官報に見ゆ」という記述がある。その記述から「世界の最大帆船」という記事はロシア官報掲載記事の日本語訳であることが分かる。

2.3 『実学報』に翻訳された日本の新聞記事

同一日本の新聞記事を元に翻訳されたものが2本あるため、中国語訳文が139本あるのに対して、ソースとなる日本の新聞記事は138本ある。つまり、『実学報』「東文報訳」欄の翻訳を通して、138本の日本の新聞記事が中国社会に提供された。先行研究と今回の調査結果を合わせて、『実学報』に翻訳された日本の新聞記事の特徴は次のようにまとめられる。

- ① 『実学報』の出典記録に挙げたの日本の新聞は16種類ある。秦（2007、2010a、2010b）の調査によって、ソース記事の掲載紙を10種類に確定していた。今回の調査では、『大阪時事新報』『東京日日報』『日本銀行半季報』出典と誤記された記事を見つけ、さらに3種類の新聞が減って7種類になった。一方、『大阪朝日新報』『東京日日新聞』と記された「陸奥大臣事跡」「清國湖北之棉市好況」の出典は『神戸又新日報』『東京朝日新聞』に確定でき、また、出典記録や先行研究で言及されなかった『日本』の掲載記事を「本年世界之産金見積数」の依拠記事と決定したため、ソース記事の掲載紙は2種類増えて、最終的には、『実学報』訳文のソース記事の掲載紙数は9種類と確定した。具体的な分布状況は表2-8のとおりである。

表 2-8 『実学報』訳文のソース記事の掲載紙と分布

冊数 新聞名	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	合計
大阪朝日新聞		4	5	1	2	3	2	5	3	3	1	5		34
大阪毎日新聞			7	3										10
神戸又新日報	9	1												10
時事新報				4	6	1	2	3	5	1	4	8	1	35
中外商業新報 ¹¹					1	1		3	1		4	1	2	13
東京朝日新聞											1			1
東京経済雑誌				1	2	1	1			3	1			9
東京日日新聞			1	3	1	3	3	3	3		6	1	1	25
日本										1				1
合計	9	5	13	12	12	9	8	14	12	8	17	15	4	138

¹¹ 『中外商業新報』掲載「広東金鉱の発見」が第6冊と第14冊に訳されたが、本表の統計の際、第6冊のソース記事とする。

- ② 日本語記事の掲載日は 1897 年 8 月から 10 月までの間で、一番古いものは 8 月 21 日発行で、一番新しいものは 10 月 2 日発行の新聞である。月別に数えると、8 月分は 17 本 (12.3%)、9 月分は 118 本 (85.5%)、10 月分は 3 本 (2.2%) と 9 月に集中している。それは当時の交通が不便であったことが原因となって、新聞が入手しにくい状況であったためであろう。
- ③ 中国語訳文を翻訳者別で考察すると、表 2-9 の通り、『神戸又新日報』(10 本)の記事はすべて王宗海によって口頭で訳され、王仁俊の筆述で翻訳された。『大阪毎日新聞』(10 本)の記事はすべて王宗海によって口頭で訳されたが、孫福保の筆述で翻訳された。その後孫、程両氏は主に『時事新報』『大阪朝日新聞』『中外商業新報』『東京日日新聞』『東京経済雑誌』の記事の翻訳を行った。後期になると、程起鵬氏の手元に稀であるが、『東京朝日新聞』『日本』の記事も入ったと考えられる。

表 2-9 『実学報』のソース記事の翻訳者別分布

翻訳者 新聞名	王宗海口訳 王仁俊/孫福保筆述	孫福保訳	程起鵬訳	合計
大阪朝日新聞	(王) 4 (孫) 6	12	12	34
大阪毎日新聞	(孫) 10			10
神戸又新日報	(王) 10			10
時事新報	(孫) 4	11	20	35
中外商業新報		5	9	14
東京朝日新聞			1	1
東京経済雑誌	(孫) 1	5	3	9
東京日日新聞	(孫) 4	10	11	25
日本			1	1
合計	39	43	57	139

- ④ 訳文は大体日本の新聞発行にそって翻訳、掲載された。翻訳スピードから見ると、一番速いものと一番遅いものはそれぞれ「德國新出明礮」13 日間、「清艦沈没」66 日間である。ほかの大多数は「幼年学校」のように、日本で発行されてから中国で訳出・掲載されるまで 1 ヶ月前後の時間がかかっている。

「德國新出明礮」：『神戸又新日報』8 月 25 日——『実学報』9 月 7 日 (旧暦 8 月 11 日発)

「幼年学校」：『大阪朝日新聞』9 月 1 日——『実学報』9 月 26 日 (旧暦 9 月 1 日発)

「清艦沈没」：『大阪朝日新聞』9 月 29 日——『実学報』12 月 4 日 (旧暦 11 月 11 日発)

- ⑤ 翻訳者が正確な出典情報を書いたおかげで、遡って当時の日本の新聞記事を見つけることができる。複数の参考記事があっても 1 本のみを出典として記したり、当時の日本の各新聞記事に非常に類似した記事があったため、依拠記事を誤認することもあった。今回の調査で出典不記載の情報や出典誤記に対して正しい出典を添え、今後の研究に便宜を図ることができた。

2.4 まとめ

本章は先行研究と実地調査を基にして、『実学報』の書誌情報を補い、ソース記事及びその掲載紙を確定できた。19 世紀末期の中日間が交通不便であった状況の中、ソース記事の掲載時期が 1897 年 9 月に集中していたが、『実学報』は 9 種類の日本の新聞から 138 本の日本語記事を翻訳し、中国社会に紹介した。今回の調査を通して、出典記録のない記事のソース記事を見つけ、出典記述の間違いを訂正したほか、当時の日本の新聞の間にあった非常に類似した記事も発見したことは、翻訳の正確な依拠記事の認定、及び今後のデータベース構築・テキスト化にも資することであった。

第3章 同一記事の翻訳から見る翻訳者の用語傾向

『実学報』に掲載された日本の新聞記事の訳文 139 本のうち、広東省にある金鉱の発見を内容とする二人の翻訳者による訳文がある。2本の訳文の所在情報は下記のとおりである。

「廣東金礦発見」	第6冊	呉鼎孫福保訳	東報輯訳欄	(実学報 1991 : 363-364)
「廣東金礦之発見」	第14冊	長洲程起鵬訳	東報訳補欄	(実学報 1991 : 873-874)

両訳文の題目の下には「譯中外商業新報西九月十四日」とソースの日本の新聞原文出典も明記している。よって日本語の原文記事は明治 30 年 9 月 14 日の『中外商業新報』2 頁に掲載されている「廣東金礦の発見」であることが分かった¹²。139 本の訳文のうち同じソースを元にしたのはこの 2 本のみであり、この重複には次のような理由が考えられる。①「廣東金礦の発見」という記事を読者に繰り返し読ませる重要性。②教養の異なる読者層のために、わざと同じ日本語新聞記事を二人の翻訳者に翻訳させる必要性。③職員の校閲不足による重複。刊行当時の具体的な状況についてはいまだはっきり分らないが、このような重複が当時の中国人翻訳者の翻訳に対する態度、訳し方の相違点や、日本の新聞の中国語翻訳に対する方針などを見るために重要な資料になると考えられる。

『実学報』における日本の新聞記事の翻訳について、秦 (2008) は『東京日日新聞』に掲載された日本語記事「清国膠州湾」を取り上げ、『時務報』の古城貞吉と『実学報』の程起鵬による 2 種類の中国語訳文を原文と対照し、古城氏と程氏の新漢字語の使用状況、訳文と原文との関わり、両氏の訳し方、翻訳の正確性などを分析している。両誌には「軍港」、「外交官」、「技師」などの新漢字語の使用が確認でき、程氏が原誌の日本語記事の語彙を忠実に使用しているが、漢文に造詣の深い古城氏の方がより正確な翻訳であることを明らかにしている。ただし、『実学報』に同一日本の新聞記事を手本にした 2 本の訳文が存したことには気づかなかったようである。

氏の論文からヒントを受け、本章では、『実学報』に掲載された日本語記事を同一とする孫福保・程起鵬両氏の中国語訳の記事を研究対象にして、日本語原文と中国語訳と対照し、中日同形語の観点から、漢字表現・語彙表現・文単位で二者の翻訳の特徴、用語傾向を分析したい。

¹² このほか、『東京朝日新聞』1897年9月15日2頁に掲載された「廣東の金礦発見」と『時事新報』1897年9月14日2頁に掲載された「廣東金礦の発見」と非常に類似した記事も見つかった。前節 2.2 を参照。

3.1 『中外商業新報』掲載記事

前節 2.3 の表 2-8 で示したように、『実学報』のソースとなる記事の掲載新聞は多い順に挙げると、『時事新報』（35 本）、『大阪朝日新聞』（34 本）、『東京日日新聞』（25 本）、『中外商業新報』（13 本）、『神戸又新日報』（10 本）、『大阪毎日新聞』（10 本）、『東京経済雑誌』（9 本）、『東京朝日新聞』（1 本）、『日本』（1 本）である。『中外商業新報』は『大阪朝日新聞』『時事新報』『東京日日新聞』に続き、4 番目に『実学報』に多くソースを提供している日本語記事の新聞である。

『中外商業新報』（日刊紙）は、1889 年（明治 22 年）1 月 27 日創刊、1942 年（昭和 17 年）10 月 31 日廃刊の経済新聞である。前身は「中外物価新報」で、現在の『日本経済新聞』である。『毎日新聞』『東京日日新聞』『報知新聞』『読売新聞』と合わせて、明治 30 年代の東京の主要新聞の一つである（西田 1961：237）。『実学報』は 14 本の翻訳記事が『中外商業新報』に由来している。14 本の訳文に関する情報は表 3-1 のとおりである。

表 3-1 『実学報』に掲載された『中外商業新報』に由来する翻訳記事リスト

番号	記事名（中国語）	所在冊	記事名（日本語）	出典記録
1	廣東金礦發見	6	廣東金礦の發見	中外商業新報西 9 月 14 日
2	八重山群島開拓之好望	7	八重山群島開拓の好望	中外商業新報西 9 月 25 日
3	視察倉庫	9	倉庫業視察談	中外商業新報西 9 月 25 日
4	德國大水	9	獨逸の大洪水	中外商業新報西 9 月 17 日
5	濠州物産	9	濠洲タンズビルの事情	中外商業報西 9 月 25 日
6	松方入仕内閣之一週年	10	松方内閣の一週年	中外商業新報西 9 月 19 日
7	凶漢橫行	12	兇漢暴行	中外商業新報西 9 月 25 日
8	日本増加郵便電信税	12	郵便電信料引上と鐵道運賃引上	中外商業新報西 9 月 28 日
9	關東於製鹽業之計劃	12	關東に於ける製鹽業の計畫	中外商業新報西 9 月 26 日
10	日本禁止圓銀通用及短縮改換限期	12	円銀通用禁止と引換期限短縮	中外商業新報西 9 月 26 日
11	上海整理棉花事業	13	上海に於ける棉花荷造改良事業	中外商業新報西 9 月 14 日
12	視察西比利亞地方茶業	14	西比利亞地方茶業視察の結果（再び）	中外商業新報西 9 月 25 日
13	清國之大炭田	14	清國に於ける大炭田	中外商業新報西 9 月 14 日
14	廣東金礦之發見	14	廣東金礦の發見	中外商業新報西 9 月 14 日

上記 14 本のうち「中国時務」に関する記事が 4 本（番号 1、11、13、14）、「外国時務」に関する記事が 10 本ある。刊行時期から見ると、明治 31 年 9 月 14 日から 28 日までの間に集中している。当時日本新聞が入手しにくかった状況がわかるだろう。

3.2 漢字、語彙、文単位の考察

3.2.1 漢字単位の考察

孫福保・程起鵬両氏の中国語訳文と日本語記事の内容を対照すると、語彙的差異のほか、漢字表記においても差異が存する。原文と訳文の間のみでなく、両訳文の間でも漢字表記に差異がある。従って、漢字表記に見える差異は、当時の中日両国の新聞における漢字の使用状況などが伺える。当時の中国と日本がともに旧字体を使用していたことは周知のことであるが、漢字表記の差異が語形の異同判定にも影響している可能性がある。従って、まず漢字表記の差異を明確にする。本節では、漢字一文字を単位にして、表 3-2 の 5 組の漢字表記のずれを挙げて説明する。各漢字の字体注記、意義などを考察する際、中国語側は『説文解字』『康熙字典』、日本語側は『大漢和辞典』『大字典』などを利用した。

表 3-2 二者の訳文と日本語原文における漢字表記の異同

孫福保訳	程起鵬訳	原文記事
礦	礦	礦、鑛
湧	涌	涌
驗	驗	驗
貲	資	資
圓、元	圓	弗

(1) 異体字と俗字の使用

まず、「礦」と「鑛」を例に、中国語訳ではすべて「礦」で、日本語原文では「礦」（3ヶ所）、「鑛」（2ヶ所）両方を用いている。しかも、「礦山」「金礦」「金鑛脈」のように、区別なく混用されている傾向がある。「礦」「鑛」について辞書を調べると、次のような記述がある。

『説文解字』:

礦：銅鐵樸石也。从石黃聲，讀若礦。卅，古文礦。《周禮》有卅人。古猛切

『康熙字典』:

礦：《集韻》同鑛。《周禮・地官・卅人註》卅之言礦也。金玉未成器曰礦。《郭璞・江賦》其下則金礦丹礫。又谷名。《水經注》倚亳川水，出北山礦谷。

鑛：[古文] 鉗《集韻》古猛切、音愨。鑛、鐵也。又金璞也。《王褒・四子講德論》精練藏於鑛朴。

『説文解字』では「鑛」「礦」が見出しとされず、「礦」の字に「古文礦」とあり、「礦」と「鑛」は同じものであることが分かる。『康熙字典』「礦」の注文からも「礦」と同じものであることが記されるが、字体注に「鑛」が現れなかった。一方、「鑛」の注文に「鐵也。又金璞也」の意味が「礦」と同じであるため、「鑛」と「礦」も同じものとし、つまり「鑛」と「鑛」が異体字の可能性はある。さらに、『中華大字典』で確認したところ、「礦」の字の字体注に「①同卅、②同鑛、③同研」「《文選王褒論》精鐵練藏於鑛朴。[注]礦與鑛同」と明記され、「礦」と「鑛」の異体関係が明らかであろう。

『大字典』:

礦：8081①アラガネ（名）②石ノ名 鑛 鑛同字

字源：形聲。もと礦とかく 銅鐵等の未だ石と混じたるもの アラガネ。故に石扁。

廣（クワウ）は音符。今は又金扁にもかく。熟語は鑛（12672）を見よ。

鑛：12672 鑛に同じ。

日本語側の『大字典』では同字だと明記しており、「鑛」はもともと「礦」と書くが、今は「鑛」とも書くことから「礦」と「鑛」の異体関係が中国語と一致している。

また、熟語 10 語（鑛山、鑛夫、鑛水、鑛石、鑛物、鑛床、鑛泉、鑛毒、鑛脈、鑛區）が全部「鑛」の項目の下に挙げられているように、当時は異体字として「礦」「鑛」併用されたが、「鑛」に偏って、現代になって「鉞」に統一されたのではないかと思われる。一方、翻訳する際、両氏がともに「鑛」を「礦」に直し、現代中国語で「礦（矿）」に統一されているのと繋がっていると思われる。

「礦」と「鑛」は中日両方とも異体字であるため、考察する際、同じ字だと認識する。ただ孫福保と程起鵬は同じ「礦」を用い、原文記事は「礦」と「鑛」の両方を用いた。異体字とされた「礦」と「鑛」は日本語で「鑛」、中国語で「礦」と別れる傾向が見られるだろう。

上記の方法で、「湧」と「涌」、「資」と「資」、「湧」と「涌」も注記内容によって異体関係を確認し、同じ字だとする。また、『康熙字典』に「驗：俗驗字」とあって、「驗」が「驗」の俗字だとする。

翻訳の際、日本語原文の「鑛」と違って、孫氏と程氏が「礦」を用いた。そして、程氏が日本語の原文通りに「涌」「驗」「資」を、孫氏が俗字「驗」、異体字「湧」「資」を用いた。

(2) 外来語の漢字表記の翻訳

通貨の単位として、旧字体「圓」は現代中国語では「圓」で、貨幣に印刷されている。普段は簡略字として「元」を使用する。「弗」はアメリカ、カナダ、オーストラリア、シンガポールなどの通貨単位のドルの記号に当てられるもので、多くはアメリカドルのことをいう。中国ではこの用法がない。外来語ドルの当て字「弗」の訳語として、程氏が「圓」を、孫氏が「圓、元」を使用した。

それでは、「圓」と「元」を見てみよう。二者の訳文では貨幣の単位を表す助数詞「圓」「元」の両方とも使用されていた。範囲を広げて翻訳記事の用字選択を考察すれば、『実学報』の他の記事でも同じ傾向が見られる。例えば、「台湾現存鉄路進欸」では日本語原文の「圓」10ヶ所を「元」にし、「予算増税」では「圓」にした。一方、『実学報』の定価として「每冊取紙印費洋一角五分、定全年者洋四元五角、先付者四元、郵局費另加」（筆者訳：每冊紙と印刷費洋銀一角五分を取り、一年分予約すれば四元五角で、前払いは四元で、輸送料は別である）と2冊目から表紙に印刷されている。そして、「本館告白」の「本館附售書目」に挙げられている書籍の定価も全て「朱子年譜四本二元 一切経音義一元二角」のように「元」を使用していた。

以上のように、翻訳する際、程氏は日本語の字形を継承する傾向があるのに対し、孫氏は俗字体や異体字を使用する傾向がある。日本語原文の「鑛」「弗」を用いず、両氏とも中国で通用するものを用いた。程氏と孫氏が俗字、異体字を併用するのは、当時の中日両国の新聞の用字に関する特徴であるとも考えられる。また、このような漢字の使用状況は現代日本語の「鉞」と中国語の「矿」へと変化する過程でもあったと言える。

3.2.2 語彙単位の考察

前節で漢字表記上の差異をクリアにしたところ、「試験」「試験」「試験」などは同形語と判定できる。本節では語彙の面から考察する。語の抽出方法として、日本語原文と孫福保・程起鵬両氏の訳文を照合し、同じ語形を持つものを抽出する。抽出語としては二字熟語が中心であるが、訳文と原文の対応や文脈から一つのまとまりとして分けられないほうがよい句も対象に入れる（例えば、「鑛山技師」と「鑛師」、「鑛一擔に付き」と「一擔金砂」「每鑛一擔」）。なお、人名（「莊鶴清」など）、地名（「蒼梧縣」「廣東」など）などは除外する。

3.2.2.1 二者の訳文が原文と一致する語

原文と二者の訳文でともに用いられた同形語は表 3-3 の通り、計 12 語ある。「試験」「委員」を例として具体的に見てみよう。

表 3-3 二者の訳文が原文と一致する語

省城、鉞務、涌流、発見、試験、最下、計画、委員、連亘、地方、一帯、金鉞

(1) 「試験」

「試験」について、日本では問題を出して答案を作らせ、学業や能力を判定するという意味での「試験」はすでに禅宗で用いられていたが、明治 10 年代に学校教育の普及とともに、examine、examination、test の訳語として広まった。また、幕末期、蘭学者が西洋の自然科学の基本が「試験」(実験)にあることを学び、そこから実験の意味で「試験」を用いた用例「其毒ヲ試験シ」(宇田川榛斎訳・宇田川榕庵校補・文政 5 年(1822)『遠西医方名物考』一)もある¹³。

中国語側は、黄河清らが編集した『近現代漢語新詞詞源詞典』(2001)は、「試験」の初出例として 1889 年に傅雲龍の『遊歴日本図経余記』を挙げている。秦(2010b)は「試験」を日本漢字語と認定している。一方、『近現代辞源』(2010)では、黄河清が「試験」の初出例を 1626 年湯如望(アダム・シャル)『遠鏡説』の用例まで遡っている。1873 年丁韞良(ウィリアム・マーティン)らの『中西聞見録』第 13 号、1875 年林樂知(ヤング・ジョン・アレン)訳『格致啓蒙』の用例も挙げている。

つまり、「試験」は明朝末期に出現し、清朝末期まで主に外国人宣教師の著作において用いられていた。日本において幕末期、蘭学者が使用することによって日本国内で広がり、清朝末期に日本との接触において、傅雲龍のような個人使用や、『実学報』のような新聞の翻訳などによって中国で広がったと言えよう。

(2) 「委員」

「委員」は大勢の人から選ばれて特定の事柄について審議したり、行ったりする人という意味で、『現代に生きる幕末・明治初期漢語辞典』(佐藤 2007: 13)には『清会典事例』(刑部、刑律、断獄、辨明冤枉)「另委別官審理者、專責委員、虚心質訊、毋庸原問官会審」¹⁴と典拠が挙げられている。一方、中国語側の『近現代漢語新詞詞源詞典』はそれより遅い用例を挙げている。「在愛爾蘭国民教育委員監督下者、以千八百九十五年以来之統計如左、……」¹⁵『欧

¹³ 佐藤(2007: 362 - 363)を参照。

¹⁴ 筆者訳：別の官に委ねて審理をする場合、専ら委員に任せて、そのまま質問させ、本来の訊問官は参加してはいかない。

¹⁵ 筆者訳：アイルランド国の国民教育委員の監督の下にいる者は、1895 年以來の統計は左のとおりである。

米教育統計年鑑』(1911年孫世昌輯訳)¹⁶。ただし、「漢籍電子文献資料庫」で検索したところ、「丁巳、初設海參崴委員」¹⁷「命李經方為台湾交地全權委員」¹⁸(『清史稿』)など、清の時代の用例があり、官職の一つであることを表す。

調べた結果、12語の中日同形語はすべて中国語に典拠があり、近代において意味が変化した、いずれも研究者たちが注目し続けてきた言葉である。「試験」「計画」は幕末・明治初期に訳語として用いられ、「発見」「委員」も近代の新概念を表すが、中国語に語形があるため、二人の翻訳者には抵抗感が薄く、日本語の記事原文から受け継いだと考えられる。

3.2.2.2 程起鵬訳が原文と一致する語(句)

程起鵬の訳語が孫氏と異なり、原文記事と一致する語句は10語(句)であり、表3-4の通りである。逆に、孫福保訳は程氏と異なり、原文記事と一致する語(句)はない。なお、「清國」「技師」「會社」を例として具体的に説明する。

表3-4 程起鵬訳が原文と一致する語(句)

孫福保訳	程起鵬訳	原文記事
中國	清國	清國
派	派遣	派遣
礦師	礦山技師	礦山技師
一擔金砂	每礦一擔	鑛一擔に付き
該当なし	最上	最上
洋銀	金價洋銀	金價洋銀
官吏及紳民等. 集資	官民合資	官民合資
股本	株金	株金
公司	會社	會社
金礦脈苗	金礦脈	金鑛脈

(1) 「清國」と「中國」

秦(2010b)によれば、当時「中國」という表現のほうが一般的であり、『時務報』ではほぼ完全に「中國」に統一されているのに対し、『実学報』では、日本語からの翻訳記事は「支那」

¹⁶ 『近現代漢語新詞源詞典』(2001: 271)。

¹⁷ 筆者訳: 丁巳年、初めてウラジオストク委員を設置した。

¹⁸ 筆者訳: 李經方を台湾交地全權委員に命じた。

「清國」を用い、それ以外の部分は「中國」を使用していると述べているが、「清国膠州湾」という記事と本章で取り上げた二者の訳文を見ると、『実学報』では、孫氏は「中國」と訳し、程氏は日本語の影響を受けて「清國」と訳していることが分かる。

(2) 「技師」と「礦師」

「技師」について、『明治のことば辞典』（1986：93）では、明治時代の新語とされ、明治29年『民法』第170条2項には「技師、棟梁及ヒ請負人ノ工事ニ関スル債権」とあり、北村透谷は『人生に相渉るとは何の謂ぞ』（明治26）の中で、「然れども人間の靈魂を建築せんとするの技師に至りては、」と記している。

『漢語外来詞詞典』（1984：151-152）によると、「技師」は日本語からの借用語であり、英語 engineer の意識である。現代中国語には「技師」（技術人員的職稱之一）と「礦師」（指勘察和採礦的工程技術人員）の両方が残っている¹⁹が、「技師」は日本語から借用された後、職名の一つになったのだろう。意味の面から見ると、「礦師」が日本語の「礦山技師」に相応しい訳語であると考えられる。程氏には日本語をそのまま残し、新語を積極的に使用する姿勢が見られる。

(3) 「會社」と「公司」

中国語側の資料から見ると、『漢語外来詞詞典』（1984：144）には、日本語からの借用語として、「會社」は英語 company、corporation の意識とある。また、『漢語大詞典』には、「會社」
「①旧時指政治、宗教、学术等团体②公司。来自日语、为英语 company、corporation 的意译」²⁰とあり、訳語として、日本語は「會社」、中国語は「公司」とそれぞれあるが、清末から程氏などが積極的に使用したことによって、「會社」は借用語から現代中国語となったのだろう。

以上のように、程氏は孫氏より積極的に外来のことばを受け入れる姿勢が伺える。言い換えれば、孫氏はできるだけ中国語に既にある語句を用いて、中国人読者に分かりやすく読んでもらおうとする姿勢が伺える。また、孫氏は程氏より語学の資質がある程度高いことも示されているだろう。

一方、二人の翻訳者の用語に関する傾向を詳しく見るためには、『実学報』の翻訳全体を調べなければならない。以上の3組の言葉について、「東報輯訳」欄と「東報訳補」欄の139本の訳文を考察した結果、各語の使用回数は表3-5の通りである。

¹⁹ 『漢語大詞典』6（1986-94：359）、『漢語大詞典』7（1986-94：1118）。

²⁰ 『漢語大詞典』5（1986-94：785）。

表 3-5 『実学報』における各用語の使用状況（回数）

翻訳者 \ 語	清國	中國	技師	礦師	會社	公司
王宗海（王/孫）	1	8	0	0	11	0
孫福保	6	4	2	2	25	2
程起鵬	24	0	4	0	10	1

以上の使用回数で分かるように、中国語に既存の言葉をよく使用する孫氏にしても、日本語の新語である「技師」を用いたことがある。程氏が新しい表現を多用していても、中国語にある表現の「公司」も1回用いている。

新語を使用した用例として、「會社」を取り上げて見ると、孫氏が「會社」を25回使い、程氏より多く使用したことは例外であるかと思われるが、その理由は、孫氏の翻訳は程氏より多く、結果的に「會社」という語を訳語として使う頻度も高くなってしまったからであり、しかも一つの訳文に複数回用いているためである。例えば、第9冊「視察倉庫」には「會社」が10回も出現した。また、孫氏は新しい表現を使用する時、中国語の言い方も添えて説明する。例えば、「惟九州筋倉庫會社（即公司）之分店以外。另有一私家獨創之營業。所築倉庫。頗有高見」（『実学報』1991：540）などである。

3.2.2.3 二者の訳文が原文とそれぞれ異なる語

孫福保、程起鵬が用いた訳語と日本語の原文記事がそれぞれ異なって用いた用語は表3-6の通り2語である。

表 3-6 二者の訳文が原文とそれぞれ異なる語

孫福保訳	程起鵬訳	原文記事
近日	近来	近頃
辦理開采	招股	出張

日本語の読みから見れば、「ちかごろ」は和語で、「しゅっちょう」は漢語である。しかし、後者は、和語に漢字をあて、音読みにした語である²¹。従って、2語は日本固有語と認識され、読者が分かりやすいように翻訳者二人は類義語を当てるか意識する方法を選んだ。

²¹ 「出張」の語誌：①和語「でばり」に漢字「出張」をあて、音読みにしてできた語である。②「でばり」は、「する」を伴って「軍勢を引連れて他所に出向き陣を張る」の意の動詞として、中世に登場し、名詞「でばり」は城の建物をも表わした。近世後半になって、戦いとは関係ない場面でも用いられるようになった。

果たして、二つの表現が中国語にないか、『漢語大詞典』で調べてみた。

近頃：猶近來。魯迅《熱風・“一是之學說”》：此外還有一個太沒見識處，就是遺漏了《長春》，《紅》，《快活》，《禮拜六》等近頃風起雲湧的書報²²。

(『漢語大詞典』10、1986-94：735)

出張：謂打牌時出牌。老舍《四世同堂》十六：出張的時節，她的牌擲得很響，給別人的神經上一點威脅²³。

(『漢語大詞典』2、1986-94：496)

以上のように、2語が見出しとして立てられている。「近頃」の意味は日本語と同じだが、用例として挙げられているのは民国時期のもので、日本からの影響が強いと考えられる。「出張」はマージャンの牌を出す意味で、日本語の「出張」と意味が異なる。

また、当時の辞書記述はどうであったか、東亜語学研究会編『漢訳日本辞典』（1905年）を調べてみると、2語とも見出し漢字の右に傍線が付されている。

日本獨用之清國不用之例「相圖」「勘辨」「差支」「田植」「榭」「辻」「付込ム」等者。附一線于右傍以區別之。

筆者訳：日本でのみ使用され、中国で使用しない「相図」「勘弁」「差支」「田植」「辻」「付込ム」などは、右側に傍線を付けて区別する。

(『漢訳日本辞典』1905：「凡例」)

上の『漢訳日本辞典』「凡例」から、2語が日本固有語であること分かる。故に、まだ日本語から影響をそれほど受けていない清末の二人の翻訳者が「近頃」と「出張」を訳す時、中国ですでに慣用されている言葉に換えたことが分かる。

たが、「出張」の音読みの明らかな例は、『文明本節用集』以降の文献に見られ、「でばり」とほぼ同じ意味で用いられている。③「でばり」と「しゅっちょう」は、近世末まで並用されたが、近代以降、「出張」は官庁用語として定着したのに対し、「でばり」の方は、使われなくなった。(『日本国語大辞典』6(第2版)2000-02：1409)

²² 筆者訳：このほかに、甚だ不見識なことがあり、それが『長春』『紅』『快樂』『禮拜六』など近頃流行っている本や新聞を抜け落とした。

²³ 筆者訳：彼女は牌を出すとき、大きな音を立てて出すので、他の参加者の神経が張り詰める。

3.2.3 文単位の考察

『実学報』の「実学報啓」に見られる「本報翻訳東西書報、悉照原文、稍加潤飾、詞達理拳、総以不失本意為主」²⁴の記述から、原文の内容を適切な表現に直し、正確に翻訳しようとした趣旨が分かる。確かに両訳文は単独で見れば、いずれも日本語原文記事の主旨が見て取れるが、具体的な状況がどうであるかは、原文と比べないと分からない。本節では、日本語原文と対照しながら、文単位で二者の訳文の正確性や、原文への忠実度、文体上の対応を見よう。

① 受動態を能動態への変換

原文：廣東省城より派遣せられたる礦務委員莊鶴清及聶、楊兩礦山技師

孫訳：廣東省城地方、現派礦務委員莊鶴清、及聶楊二礦師。

程訳：廣東省城派遣礦務委員莊鶴清、及聶 楊兩礦山技師。

受動態である「派遣せられたる」は二者の訳文でともに能動態に直された。中国語の最も大きな近代的变化として、叙述アングルの多様化、いわゆる受動文の発達が挙げられている(沈 2010: 16)。二者の訳文が共に受身表現を能動態に直したのは、当時は日本語の影響が薄く、中国語に受身表現がまだ発達していなかったからであろう。

② 原文への忠実度

原文：一行は德慶州開建縣管下の涌流地方に於て精良なる金鑛脈を發見したる由なる

孫訳：同往德慶州開建縣之湧流地方、於此有精良之金礦脈發見。

程訳：昨於德慶州開建縣之湧流地方、視察金礦脈之發見。

文節の配列から見れば、孫訳は原文と同じ順序である。そのために、長い訳文の回避か、或いは原文の追従かの理由で、長い修飾成分が付いている「德慶州開建縣管下の涌流地方」を目的語として、動詞「同往」を加え、一文にした。そして、「於此」でそれに代わってもう一つの短い文を構成したのだろう。一方、程訳は中国語の順に直して、一つの長文にした。

また、孫訳が原文通りに動詞に訳したのに対し、程訳では元々動詞であった「發見」を名詞に変換し、それに対応して動詞「視察」を加えた。動詞の添加の点では、二者が共通だが、文節順序と品詞が原文と同じで、原文への忠実度が高いのは孫訳だろう。

²⁴『実学報』(1991: 63)。本紙は東西(日本と西洋諸国)の著書と新聞を翻訳する。翻訳の際、少し手を加えるが、なるべく原文に忠実に訳す。また、適切な言葉遣いで意を尽くし、筋を通す。要するに、全体的に本来の意味を生かすことを重んじる。(秦春芳訳)

③ 訳文の意味伝達の適切さ

原文：同省官吏は差當り官民合資を以て株金三十萬弗の會社を組織するの計畫を為し該委員及技師は再び同地方に出張したる由

孫訳：現由廣東同省官吏及紳民等、集資合成股本洋銀三十萬圓、設立公司、經營計畫。再由該委員及礦師同至該礦地方、辦理開采。

程訳：已由該省當差之官民合資、先以株金三十萬圓、為計畫會社之費。再由該委員及技師、向該地方招股。

まず、和語の副詞「差當り」に対して、孫氏が本当に理解できたか分からないが、「現」に訳すのは妥当である。一方、程氏は動詞「當差」と訳したのは理解できなかったからだろう。しかも、「當差之官民」という表現は、中国語として「官」（官吏）と「民」（民衆）が対義語であるので、「當差之官」の言い方はあるが、「當差之民」は通じない。なぜなら、「民」が官職に就くことがないからだ。孫訳の「官吏及紳民」のほうが正確かつ適切であろう。

また、程訳は「官民合資」「株金」「會社」が原文と一致するのに対し、孫訳は「集資」「股本」「公司」と中国語に既存の言葉に換えて、読者にも分かりやすくなっている。

さらに、程訳の「先以株金三十萬圓。為計畫會社之費」「再由該委員及技師。向該地方招股」は、字面から見ると、原文には近いが、2文ともお金についての話になっている。孫訳の方は「設立公司。經營計畫」「辦理開采」と「潤色」したにも関わらず、原文の「會社を組織する計画」「出張」の意味を正確に訳したと言えよう。

次の文の翻訳にも同じ傾向が見られる。

原文：試驗の結果は鑛一擔に付き最上なるは所得金價洋銀五十弗に當り

孫訳：試驗礦質之所含真金、約計一擔金砂、可値洋銀五十圓。

程訳：已得試驗確實、每礦一擔、最上當得金價洋銀五十圓。

この文に関しては、「試験の結果」をはっきり分からせるように、二者の訳文はともに「潤色」した。孫訳は「純金の含有率」という試験の内容を、程訳は「確実な結果を得た」という試験の結果を追加した。

また、程訳の「礦一擔」「當」「得」「金價」は原文と一致したが、「每礦一擔」は炭鉱が多数あって、いずれも「一擔」を取ると異なる意味になるので、孫訳の「礦質之所含真金」「一擔金砂」「可値」の方が中国語として分かりやすく、原文の意味を正確に伝え、適切な訳文であろう。

④ 句読点の箇所による原文の解釈

原文：尚廣西の蒼梧縣に連亙して涌北卡、水黎、老金、雞山等の地方一帶均しく金礦に富めりと云ふ

孫訳：又廣西蒼梧縣連亙之湧北卡、水黎、老金雞山等地方、一帶均查有金礦、甚為富足云。

程訳：又廣西之蒼梧縣、連亙涌北卡 水黎老金 雞山等地方一帶、均金礦為極富云。

上にも挙げたように、この日本の新聞記事は句読点を付けない方針があり、原文に句読点があるのは冒頭の「聶、楊兩礦山技師」とこの文のみである。中国語訳はすべて「。」で文を区切っている。日本語原文の「涌北卡～地方一帶」はその地域全体の意味を表す名詞として、「連亙」「富めり」の主語になる。孫訳の区切り方によれば、「一帶」はその前の「廣西蒼梧～等地方」を指し、一帶以下の文章「均查～富足云」の主語である。一方、程訳では「蒼梧縣」と「一帶」の後ろに2ヶ所句読点が付けられ、「廣西之蒼梧縣」が後ろの2つの叙述部の主語になる。「均」の意味「皆、一樣、等しく」を合わせて見ると、主語が「廣西之蒼梧縣」「涌北卡～地方一帶」である。孫訳と比べると、程訳は原文の文章構造に対する理解に正確性が欠けているが、原文の主旨は概ね理解していたと考えられる。

以上の考察から見ると、漢字と語彙の面では程訳が原文に忠実であるが、文単位では孫訳が正確かつ適切に施され、中国人読者に分かりやすくしている姿勢が伺える。

3.3 二人の翻訳者について

孫福保の社会的地位については、『実学報』第四冊「本館告白」の記載によると、「師範学堂教讀之職」であると分かる。

本館舊擬延請孫君玉如任撰述編校之事。因孫君有師範學堂教讀之職再三相辭。但允所輯之書錄送本館。今本館另行聘訂、一時實難。其人仍央向學堂開去此缺、以資襄理。

筆者訳：本館は以前から孫玉如氏に撰述、編集の仕事を委ねた。しかし、孫氏が師範学堂教師の職にあったために、何度も辞意を表された。ただし、氏の編集した書誌を本館に送って頂くようお願いした。今、本館は改めて招聘致しますがしばらくの間まことに難しい。氏にはやはり学堂を辞職して本社のために力を尽くしていただきたい。

(『実学報』1991: 273)

この「孫君玉如」は孫福保氏である。第一冊「本館告白」の「本館弁事諸君：総理吳鼎王仁俊幹臣、総撰述余杭章炳麟枚叔、撰述編校吳鼎孫福保玉如(略)」(『実学報』1991: 70)の名簿が裏付けている。孫氏は総理、総撰述の次、三番目に挙げられ、高い地位に置かれていることも分かった。

また、呉（2003）では、孫福保が「武備学堂中学教習」で、月給 30 両と述べている。具体的な時間と場所などが記載されていないが、「先生」であったことが確認できよう。

孫氏は最初から撰述者として仕事を引き受けたため、『実学報』「実学通論」欄に氏の撰述した文章「論変法之権」「均財」などが 11 本ある。のちに、孫氏は『実学報』日本語翻訳の仕事も受けた。また、上海農学会の『農学叢書』の中に、『植物近利志』『呉苑栽桑記』（清・孫福保撰）の 2 巻がある。

程起鵬の身分及び職業について、中国語側の『中国文化界人物総鑑』（1982）、『当代中国四千名人録（増訂版）』（1978）、『中国歴代人名辞典（増訂本）』（1989）、『中国人名大辞典』（1980）では全く言及されていない。支那研究会編『最新支那官紳録』（1918）には、次の短い紹介のみが残られ、清末の知識人で、政府の役人であることが分かる。

程起鵬 江蘇省呉縣人²⁵ 前清の挙人にして京師初等檢察庁檢察官に任用せられ、民国成立後浙江省江山縣知事に転任せり、六年十二月現在仍ほ該職に在り。

（『最新支那官紳録』1918：558）

二人の翻訳者の日本語学習歴についての言及はいまだ見つかっていない。前節の訳文の漢字、語彙の使用の面において、程氏は孫氏より積極的で、訳語の使用には日本語からの影響が強いことが伺える。しかし、文単位での考察から見れば、教師である孫氏は中国語と日本語能力のレベルが高く、原文への理解度も深く、忠実に原文の主旨を伝達できたうえ、訳文も中国人読者に分かりやすい。逆に、程氏のような翻訳者や作者が、近代において大量の新語や新しい表現形式を中国語にもたらしたと言えよう。

3.4 まとめ

以上のように、日本の新聞記事と『実学報』に掲載された孫福保と程起鵬両氏による中国語訳を取り上げ、漢字、語彙、文単位で比較・分析を行った。その結果は、下記のとおりにまとめられる。

まず、漢字単位の考察によって、①両国の新聞において旧字体を使うのは共通であるが、異体字や俗字の使用が多く見られる。②翻訳者の漢字の使い方がそのまま新聞に反映され、程氏訳が原文の字体を継承したのに対し、孫氏訳は異体字や俗字を使用する傾向がある。③日本独自の外来語に当てられた漢字表記「弗」は中国語の貨幣単位に直す。④日本語と中国語におい

²⁵ 清末の呉県、長洲県、元和県が 1912 年 1 月に呉県に統合されたため、本書では呉県出身とした。

て「鑛」と「礦」が別れる傾向があり、現代日本語の「鉦」と中国語の「矿」へと変化する漢字使用の過程も見られる。

次に、語彙単位で判明したことは、程訳には日本語原文と一致する語が多く、程氏が孫氏より日本語の使用に積極的で、中国古典にある表現だけでなく、日本語の新語も受け入れる傾向があることである。

また、文単位では、①両翻訳者はともに受動態を能動態に変換し、当時の中国語は受動態が発達していないことが分かった。②文の配列順序や適切な中国既存語への変換など、孫氏は国語能力が高く、できるだけ原文に忠実で、適切な翻訳をする姿勢が伺える。③孫氏は原文日本語への理解度が高く、忠実に原文の主旨を伝達できたうえ、読者にも読みやすい翻訳ができたと言える。

翻訳の読解の容易さでは孫氏が優るが、近代中国において大量の新語や新しい表現形式が中国語にもたらされたのは、程氏のような新しい言葉や表現の導入に積極的な翻訳者や作家がいたからだと言えよう。

『実学報』翻訳者間の用語差異は日本漢字語の注釈の面からも窺えるので、次章でこの点を考察する。

第4章 『実学報』における日本漢字語の受容

近代中国の外交官や民間文化人の著作で新語を使用する際、読者に分かるように注釈を付けて紹介した。それらの著作に現れた漢字語の注釈に目を配った研究としては沈（1994）が早い。それらの注釈内容を見ると、中国語での言い方や、著者たちによる新語の受容状況などが見て取れる。『実学報』の訳文にも注釈が付されていることは先行研究で分かるが、注釈付き語の分量や、中国語に借用された語との関係、翻訳者の新語に対する理解度に関する研究は殆んど行われていない。

『実学報』の日本漢字語に関して、秦（2010b）は、812語の日本漢字語が『実学報』に使用されたと論じている。一般語が298語、専門語が515語と専門語が圧倒的に多い。さらに、『分類語彙表』に基づいて分類し、近代概念を表す語が主に借用されていることを明らかにした。ただし、筆者が『漢語外来詞詞典』（1984）、『漢語大詞典』（1986-94）、『近現代漢語新詞詞源詞典』（2001）、『近現代辞源』（2010）で812語を調べた結果、用例にいずれも『実学報』を挙げていない。実際には、『実学報』が言語資料として十分に重要視されていないのが現状である。

注釈付き語に関して、沈（1994）は中国外交官の視察報告書、日記などで使用された日本漢字語に注釈が付されていることを提示した。李（2006）は、梁啓超の『飲氷室合集』にある日本漢字語の出現箇所を「A 割注及びその関連部分にある語、B 注・附言・案にある語、C 本行にある語、D その他」の4種類に分けている。さらに、「日本謂」「日本或訳」「日本号」などの特徴的な表現、英語などの原語が付いている語と付いていない語に分けて、日本からの借用語であるか詳しく検討した。そして、『漢語大詞典』に挙げられている梁啓超の使用例を考察し、梁啓超の努力によって近代中国に移入された日本語借用語を141語と確定した。

これを受けて、秦（2010b）では、『実学報』もこの方法を取っていると指摘し、注釈を付けることは当時において一般的な方法であり、多くの翻訳書や留学生によって書かれた文章に見られ、日本語彙の中国語における普及及び定着に大きな役割を果たしたと論じるが、詳しくは分析されていない。

本章では、まず先行研究の成果を再検証し、『実学報』東文報訳における日本漢字語の位置付けを提示する。そして、注釈付きの語を中心に、翻訳者の日本漢字語に対する認識を検討して、日本漢字語を中国に紹介した『実学報』東文報訳の役割を明らかにする。

なお、「日本漢字語」の定義は、秦（2010b）に従う。秦氏の定義に則って、「沖繩」「諏訪」のようなものを漢字表記語とし、「会社」「警察」のようなものを日本漢字語と称する。

4.1 清末中国人の日本視察記録の語彙との対照

中国に先立って、日本は岩倉使節団が 1871 年から 1873 年までの間に米欧 12 ヶ国を歴訪し、視察の報告書として『特命全権大使 米欧回覧実記』を著した。近代化を目指す中国も使節団を派遣し、日本及び欧米社会を視察し、視察報告書を残した。それに加えて、日本に駐在する中国人、私的身分で訪日した文化人の著書にも日本社会や日本語に関する記録が数多く存する。本節では沈 (1994)、李 (2006) の調査データを利用して、『実学報』の 812 語をその前後の中国人著作で使用された新語 (新概念を表わす語)、日本語借用語と対照し、『実学報』の日本漢字語の位置づけを見よう。

4.1.1 何如璋が使用した語

1871 年 9 月に『中日修好條規』が締結され、1875 年 11 月、日本特命全権公使森有礼の来華を受け、1877 年 11 月、何如璋が初代の駐日公使として赴任する運びとなった。何如璋は日本で目にしたものを毎日記し、時に詩も作った。それが『使東述略并雑詠』(1877) である。『述略』の部は 1 万 4 千余字で、『雑詠』の部は漢詩 (七言絶句) 67 編で構成されている。『実学報』より先に下記 7 語が『使東述略并雑詠』で使用された。

公園、市場、師範学校、少佐、神社、電信、郵便

4.1.2 黄遵憲が使用した語

初代駐日公使何如璋の参事官、黄遵憲は 1877 年から 1882 年の間滞日して、明治初期の日本を詳しく考察し、『日本国志』(40 卷)、『日本雑事詩』(初版本 154 編、定本 200 編) を著した。『日本国志』(1895) はこの時期の日本研究書として本格的なものであり、中日言語交流における重要な資料として多く研究されている。『実学報』より先に下記 35 語が『日本雑事詩』(1890) 定本で使用された。複合語の語形に差異があるもの「士官学校」以下の 8 語も合せて示す。

移民、会社、学科、幹事、汽船、議員、議院、議長、共和党、金額、金属、銀行
刑法、警部、権限、建築、公園、国旗、市場、師範学校、紙幣、自由、自由党、社会
主義、巡查、証券、進歩、製造所、統計、内閣、博物館、民権、予算、麦酒²⁶
士官学校、政治学、造幣場、総理、裁判所、紡績所、予備、郵便局——『日本雑事詩』
士官、政治家、造幣局、総理大臣、裁判、紡績業、予備軍、郵便——『実学報』

²⁶ 下線の中日同形語は『実学報』ソース記事と訳文に現れているが、秦 (2010b) は日本漢字語と認定していない。梁啓超の初出とされた語は四角に括って示す。

4.1.3 傅雲龍が使用した語

傅雲龍は、政府が派遣した外国視察団の一員として、1887年から1889年にかけて日本を始めアメリカ、カナダ、ペルー、キューバ、ブラジル各国を歴訪した。調査、視察の報告書『遊歴各国図経』（86巻）と旅行の見聞、感想などを記録した『遊歴各国図経並余記』（15巻）を著した。そのうち、日本に関しては、『遊歴日本図経』（30巻）と『遊歴日本図経余記』（3巻）がある。『実学報』より先に下記23語が『遊歴日本図経余記』で使用された。複合語の語形に差異のあるもの1語も合わせて示す。

学科、幹事、技師、議員、教授、銀行、警察署、憲兵、公園、工兵、商業、少佐
図書館、精米所、総長、大尉、統計、内閣、美術、美術品、郵船、郵便、噸
総理——『遊歴各国図経並余記』
総理大臣——『実学報』

4.1.4 葉慶頤が使用した語

1897年に『集成報』東文翻訳を勤めた葉慶頤は、1880年半ばまで私的身分で日本に2年間滞在した²⁷。日本での見聞録は『策鰲雜摭』（1889）の中に、「事物異名」という巻があり、130語の日本語を収録し、詳細な解釈も施されている。『実学報』より先に下記2語が『策鰲雜摭』で使用された。複合語の語形に差異のあるもの1語も合わせて示す。

硝子、支配人
時計師——『策鰲雜摭』
時計——『実学報』

4.1.5 黄慶澄が使用した語

黄慶澄は私的身分で訪日した文化人の一人で、1894年に『東遊日記』を著した。その中から新語、訳語を多く検出できる。『実学報』より先に、下記5語が『東遊日記』で使用された。複合語の語形に差異のあるもの5語も合わせて示す。

銀行、警察署、内閣、電報、法律
総理、博物会、裁判所、予備兵、郵便局——『東遊日記』
総理大臣、博物、裁判、予備軍、郵便——『実学報』

²⁷ 沈（1994：93）による。王（2013：40-42）によると、葉氏は1881年から1882年の間日本に滞在した。

4.1.6 梁啓超が使用した語

李 (2006) の 141 語と対照した結果、表 4-1 の 25 語が『実学報』で先に使用された。このほか、梁啓超がもたらした日本語借用語には「交通機関」(1903)、「博物」(1896)、「国会議事堂」(1903)、「立法院」(1902) がそれ以前の『実学報』訳文で「交通之機関」「博物館」「国会」「立法」の形で載っている。

表 4-1 梁啓超の著作と『実学報』に共通して載っている語 (25 語)

番号	借用語	梁の使用年	番号	借用語	梁の使用年	番号	借用語	梁の使用年
1	科学	1910	10	経済	1902	19	内閣	1911
2	改革	1902	11	原料	1899	20	発見	1902
3	革新	1904	12	交通	1902	21	発明	1902
4	革命	1902	13	国家	1902	22	半島	1902
5	機関	1905	14	雑誌	1901	23	美術	1901
6	議院	1899	15	時間	1902	24	迷信	1902
7	議長	1902	16	社会	1902	25	予算	1899
8	恐慌	1909	17	大統領	1911			
9	教育	1896	18	帝国	1902			

25 語のうち、「教育」1 語のみが梁啓超より遅く、残り 24 語は『実学報』東文報訳が先である。日本の新聞記事の翻訳という性質を持っているが、『実学報』での使用が梁啓超の自主使用より早く現れ、語の初出候補としてよからう。

以上のように、梁啓超の使用より先に 24 語が『実学報』において用いられた。なお、24 語のうち、『実学報』より前に、「内閣、美術」が傅雲龍の『遊歴各国図経並余記』、「内閣」が黄慶澄の『東遊日記』、「議院、議長、社会、内閣、予算」が黄遵憲の『日本雑事詩』にあった。つまり、「議院、議長、社会、内閣、美術、予算」の 6 語はそれ以前に清末の外交官、文化人の著書で使用された。また、「支配人、電報、噸、法律、麦酒」の 5 語は『実学報』に現れたが、秦 (2010b) は日本漢字語としなかった。「銀行」は秦 (2010b) で日本漢字語とされ、『漢語外来詞詞典』でも日本語借用語とされるが、日本より先にロブシャイド『英華字典』で 'bank' の訳語として挙げられている (沈 2008 : 151-154)。さらに、「銀行」の成立及び日本への伝来ルートも詳しく論じられている (朱 2009 : 145-161)。したがって、『実学報』東文報訳の日本漢字語への研究は量的にも、質的にも研究する余地があると考えられる。つづいて、注釈付き語を中心に『実学報』における日本漢字語の受容を考察しよう。

4.2 注釈付き語の翻訳から見る日本漢字語の受容

4.2.1 『実学報』以前の日本漢字語の注釈

清末の外交官、文化人の著書、及び新聞『実学報』に新語の使用が見られるが、当時の中国人が日本漢字語を正確に理解しているかについては、新語の解釈からその一端が伺える。上掲の著書に現れた新語の注釈例を見よう。

美術 言術美也——傅雲龍

(「美術」とは、術が美しいことである。)

市場 互市之場——何如璋

(お互いに売買する場所。)

支配人 …謂支派分配之人 猶中国之称掌櫃也——葉慶頤

(仕事などを指示したり割り当てる人のことを言い、中国で「掌櫃」と呼んでいるような人である。)

硝子 玻璃之名 日人有硝子製造会社 即造玻璃器物處也——葉慶頤

(ガラスの呼称。日本人は硝子製造会社、即ちガラス製品を造る處を持っている。)

「美術」「市場」「支配人」の解釈を見ると、当時の中国人は、伝統的教養を生かし、中国語の表現習慣によって語句を分割して解釈する傾向がある。語構成から見ると、「美術」を「形容詞+名詞」、「市場」を「動詞+名詞」、「支配人」を「動詞+名詞」に捉え、語全体も全て名詞に取られている。また、「硝子」は外来語のガラスの意味を喚起するために当てた漢字表記であり、古典中国語の借用である。中国では 'glass' の訳語として早くから「玻璃」を使用していた²⁸。葉氏の解釈では「支配人」「硝子」の中国語の言い方を提示したほか、日本での経験を生かして、「硝子製造会社」を説明し、関連知識も紹介した。

しかし、「術が美しい」と主述関係の解釈をして、「美の視覚的表現をめざす芸術」という近代的な意味で理解していたとは言い難い。また、「支配人」の解釈で「掌櫃」という中国語の言い方を当てたが、「掌櫃」にはオーナーとマネージャーの両方の意味があるが、「支配人」にはオーナーの意味がない。

要するに、近代前期の中国人達は、伝統的教養を活かして未知の日本漢字語を既存の語や表現と関連付けながら、新語の意味を解釈しようとした。その過程において、日本滞在の経験も語の解釈に大きな役割を果たした。ただし、正しく解釈できた語もあれば、スムーズにできなかった語もある。それらの注釈の正誤によって日本漢字語の受容状況が窺える。

²⁸ モリソン『華英字典・Part III』(1822 : 188)「glass : 玻璃」。

4.2.2 『実学報』の注釈付き語

注釈が付された語は日本漢字語である可能性が高く、語に付された注釈内容も日本漢字語の判定に参考になるため、本節では「諏訪」のような漢字表記語も含めて考察する。『実学報』の訳文では、2行に分けて小文字で注釈を付けて、意味を説明したり、中国語の言い方を付けたりした。『実学報』の訳文で注釈が付されたものは次の3種類に分けられる²⁹。

(一) 本行日本語＋小字注中国語

例：因視察倉庫（猶中國言棧房。）

自松永大尉十六名乘組。（乘組猶華言執事）向北海道開行。

如軍隊及警察（中國謂之巡捕）之類。

惟九州筋倉庫會社（即公司）之分店以外。

例のように、新語が出る際、本行で日本語の漢字表記をそのまま取り入れて、下に小文字で中国語の慣用的な言い方を付けたり、例示したりして説明するタイプである。この解釈形式は、葉慶頤の「支配人：猶中国之称掌櫃也」と類似している。「猶中国言～、猶華言～、日本称～為～、中国謂之～、訳言～、即～」などはその特徴である。この類の語は次の延べ語数20語、異なり語数19語である。

椅子（猶言位也）、	沖繩（即琉球）、	会社（即公司）
外相（猶外部）、	曲馬場（蓋即馬戲）、	首領（猶首肯也）
軍相（如兵部尚書）、	警察（中國謂之巡捕）、	交通之機關（如電線德律風之類）
虎疫（即虎拉病）、	政海（猶言宦海）、	倉庫（猶中國言棧房）
橐駝師（種樹人。蓋用柳子厚郭橐駝之名也）、	兔角（猶言角逐）	
度相（如戶部尚書）、	日曜日（猶言禮拜日）、	乘組（譯言執事人/乘組猶華言執事）
半季（日本稱半年為半季）、	方針（謂指南針）	

(二) 本行中国語＋小字注日本語

例：澳大利亞（日文作濠太刺利）三十四萬噸。

遣警察署之包探（日本名諏訪）十名。巡查應援。

²⁹ 訳文で2行に亘っている小文字注を1行に直し、括弧の中に入れておく。なお、次のような語の注釈でない小文字例は考察から外す。①「船主平原多吉（年四十四歳）及大野治吉（年四十四歳）...」②「現考臺南木料價值。每株須售銀六圓三角。鋸就木料。自十四五圓至二十五六元不等。（此蓋指一方丈而言以上價值當均為極貴重之木料。）」

例のように、本行で中国語の訳語をし、小文字で日本語の漢字表記を付けて、その語の日本語の名称を紹介する方法である。「日本謂之～、日文作～、日本名～」などはその特徴である。この類の語は次の7語である。

澳大利亞（日文作濠太刺利）、 經理帳目人（日本謂之支配人）
總理人（日本謂之事業擔當人）、 包探（日本名諏訪）
憑票取銀者（日本謂之割引手形）、 約期匯付者（日本謂之定期貸）
現期交付者（日本謂之当座貸越）

（三）その他

例：蓋因本年上半季。（即上半年。）比上年上半季物價騰貴。各種生意。成本較鉅。必須增加。乃能有濟耳。

例のように、ソース記事の内容を翻訳した後、翻訳者や編集者が付け加えた附言が大文字で書かれ、すでに詳しく注釈した新語「半季」を使用する際、もう一回中国語の言い方を付け加えた例である。

なお、注釈付き語を翻訳者別で見ると、程起鵬による注釈が1語、「王宗海口訳、王仁俊筆述」による注釈が1語、「王宗海口訳、孫福保筆述」による注釈が6語、残り20語はすべて孫福保による。筆述の注釈6語も含めて見ると、注釈の殆んどが孫福保によって付され、孫氏の新語を慎重に取り扱う態度が見て取れるだろう。

程起鵬——乗組（乗組猶華言執事）

王宗海口訳、王仁俊筆述——乗組（譯言執事人）

王宗海口訳、孫福保筆述——憑票取銀者（日本謂之割引手形）、方針（謂指南針）

約期匯付者（日本謂之定期貸）、半季（日本稱半年為半季）

現期交付者（日本謂之当座貸越）、上半季（即上半年。）

上記3種類の注釈付き語をまとめて見ると、延べ語数28語、異なり語数26語（句）である。全139本の訳文に対して、5本に1語の割合で、多くの注釈が施された。それらの注釈を残した役割を果たしたのは主に翻訳者の孫福保であった。

一方、秦（2010b）の日本漢字語812語と対照すると、「会社」「警察」「交通」「機関」「日曜日」「方針」の6語のみ注釈が付されている。前節で検討したように、『実学報』の日本漢字語は量的にも、質的にも研究する余地があるため、次節では範囲を広めて注釈付き語全体の翻訳状況を考察する。

4.2.3 『実学報』 注釈付き語の翻訳

『実学報』の翻訳者は、それらの語について本当に理解していたのか。そして、それらの語の翻訳は妥当であるか、日本漢字語とそれ以外の語に分けて、正誤両方の例を挙げて見よう。

4.2.3.1 注釈付き日本漢字語の翻訳

- (1) 「墨国の日曜と名勝」日曜日てふ文字は一般に休日を意味すれども当地の日曜日は反つて平日に比して繁忙複雑の現象を現はすなり

(『時事新報』「墨国の日曜と名勝」)

紀美國日曜日 (猶言禮拜日.) 之光景. 與其游觀之樂. 閱其文字. 儼如置身彼國. 而與其休假日之意味一般焉. 蓋當地之日曜日. 反比平日有繁忙複雜之象.

(『実学報』「美国日曜日之光景遊樂」)

日本語の「日曜日」に対して、漢字表記をそのまま写したうえ、小文字で中国語の言い方を添えた。モリソン『華英字典・Part III』(1822)に Week of seven days is called in Canton 一個禮拜, 七日節, Weekly 每禮拜, Monday 禮拜一, Tuesday 禮拜二日, Friday 禮拜五日, Saturday 禮拜六日, Sunday 主日と「禮拜」が既に登場しているため、「曜日」に比べると、「禮拜」のほうが中国語として、親しみある言葉であったと考えられる。

- (2) 市内の交通機関を増設して人民の便利を盛にせり

(『東京日日新聞』「伯林日記」)

市内増設交通之機関. (如電線德律風之類.) 人民之便利益盛矣.

(『実学報』「伯林日記」)

原文と対照した結果、「交通之機関」は「交通機関」という四字熟語の対訳語である。日本語では、「交通」「機関」それぞれあるが、組み合わせて運輸機関と通信機関の総称になる。「交通機関」を翻訳するには、まずそれを分割して「交通之機関」として、小文字注で「電線德律風之類 (電線、電話の類)」などと具体例を挙げて類推する方法が取られた。そこから、翻訳者が「交通機関」という4文字の漢語を柔軟な方法で翻訳し、語義も正確に受け止めたと考えられる。

『実学報』における長い日本漢字語の受け入れ方として、中国語では、「停車之場」「根拠之地」「外交之官」「製塩之場」など三字熟語の翻訳に見られるように、「之」で区切って「～之～」と句の形に翻訳する方法が活用されている。

- (3) 且つ伯は「或は積極的方針と云ひ或は消極的方針と云ふ其議論は千差万別なれども今日の財政は孰れにても不足は乃ち不足なり」と云へり

(『東京日日新聞』「松方伯の時務談 上」)

且伯嘗有言矣。謂同是指定方向。或有積極的方針。(謂指南針。) 或有消極的方針。故其議論雖有千差萬別。然孰能求其不足之故。而深得救其不足之法乎。

(『実学報』「松方伯之時務談」)

「方針」は古代中国語にあり、「方向を示す磁石の針」の意味である。注釈の「指南針」(羅針盤)はそれと同じ意味になる。前後の文脈と合せて見ると松方伯の発言では近代的意味の「目指す方向。物事や計画を実行する上の、およその方向」となり、翻訳者は近代的意味を理解せず、「指南針」を当てた。その前に「謂同是指定方向」(同じく方向を指すものと言う)という説明を付け加えても抽象的概念を翻訳・説明するものとしてやや不足な感じがする。

上記の例の注釈から見ると、「日曜日」「交通機関」は、翻訳者がその訳語・新概念語の意味を正確に理解でき、正しい中国語で言い替えて注釈に付け加えた。そのほか、「会社」「警察」も正確に翻訳できた。一方、「方針」については、翻訳者が漢文知識を生かして解釈しようとしたが、新しい意義が賦与されたものに対しては限界があった。

4.2.3.2 他の注釈付き語の翻訳

- (4) 河野精米所及び同社支配人黒田忠一事業担当人河野幸之助両氏の宅へ細民二千余名乱入し

(『時事新報』「人夫二千名の大暴動」)

河野精米所。其社中經理帳目人(日本謂之支配人。) 黒田忠一。及總理人(日本謂之事業擔當人。) 河野孝之助。兩氏之宅。被細民二千餘名。亂入家屋。

(『実学報』「飯田町人夫二千名之大暴動」)

「支配人³⁰」「事業担当人」の訳語として「經理帳目人」(經理、会計士)「總理人」(マネージャー)が当てられた。葉慶頤が「支配人：謂支派分配之人 猶中国之称掌櫃也」と解釈したが、『実学報』の翻訳者はその一面を強調して、帳簿を經理する人と解釈している。意味のずれが多少あるものの、概ねその概念は伝わると考えられる。当時の中国語はまだ二字熟語が多かったが、「經理帳目人」「總理人」と多文字の訳語を当てることは注目すべきである。

³⁰ 沈(1994)では新漢語と認定された。なお、「支配」が『漢語外来詞詞典』(1984)で日本語借用語とされている。

まず、例文の日本語を現代語に直すと、「諏訪警察署より十名の巡査を応援として派遣したのだ」という意味になる。「諏訪」が警察署の前にあり、その警察署の名前を表わす。しかし、訳文では「包探」の後ろに置かれ、その日本語の言い方が「諏訪」であることを示す。古典中国語には「諏訪」の語形が『新唐書』にあり、「諮詢、意見を求める」という意味である。故に、翻訳者は漢字表記語である「諏訪」を地名として理解できず、日本漢字語と判断して伝統的教養を生かして中国語の「包探」を当てた可能性が高い。

一方、「包探」³²は「中国の租界に置かれたスパイや探偵のこと」を意味し、「巡査」の訳語としても通じるようである。日本語では、「巡査」が警察官の階級の一つで、巡査の名称が最初に用いられたのは、1872年（明治5）の警保寮職制（太政官布告）においてである³³。古い中国語に語形があり、日本語において近代の独特な意味と名詞の用法が付された「転用語」である。

また、『実学報』の訳文「警察署の包探十名を巡査応援させた」の中で、翻訳者は「巡査」を「廻り調べる」意味の動詞として使用し、「応援」と並列して文の述語にしている。秦（2010）では中日同形語の観点から「巡査」を日本漢字語としたが、この訳文では「巡査応援」を「名詞+動詞」とは判定しがたい。

次に、近代的意義が付されていない言葉の例を見よう。

(8) 高島子拓相の椅子を占めしが事務局の掣肘よりして兎角勢力の競争となり戦後勿々土民未だ其堵に安ぜざるに当て中央台地共に意外の紛擾を極めた

（『大阪朝日新聞』「台湾総督」）

於是拓相以其椅子（猶言位也。）與内閣之事務局動相掣肘兎角（猶言角逐。）勢力、相與競争、當時戦争之後、土民洵洵、迄未安堵。

（『実学報』「台湾総督」）

「兎角」は「とかく」の当て字として、名詞、副詞の用法がある。仏教用語「兎角亀毛」に由来する。日本語原文では、「複雑な事態そのものをさす。種々様々の事。種々様々の言葉。また、そこに含まれる一つの具体的な事柄を暗示することもある」という意味を持つ名詞である³⁴。一方、中国語では「亀毛兎角、兎角亀毛」の形を保っていて、『漢語大詞典』ではその

³² 「又稱包打聽。舊時帝國主義在中國租界里設置的密探。亦泛指偵探。」『漢語大詞典』2（1986-94：184）。

³³ 『日本大百科全書』11（第2版）（1994-97：752）による。なお、1869年頃の用例「駆けて行く途中で巡査（オマハリ）に出会（でっくわ）しても」（真景累ヶ淵『三遊亭円朝』一）もある。

³⁴ 『日本国語大辞典』9（第2版）（2000-02：1100）による。

まま四字熟語の見出しで収録されている。類義語「兎角牛翼」もある。「実在するはずのないことのとえ」である。「兎角」と対応する中国語として動詞の「角逐」を当てたが、名詞として使用された「兎角」を正しく理解できなかった誤訳の例と言える。

- (9) 公は首を傾げ、其松は何処の山中に生育ちたる者なるやと尋ねられ、
(『東京日日新聞』「靈感公作為の松を擯斥す」)
公為之首傾。(猶首肯也。) 問其松在何處山中生育。乃尋得此。
(『実学報』「靈感公擯斥松樹事」)

「首を傾げる」という句の訳語として、漢字表記だけを残して「首傾」になったが、中日両方ともこの語は存しない。「首を傾げる」は「疑問・不審のある様子をする」意味で、後の文「その松はどここの山中に生育するものかと尋ねられ」と繋がっている。注釈の「首肯」(頷く、承諾、承認する意味)はその連語の意味とかけ離れている。

上記の例をまとめると、まず、多文字漢語「支配人」「事業担当者」に対して、翻訳者が多文字の訳語「経理帳目人」「総理人」を当てたのは、3文字やそれ以上の漢語の受容であると考えられる。そして、中国人の伝統的教養にもとづいて「橐駝師」の語源を推測し、外来語「オーストラリア」の当て字の違いを意識しながら日本語の呼称を紹介できた。一方、近代的意義が付された「巡查」に対して、翻訳者は理解できず、伝統知識を生かして自分なりの翻訳を施した。また、日本独自の表現に対して、翻訳者は漢字表記をそのまま継承したが、注釈から見ると、漢字表記語「諏訪」を日本漢字語と勘違いし、「兎角」「首を傾げる」への理解が間違っていることが分かる。

4.2.4 本節のまとめ

本節では、注釈付き語を中心に『実学報』における日本漢字語の紹介方法を、(一) 本行日本語+小字注中国語、(二) 本行中国語+小字注日本語、(三) その他(附言に注釈を付ける方法)にまとめて、それらの語の翻訳を合せて日本漢字語の受容状況を考察した。注釈付き語の分析について、下記のとおりまとめられる。

- ① 注釈付き語が全部で 28 語(句)あり、5 本に 1 語の割合で、漢語を中心に多く施されている。翻訳者は(一)「本行日本語+小字注中国語」の注釈形式を多用した。翻訳者別で見るとその殆んどが孫福保による注釈で、孫氏の緻密に翻訳を施す態度が見られる。
- ② 注釈付き語のうち、「会社」「警察」「交通」「機関」「支配人」「巡查」「日曜日」「方針」の 8 語の日本漢字語が注釈に関係している。ただし、「交通機関」が一つのまとまりで始

めて交通機関と通信機関の総称になり、「巡查」「方針」が漢字表記の写しのみあって、近代的意義に解釈されていない。

- ③ 翻訳者が伝統的教養を生かして日本漢字語を解釈しようとする傾向がある。典拠を挙げたり（「橐駝師」）、具体例で類推したり（「交通機関」）するが、日本独自の表現（「兎角」「首を傾げる」）に対しては限界があり、漢字表記語を日本漢字語と間違えて判断した（「諏訪」）こともある。
- ④ 「経理帳目人」「総理人」のような多文字漢語の使用も見られるが、3文字やそれ以上の長い日本漢字語に対して、多くの場合翻訳者は分割して「～之～」の形にする方法を活用できた。

4.3 注釈なし語の翻訳から見る日本漢字語の受容：「時間」を例に

『実学報』『東文報訳』において、日本漢字語及びその可能性が非常に高い812語の使用は先行研究で指摘されているが、中日同形語の視点からの考察であるため、812語のうち、翻訳者にとって理解した上での使用か、ただ漢字表記の写しかを判断しづらいものもある。したがって、日本漢字語への受容度を追究するには、翻訳者の付けた注釈が手がかりになる。前節では、注釈付き語をめぐって、『実学報』における日本漢字語の受容状況を検討した。翻訳者はできるだけ中国語の伝統教養を活かして日本漢字語及び漢字表記語を解釈し、「会社」「警察」「日曜日」などを正確に理解できたが、「巡查」「方針」は漢字表記の借用のみあって、近代的意味に解釈されていないことが判明した。一方、注釈付き語より注釈が付されない日本漢字語のほうが多い。本節では「時間」を例に、『実学報』における翻訳からその受容状況を考察してみる。

「時間」に関して、李（2006）は「時間」が1902年に梁啓超によって中国社会にもたらされた「日本語借用語」であると論じている。しかし、梁の使用より前に、『実学報』『東文報訳』において中日同形語の「時間」が用いられていた。秦（2010b）は、『実学報』の翻訳記事において「時間」が2通りの意味を持つ日本漢字語と判定し、それぞれ『分類語彙表』の「1.16 時間」と「1.19 量」に属すると論じている。

「時間」は哲学、物理学の分野の重要な概念であり、現在も中日両国で広く使用されている。『漢語外来詞詞典』などによって日本語からの借用語とされる。しかし、『実学報』ソース記事に現れた「時間」に対して、翻訳者が“點鐘”“時”“時間”を当てた。特に、“點鐘”が現代中国語で時刻を表わし、日本語の「～時」に当て嵌まることは周知のとおりであるが、果してこれらの訳語が「時間」の意味を伝えているかについて検討してみる。

4.3.1 現代日本語と中国語における「時間」の意味

『日本国語大辞典』によると、日本語の「時間」には次の7つの意味がある（例を省く）。

- ① 時刻と時刻との間。ある長さの時。
- ② 「じこく（時刻）」に同じ。
- ③ 学校などで、カリキュラムに組まれた課目の授業の一定の時間。
- ④ 定められた時刻。
- ⑤ 哲学で、過去から現在・未来と、無限に連続する存在規定。存在を証明するための必要条件の一つであり、物体界を成立させる基礎形式とされている。⇔空間
- ⑥ 物理学で、地球の自転の周期を測定して得た単位。最近ではセシウム一三三の同位体の発光する特殊なスペクトル線の振動周期を基準とする。理論的に、古典物理学では、空間から独立した変数、いわゆる絶対時間として扱ったが、相対性理論では、空間とともに四次元の世界を形成するものとして扱っている。
- ⑦ 時をかぞえる単位。一時間は一日の二四分の一。一分の六〇倍。

（『日本国語大辞典』6（第2版）、2000-02：530）

一方、『漢語大詞典』によると、中国語の“時間”には次の5つの意味がある。

[shi2jian4]

- ① 猶眼下，一時。
- ② 猶立即，馬上。

[shi2jian1]

- ③ 對空間而言，由過去、現在、將來構成的連續不斷的系統。
- ④ 有起點和終點的一段時間。
- ⑤ 指時間里的某一點。

（『漢語大詞典』5、1986-94：703）

「時間」の日本語の意味①、②、⑤はそれぞれ中国語の意味④、⑤、③と対応し、⑦「時をかぞえる単位」は日本語にのみあり、日本語独自の意味である。

飛田（2002）では、明治時代の新語の作り方を新造語、借用語、転用語と3種にまとめる。新造語とは日本語にその概念がなく、日本人が新しく造語するもの（「彼女」「哲学」「新婚旅行」など）である。借用語とは中国で活躍した欧米人宣教師が漢訳した洋書や辞典から借用す

るもの（「電報」「恋愛」「個人」など）である。転用語とは日本に存在する類義語に新しい意味を付加して転用するもの（「東京」「権利」「衛生」など）である。飛田氏は「時間」を新造語と認定し、辞書と教科書などの用例によって、一時間を 60 分とする時の単位「時間」が明治後期における語意識の変化によって誕生したのであると論じている。氏の考察によると、time の訳語が「時間」になるのは明治 14（1881）年の『哲学字彙』（東京大学三学部印行）の「time 時間」が早い。それ以前の「時間」の用例³⁵もあるが、「トキノマ」の意である。なお、『新聞雑誌』46 号の「一字間」³⁶は、実質的には西洋式の「一字（＝一時）の間」であるから 60 分の意味になる。さらに、次に挙げる 3 種の和英辞典で調べた結果、「hour」が現れるのは明治 38 年で、確実に「一時間」と記してあるのは、明治 42 年である。

JIKAN ジカン 時間 Interval or space of time; duration; time

（『改正増補和英英和語林集成』明治 19 年）

Jikan [時間] Time; space of time; hour （『新式日英辞典』明治 38 年）

Jikan [時間] Time; hour（一時間）（『新式日英辞典』明治 42 年）

一方、中国語では本来①、②の意味で副詞的に使用され、中国語のみにある意味・用法である。それぞれ「目下」「今すぐ」の意味で、『漢語大詞典』で次の古典の用例を挙げている。

金 董解元《西廂記諸宮調》卷一：“**時間**尚在白衣，目下風雲未遂。”凌景埏校注：“時間，指目下，目前。”³⁷

元 秦簡夫《剪髮待賓》第一折：“雖則**時間**受窘，久後必然發跡。”³⁸

《西遊記》第四回：“如若不依，**時間**就打上靈霄寶殿，叫他龍牀定坐不成。”³⁹

また、『大漢和辞典』では『漢書・曹參伝』の顔師古の注例（「ひまなとき」という意味）を挙げている。

³⁵ 福沢諭吉『西洋事情』二編卷之一 明治 3 年「火薬ヲ製スルトキ費ヤシタル時間ノ価ク時ハ即チ金ニ同シト之ヲ製スルニ用ヒタル材料<硝石硫黄木炭ノ類>トヲ消滅シ」

³⁶ 『新聞雑誌』46 号・明治 5 年（1872）5 月「一人の脚夫（ひきやく）一字間に数百通を達し得ると」

³⁷ 筆者注：現在はなお白衣の身であり（科挙に合格しておらず）、目下自分の進もうとする世界で何もまだ成し遂げていない。凌景埏の注：時間は目下、今の意味。

³⁸ 筆者訳：今は窮屈であるが、しばらくたったら出世するに違いない。

³⁹ 中野訳：もし言うとおりにしなかったら、すぐにも靈霄殿に攻めのぼり、玉座をぐらぐらにして、玉帝がちんと掛けていられなくしてやるからな。（『西遊記』1（2005：156）より引用）

〔漢書・曹參伝〕時間自_レ從其所_レ諫_レ參。〔注〕師古曰、間、謂_レ空隙_レ也。

このように、古典中国語に典拠があるため、「時間」を日本の新造語と言うより、転用語と見たほうが妥当ではないかと思われるが、「時をかぞえる単位」としての「時間 (=hour)」が近代日本での新しい意味であり、中国語に定着していないことは問題ないだろう。次に、『実学報』のソース記事における「時間」とその翻訳状況を見てみよう。

4.3.2 『実学報』における「時間」とその翻訳

時をかぞえる単位の「時間」:

- (1) 首相は重傷の為に人事不省の有様なりしが二時間余にして竟に全く締切たり
訳: 其時首相已不省人事、加二點鐘遂死。
- (2) 初て遠洋航海を試みたる結果に於て八昼夜間に二千百海哩を馳走せり即ち一時間平均十一ノットの割合なりとす
訳: 初試遠洋航海程途、八晝夜間計馳走二千一百海里、即合算一時間平均十一海里也。
- (3) 降雨期間の驟雨は一朶の雲起ると見る間に沛然として盆を傾く流が如く僅か半時間を経れば雨脚全く去つて
訳: 一朶雲起、沛然傾盆、僅半時間、雨脚又全行散去。
- (4) 艦底には珊瑚虫を初め種々の介虫など一面に附着し居ることなれば速力も頗る減じ一時間七節半乃至八節を走るに過ぎざるが
訳: 乃覺艦底有珊瑚蟲、及種種介蟲、附著一面、速力為之頓減、一時間七節乃至八節。
- (5) 艦は百八十度の経線を西へ越えたるに付き茲に同一日を分ちて二日とはなせり即ち午後三時前の十五時間は九月十三日 (月曜日) にして
訳: 以艦越一百八十度之經線以西、爰以一日之間、分為二日、即午後三時前之十五時間、作為九月十三日。
- (6) 午後三時後の九時間は九月十四日 (火曜日) と見なさるるなり
訳: 午後三時後之九時間、作為九月十四日。
- (7) 二十五日の朝は是れまで逢ひしことなき大雨に出逢ひたるが其れも四時間許にして熄み
訳: 至二十五日之朝、出逢大雨、經四時許始止。
- (8) 七月十三日英国に於て行はれたる八島艦公試運転の結果を聞くに強圧通風を以て四時間駛行したる其最小速力は十九哩二二七にして其最小汽力は一萬四千七十五馬力なりし

訳：英國所造之商艦、以備行於八島地方者、於七月十三日公試運轉之法。聞其最小速力、為一點鐘行十九里二二七、其最小汽力、為一萬四千七十五馬力。

- (9) 依て更に通常通風及び開放炉口を以て其試験を行ひたるに是は六時間時間の駛行にして最小速力十七里二六最小汽力九千五百七十馬力なりしとぞ

訳：更開放爐口、以試験其所行。則一點鐘時間所行最小速力、為十七里二六、最小汽力、為九千五百七十馬力。

ある長さの時と時刻の「時間」：

- (10) 騾馬は毎日一半の時間時間に働いて他の一半は休養するを得

訳：騾馬於一日之中、以一半時時間勞動、以一半時休養。

- (11) 一昨日京都時計会社の工場を觀ん予定は時間時間の都合にて見合せたり

訳：於昨日京都時計會社觀工場云。

- (12) 官線直通列車を除くの外多少時間時間に改正を加へ徳山以西海陸の連絡を図ることとなりたるを以て九州鉄道及大阪商船会社も夫々汽車汽船の發着時間時間を更生するの必要ありて凡左の如く定めたるよし

訳：除官線列車直以外、多少時間時間、致正加徳山、以西海陸連絡九州鐵道、及大阪商船會社汽車汽船發着時間時間、更正凡定如左。

『実学報』のソース記事に「時間」が全部で 13 箇所に見れ、例 (1) ～ (9) が「時をかぞえる単位」の意味で、例 (10) が「ある長さの時」、例 (11) (12) が「時刻」の意味である。つまり、『実学報』の原文では、哲学や物理学の概念としての「時間」が見れず、日本語独自の意味での用例が 9 例あるのみである。

一方、日本語独自の意味の「時間」の中国語訳を見ると、時を数える単位の「時間」に対して、“點鐘”“時”“時間”と 3 通りの訳語が当てられている。翻訳者から見ると、王宗海と孫福保は例 (1) のように“點鐘”を当てるのに対し、翻訳者程起鵬は、例 (2) ～ (6) の 5 箇所にそのまま「時間」の漢字表記を継承し、例 (7) に“時”を当てる。例 (8) 「四時間時間駛行したる」(9) 「六時間時間の駛行にして」の 2 箇所の「時間」は訳さなかったが、後ろの文脈で「最小速力～里」を翻訳する際は、原文より詳しく“最小速力、為一點鐘～里”“一點鐘所行最小速力、為～里”のように“點鐘”を付加えた。

また、掲載期間から見ると、王宗海と孫福保の訳語が第 5 冊に見れ、1 箇所しかないが、二人は日本語の漢字表記“時間”を継承せず、“點鐘”に翻訳している。そして、「東報訳補」欄が第 9 冊からあり、翻訳者程起鵬一人で担当し、翻訳の初期段階に「時間」をそのまま継承す

る傾向があるが、後に“時”“點鐘”を使用するようになった。用語の変化に、王氏と孫氏の影響があるのではないかと考えられる。なお、『実学報』における時をかぞえる単位の「時間」とその翻訳状況を表 4-2 にまとめる。

表 4-2：時を数える単位の「時間」の翻訳

例	中国語訳	所在冊	訳文タイトル	翻訳者	翻訳方法	備考
(1)	點鐘	5	西班牙首相遭難顛末	王宗海・孫福保	意識	
(2)	時間	9	德国帆船	程起鵬	継承	
(3)	時間	9	墨国雑事（三則）	程起鵬	継承	
(4)	時間	10	浪速艦航海計程	程起鵬	継承	
(5)	時間	10	浪速艦航海計程	程起鵬	継承	
(6)	時間	10	浪速艦航海計程	程起鵬	継承	
(7)	時	10	浪速艦航海計程	程起鵬	意識	
(8)	なし	12	八島艦公試運転	程起鵬	未訳	意識追加
(9)	なし	12	八島艦公試運転	程起鵬	未訳	意識追加

4.3.3 時をかぞえる単位の「時間」とその訳語

4.3.2 で挙げたとおり、『実学報』では日本語独自の意味の「時間」に対して、“點鐘”“時”“時間”が当てられ、しかも注釈が付されなかった。特に、現代中国語で“點鐘”が時刻を表わすため、訳語がそれぞれ「時間」と対応できるか、読者に正確に日本漢字語の「時間」の意味が伝わるか、翻訳者の「時間」に対する理解度を確かめなければならない。つづいて、英華字典、コーパスおよび今までの研究成果を利用して、「時間」とそれらの訳語との対応関係を考察する。

4.3.3.1 「時間」とその訳語“點鐘”

まず、『実学報』の訳語“點鐘”は現代中国語で時刻しか表わせないが、清末の中国ではどういう意味か英華字典で調べた。表 4-3 右の列を見ると、「八點鐘=eight o'clock」のように、清末の中国において“點鐘”が時刻を表わすことが成り立っている。また、モリソン『英華字典』（1822）を初め、英華字典 10 種を調べてみると、hour の項にいずれも「hour：一點鐘」の対応が見られる。つまり、当時の中国語において、“點鐘”が時点の o'clock と時段の hour の両方の意味を持っている。尾崎（1980）によれば、近代中国語におけるこの現象は「一形式二事柄」と定義され、しかも 19 世紀の後半、“～點鐘”という、調和のとれた一形式二事柄の表現

形式が、新しく誕生する（19世紀末から20世紀初頭にかけて）まで、60分間を表わす表現形式はなかったという。

表 4-3 : 「華英字典」における hour、o'clock と「點鐘」の対応（関係部分のみを抜粋）

辞書名	hour と「點鐘」	o'clock と「點鐘」
『英華字典』1822 モリソン (馬礼遜)	hour 半個時辰、一點鐘 The Chinese divide the twenty-four hours into twelve 時辰; hence the above expressions. The European-Chinese books call an hour a 小時辰, 'little she shin.'	what o'clock is it 是幾點鐘
『英華韻府歴階』1844 ウイリアムズ (衛三畏)	hour 時辰、一點鐘	—
『英華字典』1847-48 メドハースト (麦都思)	Chinese、2 hours 一個時辰; do. European 一點鐘; half an hour 半個時辰; twelve hours make one day 十二時爲一日; time 時候、時刻	what's o'clock 幾點鐘; eight o'clock 八點鐘
『英華字典』1866-69 ロブシャイド (羅存徳)	an hour 一點鐘; in China, an hour is equal to two European and is called 一個時辰; half an hour 半點鐘; one quarter of an hour 一刻、一刮、十五个細微; an hour and a half 一點半鐘; an hour ago、an hour since 前一點鐘; within an hour 一點鐘之間、半個時辰之内; an hour hence 後一點鐘	what o'clock is it 幾多點鐘、幾點鐘呢; it is just 12 o'clock 係十二點鐘、係正午; it is three o'clock 係三點鐘
『英華萃林韻府』1872 ドーリットル (盧公明)	hour 半個時辰、一點鐘、一下鐘; a Chinese hour 一個時辰; one quarter of an English hour 一刻; half an hour 半點鐘; hour and a half. one Hour 一點鐘兩刻、一點半鐘	what is the time by the clock 幾點鐘
『訂増英華字典』1884 井上哲次郎	ロブシャイド (1866—69) を継承、hour angle 時度; hour circle 時圈	what o'clock is it 幾多點鐘、幾點鐘呢; it is just 12 o'clock 係十二點鐘、係正午; it is three o'clock 係三點鐘
『華英字典集成』1899 鄭其照	an hour 一點鐘久; half an hour 半點鐘久	what o'clock is it 幾點鐘; it is 8 o'clock 八點鐘
『英華大辞典』1908 顔惠慶	1. a space of sixty minutes、equal to one twenty-fourth part of a day 一點鐘、六十分、一小時、時; as an hour 一點鐘、一小時; in China, an hour is equal to two European and is called 一個時辰; half an hour 半點鐘; one quarter of an hour 一刻、十五分; an hour and a half 一點半鐘; an hour ago、an hour since 前一點鐘; within an hour 一點鐘之間、半個時辰之内; an hour hence 後一點鐘	The phrases, what's o'clock? and what o'clock is it? are contractions of what hour of the clock is it? 幾點鐘、何時; it is just 12 o'clock, 係十二點鐘、係正午
『英華新字典』1913 商務書館	hour 一點鐘、一時、時刻; to keep good hours 按時至家	one o'clock 一句鐘、一點鐘
『官話』1916 K.ヘメリング (赫美玲)	one hour 一小時、一句鐘、一點鐘、一下鐘、半時; appointed time 定時; a quarter of an ~ 一刻鐘; Amp ère ~ 安丕小時 (新); an ~ and a half 一點半鐘、一點二刻	one o'clock 一點鐘、一下鐘

したがって、例 (1) のように、『実学報』の訳文では「二時間」に“二點鐘”を当て、前に「加」を付けて「2 時間が過ぎた、2 時間後」という意味の文脈を造り、「點鐘=o'clock」と語釈されるのを避けた翻訳だろう。そして、例 (8) (9) を翻訳する際、程起鵬が「最小速力」の前に付け加えた“一點鐘”も「平均一時間の最小速力」と理解したうえでの翻訳であり、“點鐘”を通して読者に「時間=hour」の意味を伝えることができたと言えよう。

「點鐘=hour」と「點鐘=o'clock」の使用状況を把握するために、台湾中央研究院近代史研

究所の「近代春秋 TIS 系統」で「點鐘」を検索し、1895 年から 1958 年までの用例がヒットした（表 4-4）。全 64 例のうち、「點鐘=hour」が 38 例、「點鐘=o'clock」が 26 例と「點鐘=hour」が多く使用されている。

表 4-4 : 「近代春秋 TIS 系統」における「點鐘」の使用例

書目	全用例数	hour	o'clock
近代中国史事日誌	3	3	0
總統蔣公大事長編	3	1	2
譚延闓日記	31	16	15
徐永昌日記	25	16	9
王世傑日記	2	2	0
合計	64	38	26

下記の具体例から見ると、「點鐘=hour」と「點鐘=o'clock」が併用される現象が 1944 年まで続いていたようである。意味を分別する時、「點鐘」が「～之内」「～之久」「又～」「毎～」のような時間帯を表わす言葉を必要とする場合は、「點鐘=hour」の意味になるが、「由～至～」「早上～」のような具体的な時刻を表わす言葉を必要とする場合は、「點鐘=o'clock」の意味になる。

「點鐘=hour」:

德使海靖照會總署，……限四十八點鐘內照覆，否則用力自辦。

筆者訳：ドイツ公使海靖は……48 時間以内に返事しなければ、自力で解決すると総署に照会した。

(西暦 1898 年 2 月 22 日『近代中国史事日誌』冊 2-990 頁)

原因當然很多，不是今天一兩點鐘之內所能列舉的。

筆者訳：理由はたくさんあり、今日 1、2 時間以内に列挙し切れるものではない。

(西暦 1949 年 10 月 16 日『總統蔣公大事長編』卷 7 下 392-403 頁)

劉席則說過年一點鐘，說風俗又一點鐘，遂畢事云。

筆者訳：劉席さんはお正月について 1 時間、風俗について 1 時間さらに話してからおしまいであった。

(西暦 1908 年 2 月 9 日『譚延闓⁴⁰日記』1908 年日記 10 頁)

⁴⁰ 譚延闓：(1876-1930) 湖南人。清の進士。湖南督軍兼省長。広東軍政府秘書長、内政部長等を歴任。民国時代の有名な政治家、書道家、組庵湘菜の創始者。

十九日 ……予一人在室靜坐約六點鐘之久。

筆者訳：19日 ……私一人で部屋の中で約6時間も座った。

(西暦1916年1月19日『徐永昌⁴¹日記』)

據英方宣布，每一點鐘被炸毀之房屋約七百所。

筆者訳：イギリスの報告によると、1時間ごとに爆破される部屋の数約700棟ある。

(西暦1944年8月15日『王世傑⁴²日記』)

「點鐘=o'clock」：

至十點鐘始展輪東下

筆者訳：10時に東に向かって出帆し始めた。

(西暦1895年11月5日『譚延闓日記』1895年南征日記 7~8頁)

予兩日來因胃中作酸，……由早八點鐘至下午四點鐘滴水不沾

筆者訳：私は、この2日間胃の調子が悪くて、……朝8時から午後4時の間何も口にしない。

(西暦1916年1月20日『徐永昌日記』)

不問你是將校，是見習生，或是士兵，一律早上五點鐘起來……

筆者訳：将校だの、見習い生だの、兵士だの問わず、皆朝5時に起きる。

(西暦1944年1月10日『總統蔣公大事長編』卷2 259-260頁)

4.3.3.2 「時間」とその訳語“時”

『実学報』において、時をかぞえる単位の「時間」を“時”と訳するのは程起鵬の1例がある。「時間」の訳語として“時”が適切か、上掲の英華字典を調べてみた。hourの項に“點鐘”のほか、「2 hours 一個時辰」や「an hour 半個時辰」なども併記され、中国における“時辰”とhourの関係を示している。『英華字典』(1822)などの5辞書に「2 hours=時辰」の対応が確認できる。『官話』(1916)「one hour 半時」のように、“時”と略す場合もある。24時間制

⁴¹ 徐永昌：(1888-1959) 山西省崞県の人、陸軍大将。1916年北京陸軍大学卒業。民国時期の有名な軍事家、1945年ミズリー号上の日本降伏調印式中国首席代表。陸軍大学学長、中華民国国防部長、行政院政務委員などを歴任。

⁴² 王世傑：(1891-1981) 湖北省崇陽の人。天津北洋大学卒業。1917年ロンドン大学卒業。1920年パリ大学法学博士。1928-38年ヘーグ常設仲裁裁判所判事。帰国後国立中央社会科学研究法制班主任、立法院委員、国立武漢大学総長、教育部部長、中国国民党宣伝部長、中央監察委員、外交部長などを歴任。著書『比較憲法』。

を始める前に、中国では 12 時間制を使用していた。一昼夜を 12 分にしてその中の 1 つが “時辰” (2 時間) である。

モリソン (馬礼遜) 『英華字典』 (1822) :

The Chinese divide the twenty-four hours into twelve 時辰, hence the above expressions. The European-Chinese books call an hour a 小時辰

メドハースト (麦都思) 『英華字典』 (1847-48) :

Chinese、2 hours 一個時辰; half an hour 半個時辰;

ロブシャイド (羅存徳) 『英華字典』 (1866-69)、井上哲次郎 『訂増英華字典』 (1884) :

in China, an hour is equal to two European and is called 一個時辰;

within an hour 一點鐘之間、半个時辰之内

ドーリットル (盧公明) 『英華萃林韻府』 (1872) :

hour 半個時辰、一點鐘、一下鐘 a Chinese hour 一個時辰

K.ヘメリング (赫美玲) 『官話』 (1916) :

one hour 一小時、一句鐘、一點鐘、一下鐘、半時

一方、『英華韻府歷階』 (1844)、『英華大辞典』 (1908)、『英華新字典』 (1913) では、hour の項に「hour=時辰」「hour=時」「hour=一時」のように、“時辰” “時” が 60 分を表わすことも確認できた。この記述から 3 辞書の間に関係⁴³があるとは言い切れないが、恐らくこの “時辰/時” は 60 分間を表わし、日本語の「時間」の意味になるだろう。

ウィリアムズ (衛三畏) 『英華韻府歷階』 (1844) :

hour 時辰、一點鐘

顔惠慶 『英華大辞典』 (1908) :

a space of sixty minutes, equal to one twenty-fourth part of a day 一點鐘、六十分、一小時、時;

as, an hour 一點鐘、一小時; in China, an hour is equal to two European and is called 一個時辰

商務書館 『英華新字典』 (1913) :

hour 一點鐘、一時、時刻

⁴³ 宮田 (2010 : 95) によれば、ウィリアムズ (衛三畏) 『英華韻府歷階』 (1844) の漢字語は 9 割強がドーリットル (盧公明) 『英華萃林韻府』 (1872) に吸収され、そして井上哲次郎 『訂増英華字典』 (1872) に流入して、後続辞書に影響を与えていることが分かるが、『英華大辞典』 (1908)、『英華新字典』 (1913) との関係は触れていない。

このように、“時辰/時”が2時間を表わすことが多い中、60分を表わすことも20世紀の英華辞書に現れた。“時辰”という表現形式が近代中国語では不明な部分が多い。60分を表わすかは文脈への依存度が高い。尾崎氏によれば、下記の『苦社会』『官場現形記』の2ヶ所の“時辰”が60分の用例になる。

一天二十四個時辰，（後略）

筆者訳：一日は24時間ある。

（王濬卿 1907『苦社会』）

我們這位堂翁也是個大癮頭，每日吃三頓煙，一頓總得吃上一個時辰。這個時辰單是抽煙，專門替他裝煙的，一共有五六個，還來不及。此刻五點鐘，不過才升帳先過癮；到六點鐘吃點心；七點鐘看公事；八點鐘吃中飯；九點鐘坐堂；（後略）

筆者訳：うちの県知事も煙草を吸う癖がある。毎日3回、1回につき1時間は吸う。この1時間はただ煙草を吸うだけで、煙草を入れ替える人が5、6人でも間に合わない。今は5時であり、職場に着くやいなや先に吸い、6時に朝食をし、7時に公務文書を読み、8時に昼食をし、9時に役所で公務を処理し、（後略）

（李宝嘉 1901-06『官場現形記』）

したがって、例7のように、程起鵬の訳語「四時」が読者に伝えたのは「4時」=8 hours=8時間」の可能性もあれば、「4時」=4 hours=4時間」の可能性もある。しかし、後ろの文脈で「午後二時」「午前五六時」など日本語原文に沿った詳しい時間表記を見ると、翻訳者は後者の「4時」=4 hours=4時間」を意識して使用したのである。

原文：「午後二時の頃には白雲の間に彷彿と三倉島を望みたり此日午後一時より速力を緩め翌朝（二十六日）午前五六時には既に東京灣に進み入り）」

訳文：“午後二時之頃、望白雲之間、彷彿是三倉島。此日午後一時之速力漸緩、翌朝（二十六日）午前五六時、既進東京灣”

4.3.3.3 「時間」とその訳語“時間”

『実学報』において、時をかぞえる単位の「時間」を“時間”と訳すのは程起鵬の5例がある。訳文では注釈が付されず、翻訳者のその語への理解度を見て取れないが、英華字典の解釈からその一端が窺えるだろう。

しかし、上掲の英華字典のうち、hourの項にいずれの訳語にも“時間”が現れなかった。それに、当時中国で活躍していたキリスト教宣教師と関係のある『六合叢談』『遐邇貫珍』や

『万国公法』(丁韞良漢訳)には“時間”が使われていない(松井 2008 : 71)。筆者が英華辞典を調べた結果、『英華大辞典』(1908)「an」の項に「an hour 一小時、一小時間」、horary の項に「hourly 每一時間」と“時間”というものがある。「an hour 一小時」が現代中国語に伝わっているもので、その次に挙げた「一小時間」は「一+小時+間」か「一+小+時間」か半然としないかもしれないが、hourly に対する「每一時間」は「每一時+間」より「每一+時間」のほうが英語の意味を伝えられる。『英華韻府歴階』(1844) hourly の項の「毎時」との繋がりから見ると、やはり『英華大辞典』(1908)における“時間” = 『英華韻府歴階』(1844)の“時” = hour と考えてよかろう。

顔惠慶『英華大辞典』(1908) :

an : used before a word beginning with a vowel sound or before h sounded, as, an hour 一小時、二小時間

horary : hourly 每一時間

ウィリアムズ(衛三畏)『英華韻府歴階』(1844) :

hourly : 毎時、刻刻

『英華大辞典』(1908)の発行から11年遡って、『実学報』の翻訳活動が1897年に始まった。その段階では、翻訳者が意図的に日本語と同じ「時間=hour」を使用できるとは言い難いが、特に例(5)のように、「十五時間」を継承したのは凡そ24時間制の表記形式を受け止めたと言えよう。そのような使用があるからこそ、日本漢字語の「時間」が英華字典に収録されることになったのだろう。

さらに、「近代史料全文資料庫」で調べた結果、『実学報』より前の該当例がなかった。1908年までの間、1900年の鄭観応の使用例が早い。その後、于宝軒輯『皇朝蓄艾文編』(1903)に収録された日本人の石井忠利が漢文で著した『戦法学』と『浙江潮』の2例も見つかった。

「145 致香山自治會節錄陽湖伍君達擬籌備憲政改良教育小學章程(節録)」

校外教授……大率毎月通常一回、或二回、毎回以五時間爲度。……

筆者訳：校外教授……およそ毎月通常1回か2回、毎回5時間をめどに。

(『近代中國對西方及列強認識資料彙編』第5輯第1分冊 鄭観応⁴⁴)

⁴⁴ 鄭観応(1842-1922) 広東省香山出身。清末から中華民国初めにかけての思想家・実業家。別名は官応。字は正翔、号は陶斎、羅浮待鶴人、慕雍山人、杞憂生など。洋務運動期の清の近代企業設立や経営に携わった。1860年、イギリス資本のデント商会で働き、英学を学んで西洋の政治と経済について理解を深めた。

查各國施放之準、每炮一尊、一分時率施放八顆、一時間六尊可施放四百八十顆。

筆者訳：各国の砲の発射基準を調べると、砲 1 台につき、1 分間におおむね 8 発の弾を打ち、1 時間に 6 台で 480 発を打つことができる。

(于宝軒⁴⁵輯『皇朝蓄艾文編』(1903) 卷 41 軍政 4/戦法学 石井忠利)

「311 最近三世紀大勢變遷史 (節録) 光緒 29 年 7 月 20 日」

發言權之實行，見之于英國職工同盟大會，……以訂定八時間勤勞條例，遂顯平民之大勢。……(見浙江潮期七歷史頁 35 至 39)

筆者訳：發言權の實行は英国職工同盟大会に見られる。……8 時間の労働条例を制定し、民衆の声を表わした。

(『近代中國對西方及列強認識資料彙編』第 5 輯第 2 分冊 大陸之民)

要するに、日本漢字語「時間 (=hour)」が『実学報』の翻訳を始め、中国士人の文章、中国に入った日本人の漢文などで使用され、『英華大辞典』(1908)にも収録されるに至った。「時間」が短期間で中国人に受け容れられたと言えよう。

4.3.4 本節のまとめ

「時間」は古典中国語に典拠があるが、日本語で新しい意味が付され「時をかぞえる単位」として hour の意味になる転成語である。『実学報』のソース記事において、哲学概念としての用例がなく、「時をかぞえる単位」の意味で使用された「時間」は 9 例ある。翻訳者はそれぞれ“點鐘”(3 例)、“時”(1 例)、“時間”(5 例)の語を当てている。当時の英華字典、言語コーパスを調べ、それぞれの訳語の合理性を考察したところ、次のことが分かる。

- ① 清末において“點鐘”が時点の o'clock と時段の hour の両方を意味し、調和のとれた一形式二事柄の表現形式である。日本漢字語「時間」の訳語として、“點鐘”が通用的かつ適切な訳語である。『実学報』では、王宗海と孫福保による訳語のほか、程起鵬による“點鐘”の使用例も見られる。
- ② “時辰/時”が 60 分間を表わすかどうかは文脈への依存度が高いため、程起鵬による「時間」の訳語“時”は読者に伝統的な“時辰”=2 hours と理解される可能性もあるが、文脈から見ると、程氏が意識的に“時”=hour を伝える可能性が高い。

⁴⁵ 于宝軒 (1875-未詳) 中華民国の政治家。北京政府、安徽派に属し、後に中華民国維新政府、南京国民政府 (汪精衛政権) の要人となった。字は子昂、志昂。清末の監生 (国子監の学生) で、後に日本に留学し、1900年に帰国し、清朝の巡警部、民政部、憲法修正館などで各職を歴任している。

- ③ 「“時間”=hour」の用例が『実学報』の翻訳者程起鵬によって使用し初め、のちに中国士人、日本人の使用によって、英華字典にも収録されたことから「時間」が短期間で中国社会に受け入れられた。

4.4 まとめ

日清戦争後は漢語の逆輸入の開始時期と考えられる。本章は日清戦争直後の1897年に創刊された『実学報』が日本漢字語の紹介に果たした役割を解明するために、翻訳の視点から『実学報』における日本漢字語の受容状況を考察した。考察の結果、次のようなことが分かった。

まず、『実学報』前後の著書に現れた新語や日本語借用語と対照した結果、『実学報』で使用された日本漢字語は量的にも、質的にも検討の余地がある。

そして、注釈付き語をめぐって、『実学報』に記されている注釈の殆んどが翻訳者の孫福保の努力によるものである。注釈内容から、翻訳者は中国の伝統教養を生かして新語を解釈しようとしたが、正確に理解したもの（「会社」「日曜日」）もあれば、漢字表記語を日本漢字語と誤解したもの（「諏訪」）もある。「巡查」「方針」のような漢字表記の写しは日本漢字語の借用とは言えないため、中日同形語の観点のほか、注釈によって翻訳の正確性も日本漢字語の判定基準にすべきであろう。

一方、注釈が付されていない日本漢字語が多いので、近代中日に重要な概念語「時間」を個別事例として検討した。『実学報』の原文には哲学、物理学的概念としての「時間」が現れず、日本語借用語としての「時間」の初出は、李（2006）に従い、梁啓超によって中国語にもたらしたとする。日本独自の意味の「時をかぞえる単位」として用いられた「時間」は中国語訳で“點鐘”“時”“時間”が当てられている。おおむね「時間」が翻訳者に理解されていたと言える。当時の読者にとって“點鐘”が最も理解しやすかった翻訳であり、“時間”が『実学報』より中国社会に紹介されたと考えられる。

したがって、日本漢字語の判定基準について、秦氏の日本漢字語の定義①②にさらに私見を加えて、以下のようにまとめる。

- ① 漢字で表記された語であること
- ② 西洋文明と接触する際、新事物・新概念を表わす意味・用法が日本語に出自を持っていること
- ③ 注釈などによって、翻訳者に正しく理解されたと判断できるもの
- ④ 当時の中国語において適切な訳語が当てられたもの

第5章 『実学報』における外来語の翻訳

現代日本語において、中国、朝鮮半島の外国の人名、地名などを漢字で表記することは一般的な習慣となっているが、それ以外の国・地域の場合は片仮名で表記するのが普通である。しかし、片仮名で表記されている語が全て外来語とは言えない。『実学報』が翻訳した 1897（明治 30）年の日本の新聞記事に載っている語には、「トド松、ソロソロ」のように、和語を片仮名で表記するものもある。また、明治時代の外来語は片仮名のみの語以外に、漢字表記が付いているもの（^{ワシントン}華盛頓、^{ドル}弗）や漢字表記のみのもの（希臘、硝子）もある。本章では片仮名表記を手がかりに、片仮名表記がある前二者に絞って、『実学報』の原文記事に載っている外来語の特徴とその中国語訳について考察する。

日本語の外来語に片仮名、漢字、平仮名、漢字と仮名の組み合わせなどの表記があるため、外来語表記に関する研究は多くある。松岡（1982）、国立国語研究所（1987）、石綿（1997）や、新聞や雑誌の分野における外国地名、人名の表記に関する山本（2009）、石井（2013）などがある。一方、中国語における日本語の外来語の音訳に関する研究は少ない。王（1992a）は国名の「アフリカ」、王（1992b）は「オーストラリア」を中心として、中国語と日本語の両方から通時的に外国地名の漢字表記を検討し、漢字表記の原則を指摘している。荒川（1997）は地名「サンフランシスコ」の音訳を論じて、「桑港」が音訳+意識の地名で、しかも「桑港」の音訳部分「桑」が中国語からきたことを論じている。また、常（2014）は魯迅が日本語から翻訳した『月界旅行』『地底旅行』で大量の音訳語を使用したことを指摘している。

考察範囲は、『実学報』に掲載された中国語訳文 139 本とソースとなる日本の新聞・雑誌の掲載記事 138 本である。ソース記事の掲載紙は『時事新報』（35 本）、『大阪朝日新聞』（34 本）、『東京日日新聞』（25 本）などの 9 種である。

本章は片仮名表記を手がかりに考察するが、原文に日本固有語（「アヲサンゴ」「スギ」など）がある。これらの語は音訳語の考察に有益であり、中国語においては外来語である例も考察対象とする。したがって、考察に際して、漢字表記が付かない片仮名語と漢字表記が付いている片仮名語を片仮名語と定義し、広義の外来語として扱う。

『実学報』ソース記事に現れた片仮名語は次のように分類できる。

A 類：漢字あり片仮名語

A-1 本行漢字片仮名ルビ語（^{ワシントン}華盛頓、^{ドル}弗など）

A-2 漢字片仮名表記並行語（トド松、バルチツク海）

B 類：片仮名单一表記語（カラワン、カリフォルニアなど）

A 類は A-1 本行漢字片仮名ルビ語のみ統計する。A-2 漢字片仮名表記並行語はこの 2 例しかないので、研究対象から外す。なお、A 類の片仮名表記が付く中国の地名、および B 類の「ソロソロ」「ソレ」「ニジレ」など副詞、代名詞、動詞 5 語は、研究対象から排除する。

5.1 片仮名語の語数と特徴

調査範囲で調べた結果、表 5-1 のように、『実学報』のソース記事にある片仮名語は延べ 505 語、異なり 297 語である。A 類の語と B 類の語とを比べると、A 類の漢字あり片仮名語が延べ 159 語 (31.5%)、異なり 71 語 (23.9%) であり、B 類の片仮名単一表記語が延べ 346 語 (68.5%)、異なり 226 語 (76.1%) である。

表 5-1 片仮名語全体の語数統計

片仮名語	延べ語数	百分率	異なり語数	百分率
A 類	159	31.5%	71	23.9%
B 類	346	68.5%	226	76.1%
合計	505	100%	297	100%

以上にまとめた外来語を単語か句かによって分類し、さらに単語を品詞別に分類すると表 5-2 のようになる。名詞は固有名詞と一般名詞とに分け、固有名詞をさらに地名、人名とその他 (船名、新聞名など) に下位区分する。なお、「デプライムインレーション 威厳ある孤独」のような句も便宜上 1 語とする。A 類の約 7 割、B 類の約 9 割が固有名詞であり、残りが一般名詞、数詞、及び句である。人名とその他の外来語は殆んど B 類である。数詞の大半は A 類の片仮名語である。

表 5-2 A 類と B 類の片仮名語の語数統計

種類別		A 類		B 類	
		延べ語数	異なり語数	延べ語数	異なり語数
固有名詞	地名	104	42	170	111
	人名	3	1	67	28
	その他	1	1	65	56
一般名詞		12	12	27	26
数詞		37	13	17	5
句		2	2	0	0
合計		159	71	346	226

表 5-2 の数値と用例を合わせ、『実学報』に訳された近代日本の新聞に載っている片仮名語の特徴をまとめると、次のようになる。

- a. 訳語の表記が統一されていない状態である。A 類の片仮名語には、「^{カナダ}加奈陀、^{カナダ}加拿陀」「^{シベリア}西比利亜、^{シベリア}西伯利亜、^{シベリヤ}西伯利」「^{パリ}巴里、^{パリ}巴黎」「^{メツト}海里、^{メツト}節」「^{シベリヤ}西伯利、^{サイベリア}西伯利」のように、漢字表記と片仮名表記にゆれがある。B 類の片仮名語にも、「アジア、アジア」「カリフォルニア、カリフォルニヤ」のような表記のゆれがある。
- b. A 類の片仮名語には、「^{アジア}亜細亜、^{ドイツ}獨逸」のように、漢字表記の発音を利用するものもあれば、「^{ランプ}洋燈、^{レール}軌條」のように、漢字表記の発音を無視して、意味のみを利用するものもある。
- c. 認知度が高い固有名詞は A 類の片仮名語が多い。外国地名、特に国名の場合、「^{アジア}亜細亜」「^{アフリカ}亜弗利加」「^{ドイツ}獨逸」「^{フランス}佛蘭西」「^{カナダ}加奈陀」「^{ハワイ}布哇」「^{パリ}巴里」など認知度の高いものは A 類の語である。国語辞書『日本国語大辞典』でもその漢字表記が収録されている。一方、「ウラグウニー共和国」「ザバイカル州」など認知度の低いものは B 類の語である。
- d. 近代中国語からの借用語も 1 例ある（「^{ケリ}苦力」）。日本では近代中国語から借用されたものを外来語として、片仮名ルビを付けた。

5.2 漢字あり片仮名語の翻訳

翻訳は主に次の 3 種類の方法によって行われている。紙幅の関係で語を一部のみ挙げる。括弧の中には延べ語数と異なり語数である。統計の際、漢字表記を基準としている。「^{ロシア}露西亞、^{ロシア}露西亞」のように、ルビにゆれがあっても、漢字表記が同じであれば同一語とする。

① 漢字表記を継承した語（延べ 99 語、異なり 48 語）

^{アジア}亜細亜、^{アフリカ}アフリカ、^{カナダ}加奈陀、^{カナダ}加拿陀、^{シベリア}西比利亜、^{シベリア}西伯利亜、^{シベリヤ}西伯利
^{パリ}巴里、^{パリ}巴黎、^{ハワイ}布哇、^{ブラジル}巴西、^{ユフロンバ}欧羅巴、^{ガラス}硝子、^{コーヒー}珈琲、^{ランプ}洋燈、^{レール}鉄軌、^{レール}軌條

② 既存の中国語に変更した語（延べ 49 語、異なり 22 語）

^{アフリカ}アフリカ—^{アフリカ}阿非利加、^{イタリア}イタリア—^{イタリア}意大利、^{ドイツ}獨逸—^{ドイツ}德國/德意志、^{フランス}佛蘭西—^{フランス}法蘭西
^{ロシア/ロシア}露西亞—^{ロシア/ロシア}俄羅斯/俄國、^{ナイフ}洋小刀—^{ナイフ}小洋刀、^{ピストル}拳銃—^{ピストル}銃、^{ボート}端艇—^{ボート}杉板

③ 未訳出の語（延べ11語、異なり10語）

^{シベリヤ}西伯利、^{デンマーク}丁抹、^{ドイツ}獨逸、^{ノースシー}北海、^{ユフロツバ}歐羅巴、^{ガス}瓦斯、^{キロメートル}基米、^{フィート}呎、^{マイル}哩、^{ルーブル}留

上掲3種類の語に重なるものがあるため、対照して表5-3のように7種類（ア～キ）に改めて分類した。3種類共通の語アがなく、2種類共通の語がイ（4語）、ウ（2語）、エ（3語）、それぞれの類で異なる語をオ（42語）、カ（15語）、キ（5語）と、A類の語の異なり語数が71語になる。

表5-3 A類の片仮名語の翻訳方法による異なり語数

	継承	変更	未訳出	語数
ア	0	0	0	0
イ	4	4	×	4
ウ	2	×	2	2
エ	×	3	3	3
オ	42	×	×	42
カ	×	15	×	15
キ	×	×	5	5
合計	48	22	10	71

イ ^{アフリカ}亜弗利加、^{シントピーターズブルグ/セントピーターズパーク}聖彼得堡、^{ニューヨーク}紐育、^{ルーブル}両（4語）

ウ ^{シベリヤ}西伯利、^{ユフロツバ}歐羅巴（2語）

エ ^{ドイツ}獨逸、^{フィート}呎、^{ルーブル}留（3語）

オ ^{アジア}亜細亜、^{アフリカ}アフリカ、^{カナダ}加奈陀、^{カナダ}加拿陀、^{ブラジル}巴西、^{ハワイ}布哇、^{ガラス}硝子、^{コーヒー}珈琲、^{ランプ}洋燈...（42語）

カ ^{イタリー}伊太利、^{フランス}佛蘭西、^{ロシア/ロシヤ}露西亜、^{ダイナマイド}爆裂弾、^{ドル}弗、^{ナイフ}洋小刀、^{ピストル}拳銃、^{ボート}端艇、^{ミトラライズ}機関砲...（15語）

キ ^{ノースシー}北海、^{デンマーク}丁抹、^{ガス}瓦斯、^{キロメートル}基米、^{マイル}哩（5語）

上記イ、ウ、エの7語は2種類共通したものである。ウ、エの語はイ、オ、カのようにそのまま漢字表記を継承したり、既存の中国語に変更したりすることもある。この未訳出は要約して意識することによるものである可能性が高い。キの語には漢字表記があるにも関わらず、訳出しなかったのは、これらの語への認知度が低かったからと考えられる。

それでは、継承、変更、未訳出の語を詳しく分析して見よう。

5.2.1 漢字表記を継承した語

- (1) 加幡定雄出品の集魚灯は巧みに出来たり^{ガラス}硝子を以て蔽ひし^{ランプ}洋燈を装置し水中に半を沈め魚を寄せて釣り又は網にて漁するものなり東京府には此他に見るべきものなし
(『大阪朝日新聞』「水産博覧会」)
- (1') 加幡定雄地方之捕魚法、用集魚燈、其製甚巧、中用^{硝子}燃點、外皆遮蔽、將^{洋燈}裝置水中、半沈於下、魚見燈光、皆寄集於此。或釣或網、無不如意。
(『実学報』「水産博覧會」)
- (2) 今回は百万ルーブルを費す予定なりと而して大統領滞留中は又重なる^{コーヒー}珈琲店音樂園等特に仏国水兵の為めに公開し
(『時事新報』「仏国大統領の露帝訪問」)
- (2') 今回豫算之費、則加至百萬兩、而歛留大統領之地方、又重設^{珈琲}店音樂園等、使法國水兵、咸以此地為公設之所。
(『実学報』「法國大統領往見俄帝之訪問」)

例のように A 類の漢字あり片仮名語は説明や注記をともし入れず、中国語訳にそのまま漢字表記が継承された。特に「加奈陀、加拿陀」「巴里、巴黎」「西伯利亞、西伯利、西比利亞」のように表記にゆれがある言葉もそのまま継承された。

例 (1) の「^{ガラス}硝子」「^{ランプ}洋燈」のような語は、漢字の音訓を用いず、漢字表記が一種の当て字として用いられ、該当片仮名語の意味を表している。つまり、漢字文字列が指し示すものと外来語の指すものを一致させるものである。「硝子」は、当初、宣教師によってもたらされた *vidro* に「^{ビードロ}玻璃、^{ビードロ}硝子」の語が当てられ、江戸時代になって蘭学の影響で外来語を一応翻訳して、その訳語が外来語の表記として慣例化されて、*glass* 「^{ガラス}硝子」、*lamp* 「^{ランプ}洋燈」という対応した訳語ができた(松岡 1982 : 97, 102-104)。この 2 語は明治時代に引き継がれ、新聞記事でも用いられるようになった。

中国語では、「硝子」には人工水晶の意味として明の時代に用例があった⁴⁶。日本では、この中国語を借用して外来語に当てた。従って、記事を翻訳した際、意味もあまり変わらない「硝子」をそのまま継承できたのだろう。

⁴⁶ 曹昭『格古要論・硝子』「假水晶用藥燒成者、色暗青、有氣眼。或有黃青色者、亦有白者、但不潔白明瑩、謂之硝子」

筆者訳：もし水晶を薬で焼いた場合は、色は暗い青色で、空気の穴がある。黄ばんだ青色のものがあったり、白いものがあったりもするが、透き通っていないのは、硝子と呼ぶ。

「洋燈」は中国製か日本製か語源追及する必要がある。但し、中日共通文字列として、「洋銀」「洋琴」「洋杖」「洋筆」「洋漆」など「洋」を付けると欧風のものともみる一種の文字使いの原則が見られ、両言語で共通する（石綿 1997：325）。

例（2）の「珈琲」は漢字の発音を利用したもので、現代日本語は「コーヒー」であり、中国製か日本製か定説がない。中国語では、1819年モリソンの『華英字典・Part II』に「咖啡 coffee」⁴⁷が早くも現れ、その後も「哈非」「加非」「架非」「考非」「喀啡」「珈琲」などの表記があり、19世紀後期において「加非」がよく見られる⁴⁸。現代中国語では「咖啡」という文字列で安定している。日本の『学研漢和大字典』では「コーヒー」を「珈琲」と書くものに〔国〕のマークがついているため、日本でこの文字の使い方か日本風とされているが、「珈琲」も中国製という説もある（石綿 1997：326）。「珈琲」という表記が中国語にあったか、或いは「咖啡」の語形に近いかの理由で、翻訳した時そのまま継承したと考えられる。

5.2.2 既存の中国語に変更した語

（3）茲に一言せんと欲するは露西亞に輸入する茶の等差税を拂はざるべからざる一事なるが歐羅巴露西亞に輸入する茶は即ち西伯利に輸入する分よりも一「プード」に付き八金留の多額を拂はざるべからず...

（『大阪毎日新聞』「東部西伯利と西伯利鐵道」）

（3'）雖不能以余一人之私言為定、（略）其大旨不過以俄羅斯輸入茶葉為大宗、及歐羅巴洲界内之俄羅斯所運之茶、亦可由鐵路輸入。從前西伯利陸運經費、每重一頗督、需費銀八圓。

（『実学報』「東部西伯利鐵道」）

例（3）のように、「露西亞」という漢字表記にロシアという片仮名が付いているが、この漢字表記をそのまま継承せず、「俄羅斯」という表記に変えている。この箇所だけでなく、すべての「露西亞」に対して、「俄羅斯」または「俄國」に訳している。このように、日本語と中国語はそれぞれ定着した訳語が「露西亞」と「俄羅斯」がある。ただし、「俄羅斯」が中国製か否かは追及すべき問題である。何故ならば、日本最初の世界一周日記の『航米日録』（1860年）に「俄羅斯」の用例が3例あるからである。その謎を解いたのは孫（2015）である。氏の考察によると、「俄羅斯」は早く中国に定着し、後期漢訳洋書でも「俄羅斯」が多用

⁴⁷ 『華英字典・Part II』（1819：383）「咖：This character is in vulgar use. Kea fei 咖啡 coffee、Kea-la-pa 咖喇吧 vulgar name given to Java.」

⁴⁸ 『近現代辞源』（2010：431）による。

されている。一方、日本語の「露西亜」が現れる以前、マテオ・リッチ（利瑪竇）の『坤輿万国全図』（1602）の訳語「魯西亜」が早くから日本語に取り入れられて、明治の中期まで長く使用された。新しい中国語表現「俄羅斯」の使用は一部で確認できたが、定着しなかった（孫 2015 : 140-141、150）。

(4) 植物学上此樹の分布を記せば東部^{アフリカ}亜非利加に於てはザンジバル地方に自生し
(『時事新報』「内地と台湾の相違」)

(4') 然於植物學上考究此樹之來歴、記此樹分布之地、東部阿非利加於若痕其拔路地方、則自能生殖。
(『実学報』「臺灣植物與内地相違」)

次に「亜非利加」は日本語原文の 2 ヶ所に出現するのに対して、継承したものと既存の中国語に変えたものが 1 例ずつある。例 (4') は既存の中国語「阿非利加」に変えた例である。王 (1992a) の考察によると、中国で最初のアフリカの当て字表記はおそらく 1602 年の『坤輿万国全図』にある「亜非利加」である。この本の作者である西洋人宣教師のマテオ・リッチが考案した漢字地名語が多くそのまま日本に受け入れられたとしている。中国語の影響で日本語訳には 1869 年『世界国尽』の「阿非利加洲」、1872 年『世界都路』の「亜非利加」などの例がある。「フ」に当たる部分は、当初、漢字の「弗」「佛」「拂」「布」「夫」などが当てられたが、最終的には字形が簡単で慣習的に「フ」と発音する「弗」に定着した。逆に日本の新聞記事を中国語に訳す時、「亜」より「阿」の発音が「ア」に近いため、中国語として慣用化していた「阿非利加」に変えたのだろう。

(5) …の六名は海中に溺れぬ斯くと見エナルジヤ一號は^{ボート}端艇を卸して救ひ上げしも井上丹藏のみは不幸にして溺死せりと…
(『大阪朝日新聞』「帆船沈没」)

(5') …六人、同溺海中。英瀛船急放^{杉板}援救、惟井上丹藏、不幸溺死。
(『実学報』「帆船沈没」)

『学研漢和大字典』では、「ボート」を「端艇」と書くものに〔国〕というマークがついているため、日本独自の文字列だとされている（石綿 1997 : 326）。「杉板」は『日本国語大辞典』に収録され、「杉の木の板」の意味で、「ボート」と関係ないものである。

一方、『漢語大詞典』では「端艇」を収録せず、「杉板」が日本語と同じ「ボート」の意味であり、「杉板子」「杉船」「舳板」「舳舩」を収録している。いずれも「ボート」の意味になる。用例は清の時代に集中していて、恐らく「ボート」の訳語として表記が定まらない時期

の例である。表記の揺れがあるが、日本独自の文字列を翻訳した際、中国語既存の語に変えたのだろう。

実際に、「端艇」は中国語と無関係でない。『日本国語大辞典』では、「ボート」の漢字表記として「短艇」も挙げている。「短艇」は中国の唐代羅鄴の詩「漾漾悠悠幾派分、中浮短艇与鷗群」を出典としている。日本語では発音が同じである「端」に代われ、「ボート」の訳語に当てられただけである。

5.2.3 未訳出の語

(6) 此運河は河流を利用して開通せらるべしと雖も而も新に開設を要する運河は幾ど一千キロメートル基米に及ぶべし而して廣大なる幾多の泊船渠はリガ及シェルソン間の十有九市邑竝にキーエフに設置せらるべく

(『大阪朝日新聞』「運河計畫」)

(6') 此運河之河流、雖利用開通、而新開設之運河、地已廣大、且多有泊船渠、利額及希賢路沙痕之間共十有九市邑。

(『実学報』「運河計畫」)

未訳出の語には、漢字表記を継承したこともあれば(例「西伯利、欧羅巴」)、既存の語に変えることもある(例「獨逸、呷、留」)。しかし、敢えて訳さなかったのは、おそらく内容の要約のため、訳出しなかったと推測する。例(6')は、日本語原文の文法への理解が不十分のため、訳文の切れ目がやや不自然だが、原文への理解には問題がない。ここでは距離の詳しい記述「幾ど一千キロメートル基米に及ぶべし」を一種の重複内容と見て、「廣大なる」のみを訳したと考えられる。

なお、日本の蘭学者宇田川榕庵が造った訳語「瓦斯」⁴⁹のように、近代中国語に借用され、広く使用されたが、『実学報』の訳文では訳されなかった言葉もある。

5.3 片仮名单一表記語の翻訳

表 5-2 で示す通り、地名や一般名詞の半分以上、人名、その他の固有名詞の殆んどが B 類の片仮名单一表記語である。これらの語を中国語に翻訳する場合、大体下記の 3 種類の方法による。

⁴⁹ 『日本国語大辞典』「瓦斯」の語誌によると、日本への紹介は、江戸時代末期の蘭学者による。最も早い時期の例としては挙例の「植学啓原」(1833)「舍密開宗」(1837-1847)があり、大気とは区別される気体としてとらえられている。二作品の作者は宇田川榕庵である。

① 音訳の語：延べ 233 語、異なり 151 語)

ウアツツー鳥矮之之、アラバマ―阿辣拔麦、トロント―托羅痕托、プードー頗督

② 意識の語 (延べ 37 語、異なり 29 語)

アラメダ、ソカロ―両公園名、ナポレオン―法人、パーセロナ―西班牙国京

③ 未訳出の語 (延べ 76 語、異なり 68 語)

テアーガーデン、ビスマーク、フオール、レモン、ロープ

上掲 3 種類の語にも重なるものがあるため、前節と同じように対照して表 5-4 にまとめた。3 種類共通の語ア (1 語)、2 種類共通の語がイ (5 語)、ウ (12 語)、エ (3 語)、それぞれの類での異なり語はオ (133 語)、カ (20 語)、キ (52 語) と、B 類の語の異なり語数は 226 語になる⁵⁰。

表 5-4 B 類の片仮名語の翻訳方法による異なり語数

	音訳	意識	未訳出	語数
ア	1	1	1	1
イ	5	5	×	5
ウ	12	×	12	12
エ	×	3	3	3
オ	133	×	×	133
カ	×	20	×	20
キ	×	×	52	52
合計	151	29	68	226

ア フオール (1 語)

イ ウイリアム、シンディケート、スペール、ローゼン、エナルジヤー (5 語)

ウ アヲサンゴ、ウンテル・デン・リンデン、タイムス… (12 語)

エ クロムスタツド、デッキ、ベテルホツフ (3 語)

オ アノトー、アラバマ、オリガ、クロード、コトリン、ナイル… (133 語)

カ アラメダ、カノー、ソカロ、ハバナ、ブルケー、メツト、レボソ… (20 語)

キ アダン、カナドス、キルギース、サボテン、レモン… (52 語)

⁵⁰ 認定の際、「ニコラエフスク・ニコラエフスク」「フード・プード」「フオール・フォール」を同一語とする。

上記アの1語は文章の必要に応じて音訳、意識、或いは省略される。イの5語は音訳した場合もあれば、意識した場合もある。ウの12語はイ、オのように音訳した場合もあれば、訳出しない場合もある。この未訳出は要約して意識することによるものである可能性が高い。キの未訳出はこれらの語への認知度が低かったからと考えられる。

それでは、音訳、意識、未訳出の語を詳しく分析して見よう。

5.3.1 音訳の語

B類の片仮名単一表記語延べ346語のうち、233語(67.3%)が漢字によって音訳された。現在でも用いられている語を表5-5に挙げ、参考のために現代中国語を追加した。

表 5-5 B類の片仮名語の音訳例

片仮名語	品詞	中国語訳	現代中国語
カヒー	一般名詞	卡希	咖啡
カラワン	一般名詞	卡辣滑痕	驮隊、驮商
キューバ	地名	氣油派	古巴
サガレン	地名	殺額痕	萨哈林
シカゴ	地名	雪茄閣	芝加哥
トロント	地名	托羅痕托	多伦多
ニウジーランド/ ニュージーランド	地名	泥烏拔之辣痕獨/ 泥油其之辣痕獨 ⁵¹	新西兰
プード	数詞	頗督	普特
フヨウ	固有名詞	夫搖烏	芙蓉
ホノルル	地名	化諾路	火奴魯魯/檀香山

表 5-5 の例と合わせて見ると、片仮名単一表記語の中国語音訳の特徴として、次のことが挙げられる。

- a. 膨大な片仮名語は、漢字表記を参照できないので、音訳語を作るにも相当の苦勞をしていたことが分かる。例えば、「比律賓/フィリッピン/フィリツピン」に対しては、漢字表記があればそのまま継承するが、漢字表記がない場合、「夫以利之皮」と「夫利普沙」と2通りの音訳語が当てられた。「イルクートスク」に対しては、「以路苦託司苦」「以路苦託斯路」「以路苦託司路」と3通りの音訳語が当てられた。

⁵¹ 中国語訳文では「煉」で、「辣」の誤字であろう。

- b. 片仮名単一表記語への理解が不足している。例えば、「カヒー」の中国語訳について見ると、「カヒー」と「カフイー」が同じ「珈琲」を指すことが分からず、翻訳者が前後の文脈によって「カ希酒店」(カヒーホテル)に翻訳した。また、中国語訳文では、地名を示す場合には下線を付けて示すが、日本語原文 1 語に対して 2 箇所下線したのはおそらく 2 つの地名と違ってそれぞれ音訳したのだろう。

「ニウジーランド：泥烏拔之辣痕獨」

「ニュージランド：泥油其之辣痕獨」

- c. 発音をできる限り日本語の発音に近づける傾向が見られる。日本の新聞記事には英語などの原語の綴りが載っておらず、原語を確認できなかったために片仮名のみで表記されているものを媒介として中国語翻訳したからと考えられる。

「エムブレス・オブ・チャイナ：也莫簿來斯惡士氣耶已奈」(Empress of China)

「ウイリアム：烏以利矮磨」(William)

- d. 片仮名語の仮名に逐一漢字を当てる原則がある。「1 仮名対 1 漢字」が主な表音方法だが、発音の近い漢字がない場合、仮名 1 文字に漢字 2 文字当てて示すものが 2 例ある。中国の古い表音の方法「反切」と類似する。

「イルクートスク：以路苦託司苦」

「ウンテル・デン・リンデン：烏痕鐵路 笛痕 利痕笛痕」

「クキンスランド：苦意痕斯拉痕獨」

「フレデリキ：夫立笛利克以」

「スギ：司辯以」

- e. 一部の片仮名と中国語訳の漢字の対訳関係が比較的安定している。例えば、

「イ」と「以」： 「バイカル：拔以卡路」 「イルクートスク：以路苦託司苦」

「ラ」と「辣、拉」： 「アンガラ：矮痕額辣」 「クキンスラント：苦意痕斯拉痕獨」

「ン」と「痕、咂」： 「カラワン：卡辣滑痕」 「ブレストン：夫來思獨咂」

多出している「ン」を例に見てみよう。「痕、咂、愛」とも当てたことがあるが、その中では「ン」と「痕」の対応関係が比較的安定している。翻訳者全員とも「ン」に「痕」を当てていた。「ン」を「痕」と翻訳した字数について翻訳者ごとに見ると、孫福保が 30 回、程起鵬が 28 回、王宗海/王仁俊が 13 回、王宗海/孫福保が 1 回である。「咂」「愛」を当てるのは翻訳に携わった当初の結果である。

「シチー・オフ・ベキン：西幾握夫攀開呬」王宗海／孫福保

「ブレストン：夫來思獨呬」王宗海／孫福保

「エルフヒンストン：愛路府希愛司托愛」程起鵬

B 類の片仮名語を音訳する場合、片仮名と中国語訳の漢字の主な対応関係をまとめた（付録 4）。片仮名は五十音、清音、濁音、半濁音の順に縦で並べており、歴史的仮名遣い「キ、エ」も含める。例として、清音と漢字の対応を抜粋して表 5-6 に示す。なお、下線するものは「1 仮名対 2 漢字」の対応関係である。

表 5-6 『実学報』における片仮名と漢字の対応（清音）

仮名	漢字	仮名	漢字	仮名	漢字	仮名	漢字	仮名	漢字
ア	矮、阿、啞	イ	以、已、衣	ウ	烏	エ	賢	オ	啞、和、夏
カ	卡	キ	克以、氣、 <u>克</u>	ク	苦、可	ケ	開	コ	誇、古
サ	殺、煞、薩 沙	シ	希、之、西	ス	司、斯	セ	息	ソ	沙
タ	他、太	チ	氣、幾	ツ	之、此	テ	鐵	ト	託、托、篤
ナ	那	ニ	泥、尼	ヌ	奴	ネ	内	ノ	諾
ハ	哈	ヒ	希	フ	夫、府、富	ヘ	里	ホ	化、保
マ	麥	ミ	米	ム	磨、木	メ	なし	モ	木、莫、謨
ヤ	耶			ユ	油			ヨ	搖
ラ	辣、拉、癩	リ	利、立、里	ル	路、魯、羅	レ	立、來、蘭	ロ	洛、羅
ワ	滑、懷	キ	伊、以、意			エ	賢、愛	ヲ	辣（ママ）
ン	痕、愛、呬								

逆に言うと、一定のルールに従って施した音訳語は原語の発音に遡ることができる。『実学報』の音訳語に用いられた漢字を見れば、日本語原語の片仮名を大体推測できよう。例えば、「卡辣滑痕」を見ると、「カラワン」という日本語に辿り着くことができる。

5.3.2 意識の語

(7) 其他の諸國は皆トークン、モニーとして之を通用せしめざるなし、...

（『中外商業新報』 「圓銀通用禁止と引換期限短縮」）

(7') 其他諸國、皆金貨與銀貨並用。

（『実学報』 「日本禁止圓銀通用及短縮改換限期」）

(8) 凱旋門上には金色の肖像を建つ、是れ嘗てナポレオンが伯林を蹂躪せし際、掠奪して
巴里に建てしもの...

(『東京日日新聞』「伯林日記」)

(8') 凱還門上肖當時凱還之像、建設於此、上塗金色、是蓋因伯林始遭法人蹂躪之際、為法
人建於巴黎。

(『実学報』「伯林日記」)

全 346 語のうち、37 語 (10.7%) が意識された。例 (7) の「トークン・モニー」は英語の token money で、「代用貨幣」の意味である。19 世紀末、日本は欧米社会に従って金本位制に転換するが、貨幣法の実施においても一定の過渡期間が必要である。翻訳者が前後の文脈によって「銀貨通用禁止」の趣旨を理解し、「金貨與銀貨並用」と意識した。例 (8) の「ナポレオン」は現代中国語で「拿破倫」と訳すが、当時の翻訳者はその対訳ができなくても、前後の文脈からフランス人であることを知ったうえで「法人」と意識している。

5.3.3 未訳出の語

(9) 田中氏の藍作等にして一般の土地柄尤も農作に適しレモン、パイナップル、煙草、珈琲、甘藷等を試殖するに幹葉繁茂し...

(『中外商業新報』「八重山群嶋開拓の好望」)

(9') 田中氏則專作藍靛、一般之土地所宜、尤與農作相適、如煙草珈琲甘藷等。試取殖之、莫不幹葉繁茂。

(『実学報』「八重山群島開拓之好望」)

全 346 語のうち、76 語 (22.0%) が訳出されなかった。一般名詞に「エレベートル、カカオ、チヨロレット、パイナップル、レモン、ロープ」などがあり、固有名詞に「ウヰルヘルム帝、タイムス通信社、機関新聞ハムブルゲル・ナハリヒテン、ピーターホーフ宮、ロイラル電報」、人名「ビスマルク公」などがある。例 (9') のように、「煙草、珈琲」は漢字表記を継承したが、片仮名単一表記語「パイナップル、レモン」は訳出していない。羅列された農作物の一種として省略しても差し支えないためであろう。つまり、片仮名単一表記語は文脈上訳さなくても文意が通じる場合、その片仮名語は『実学報』において訳出されなかったことが分かった。

上掲の A 類と B 類の異なり語数をそれぞれ統計したが、漢字表記を別として、A 類と B 類に片仮名が共通したものに「ボンバイ、メツト、ルーブル」の 3 語がある。漢字表記がある場合、「^{ボンバイ}孟買、^{メツト}海里、^{メツト}節」の漢字表記を継承したり、「^{ルーブル}留 → 圓」と変更したりした。片仮名

単一表記の場合、「ボンバイ→薄痕培以」と音訳し、「メツト→里、ルーブル→両」と意識した。定訳と異なるものもあるが、翻訳者の翻訳能力をある程度表わせると考えられる。

ちなみに、A 類と B 類のほか、『実学報』のソース記事に漢字表記のみで外来語を表すものも現れた。この種類の語は今回研究対象としないが、漢字あり片仮名語の定着度を考察するには参考となるため、ここで少し触れたい。日本語では、「亜米利加」「土耳其」「獨逸」「麦酒」「露西亜」のように漢字表記のみの語や、「濠洲」「桑港」「獨國」「佛国」「米国」「北米合衆国」「拉病」「露國」のような造語や略称も数多く使われている。造語には漢字表記のみの場合と平仮名ルビを付ける場合がある。いずれにせよ、漢字表記のみ語と造語、略語の使用はこれらの外来語が日本で使用が長く、認知度も高く、日本語として溶け込んだ証拠と言える。なお、荒川（1997）で指摘した「桑港」のような中日合作による造語もあるため、中国語に翻訳する際、漢字表記も継承しやすかった。

5.4 『実学報』「中西合璧表」の訳語との関係

『実学報』の「英報輯訳」には、『倫敦東方報』『上海字林西字報』『横濱日日西字報』などから英語記事の中国語訳が 113 本掲載された。英語翻訳者が最初から最後まで烏程（浙江省）の王斯沅一人によって行われた。

『実学報』第 2 冊奥書の「本館告白」第 8 項目によると、地名の英語と中国語訳の対応を一貫するため、「英報輯訳」の後に「中西合璧表」が付けられている。

本館分為報、合為書、所撰中西合璧表、滿一葉附入。将来可入英報輯譯後。

筆者訳：当社は独立では報（新聞）とし、併せて本とするため、「中西合璧表」を編集して、1 頁分になったら附す。のちのち「英報輯訳」欄の後に付け加えるつもりである。

第 3、7、10、13 冊に「中西合璧表」が付けられ、計 225 語（重複語 2 語を除く）がまとめられた。日本語を介した二次的翻訳と英語の直接翻訳との関係を見るために、共通した言葉を次の表 5-7 にまとめた。『実学報』東文報訳の訳語を「東報訳語」とし、「中西合璧表」の訳語を「英報訳語」とする。

表 5-7 東報訳語と「中西合璧表」英報訳語の対照

片仮名語	東報訳語	英報訳語	現代中国語
カナダ/カナダ 加奈陀/加拿陀	加奈陀/加拿陀	Canada 加拿大	加拿大
サンフランシスコ 桑 港	桑港	San Francisco 三藩息斯可	旧金山
シベリア / シベリア / サイベリア シベリヤ 西比利亜 / 西伯利亞 / 西伯利/西伯利	西比利亜/西伯利亞/西 伯利/西伯利	Siberia 西比利亜	西伯利亚
セントピーターズバーグ 聖 彼 得 堡	聖彼得堡/大彼得堡	St. Petersburg 聖俾得斯堡	圣彼得堡
ヒリツピン 比律賓/フィリッピン/ フィリツピン	比律賓/夫利普沙/夫以 利之皮	Phillipines 斐立品	菲律宾
フランス 佛蘭西	法蘭西	Francis 法琅西	法兰西共和国/ 法国（略称）
ペルシヤ 波斯	波斯	Persia 波斯	波斯
ボンベイ 孟買	孟買	Bombay 孟買	孟买
アレキサンダー	該当なし	Alexander 亜力山打	亚历山大
ウイリアム	烏以利矮磨	William 威廉	威廉
キューバ	氣油派	Cuba 古巴	古巴
シカゴ	雪茄閣	Chicago 雪加哥	芝加哥
セイロン	息以洛痕	Ceylon 錫蘭	锡兰
ニウジーランド/ ニュージーランド	泥烏拔之辣痕獨/ 泥油其之辣痕獨	New Zealand 鈕齊蘭	新西兰
モスクウ	公爵之府（*誤訳）	Moscow 木司寇	莫斯科

英報訳語と東報訳語を対照してみると、訳語に大きな差があることがわかる。例えば、「雪加哥」と「雪茄閣」のように、英報と東報の翻訳者が各自に音訳語の考案を工夫していたことが分かった。英報訳語と比べながら、東報訳語の特徴が下記のようにまとめられる。

- a. A 類の漢字あり片仮名語の場合、東報訳語は日本語の外来語の漢字表記を継承する傾向がある。例えば、Canada が英報訳語で「加拿大」と翻訳されるが、東報訳語は「加奈陀」「加拿陀」を継承している。Phillipines が英報訳語で「斐立品」と翻訳されるが、東報訳語は「比律賓」を継承している。

- b. B 類の片仮名単一表記語の場合、東報訳語は片仮名に逐一漢字を当てる原則に沿って音訳するため、英報訳語より訳語の字数が多い。例えば、「夫利普沙」「夫以利之皮」「烏以利矮磨」「氣油派」が英報訳語の「比律賓」「威廉」「古巴」より字数が多い。
- c. 英報訳語「Francis 法琅西」と同じように、東報訳語は「佛蘭西^{フランス}」の「佛」を取らず、「法蘭西」と翻訳している。「法蘭西」や「法国」など「法」系音訳語が中国語に浸透していた証拠と考えてよい。
- d. 現代中国語から見ると、英報訳語に従ったものは「威廉」「加拿大」「古巴」「錫蘭」の 4 語ある。「亞歷山大」「芝加哥」「新西蘭」「莫斯科」などが東報訳語より英報訳語に近い。一方、東報訳語に従ったものは「西伯利亞」「聖彼得堡」の 2 語だけあるが、東報訳語の役割を無視してはいけない。

5.5 まとめ

本章では、『実学報』に翻訳された日本の新聞記事に現れた外来語の特徴と翻訳状況を考察した。結論をまとめると、以下のとおりである。

『実学報』ソース記事に現れた外来語は A 類片仮名語の約 7 割、B 類片仮名語の約 9 割と固有名詞が多くあり、残りが名詞、数詞などである。

外来語全体の約 3 割が A 類「漢字あり片仮名語」であり、翻訳に便利な条件をもたらした。特に、日本語における外国地名の漢字表記が中国語と深い関係を持ち、翻訳の際、中国語として許容できれば、漢字表記を継承する傾向がある。中国語に慣習的な言い方があれば、既存語に変えるが、漢字表記にゆれがあっても、そのまま中国語に継承されたもの（「加奈陀、加拿陀」「巴里、巴黎」「西比利亞、西伯利亞、西伯利」など）もあることが判明した。

B 類「片仮名単一表記語」に対して、漢字音訳語を作ったり、前後の文脈によって意識したりして、いろいろと工夫をしていた。また、音訳語を作成する際、片仮名に逐一漢字を当てて翻訳する規則があり、「ン」と「痕、愛、呬」のように、片仮名と漢字の対応は多様性を呈しているが、翻訳作業が進む過程で対応関係が比較的安定していった。その安定した対応関係も音訳語から原語の発音に遡れる利点もある。

さらに、『実学報』の英報訳語と対照した結果、日本語を媒介にして中国語に翻訳する過程において、翻訳者が英報訳語を参照せず、自分の音訳原則に従っているが、その音訳語が現代中国語に残るものが比較的少ない。

第6章 音訳語から見る『実学報』の参照書物

前章では『実学報』「東文報訳」欄における外来語の翻訳状況を考察し、『実学報』における音訳語（延べ語数 233 語、異なり語数 151 語）を整理し、日本語の片仮名と音訳語の漢字の対応関係をまとめた。中でも比較的安定した片仮名と漢字の対応があり、しかも教科書『東語入門』（1895）と似ていることに気付いた。

新聞と教科書はそれぞれ記載内容と出版形態を異にし、独自の特色を持った活字資料であり、別々に研究がなされている。清末の日本語教科書に関しては、李（2003、2006）、鮮（2011）、陳（2012、2014）などの研究がある。中国・人民教育出版社課程教材研究所のプロジェクト「中国百年教科書整理と研究」は中国社科基金重大項目として採択され（課題番号：10zd&095）、中国におけるここ百年間の教科書研究の重要性を示している。それに続いて、続（2016）が音声教育、劉（2017）が文法教育の視点から『東語入門』を取り上げている。このように、清末の日本語教科書に関して、利用教育関係の研究が見られるが、新聞の翻訳と教科書の関係についての研究は管見の限りないようである。

そこで、本章では、『実学報』音訳語における『東語入門』の利用状況を明確にする目的で、実例を挙げながら『東語入門』の音声説明部分と本文部分との関係を考察する。そして、他の日本語に関する記録と対照し、『東語入門』以外に参照した書物を検証する。

6.1 『実学報』における『東語入門』の利用

6.1.1 『東語入門』とその研究

『東語入門』は 1895 年刊行の石印本で、中国最初の日本語教科書の 1 つである。著者は浙江省海塩県の陳天麒、出版元は不明であり、東京都立日比谷図書館実藤文庫（現在は東京都立中央図書館特別文庫室所蔵）に一冊本（A 本）と二冊本（B 本）の 2 種が収蔵されている。『纂輯日本訳語』（1968）に収録されている B 本は、52 頁あり、王韜の序、著者の自序、凡例、目次、発音と本文からなる。発音の説明は“字母”（「いろは歌」「清音」「濁音」「半濁音」を含む），“拼法”の 2 つの部分に分かれている。本文は「巻上」と「巻下」に分かれ、1922 語⁵²が収録され、次のように、意味によって 35 の門に分類している。それぞれの門と語数は下記のとおりである。

⁵² 福島（1993）、李（2003）が 1970 語、劉（2007）が 1922 語となる。陳（2014）では 1921 語と数えたほか、そのうち 20 語が重複したと指摘する。

「巻上」天文門/54、時令門/99、地理門/72、郡国門/44、君臣門/69、刑法門/35、
人倫門/49、人物門/57、形体門/68、文事門/45、武備門/34、珍宝門/35、
宮室門/63、服飾門/44、飲食門/48 (15門、816語)

「巻下」舟車門/43、器用門/134、医道門/48、采色門/26、数目門/35、秤尺門/27、
菓蔬門/80、草木門/48、花卉門/42、飛禽門/39、走獸門/43、鱗介門/31、
昆虫門/36、進口貨門/26、出口貨門/32、一字語門/171、二字語門/96、
三字語門/47、四字語門/33、談論門/69 (20門、1106語)

著者の自序によると、陳天麒は1885年⁵³から父親（「家大人」）に従って日本に赴き、東京に6年間滞在し（「在東京六年」）、滞在中、暇を利用して日本語を習った（「舉業之暇、兼習東西文語」）ことが分かる。両国の往来や貿易が盛んになって（「貿易日盛」）、翻訳者を育成するために（「輯一書以啟後學」）、本書を編集した。実藤恵秀の教示によれば、家大人とは陳明遠のことで、『遊歴日本図経』の記録によると、陳明遠は第3代公使徐承祖、第4代公使黎庶昌の参贊官として日本に赴き、公使の任期が3年で、陳明遠の滞在期間は合計6年間である⁵⁴。

「自序」余自乙酉年隨家大人使日本。舉業之暇、兼習東西文語、在東京六年、該國語言文字略能會通一二。（中略）況兩國近又修睦、增開商市、東人之來我華者愈多、貿易日盛、而顧無人焉。輯一書以啟後學、……（後略）。

筆者訳：私は乙酉年に親に従って日本に赴いた。仕事の傍ら、暇を利用して日本語、西洋言語を習った。東京に居ること六年、その国の言語、文字に多少通じることができた。

（中略）それに、両国は最近関係を修復し、開港市を増やし、日本人で中国に来る者がますます多くなり、貿易が日に日に盛んになった。しかし、通訳できる人がない。本を編集して後学を啓蒙し、……（後略）。

『東語入門』の特徴として、本書は初学者のために作られ（「專為初学者而作」）、中国の類書の体裁で編集されている。漢字で日本語の発音を示し（「注以華音」「旁注華音」）、その漢字の発音は江蘇、浙江辺りの訛り（「江浙口音」）であること、日本語の発音に似ている漢字がない場合、「反切」の方法で示していることは凡例の説明から分かる。

⁵³ なお、日本側の記載によると、陳明遠が日本に赴く時期が1884年である。外交資料館史料『明治天皇紀』第六343ページに「清国の黎庶昌公使の後任、徐承祖特命全權公使は、1884年（明治17年）1月2日、陳明遠等隨員3人を率いて参内し、承祖皇帝の命を奏し、国書を捧呈した」とある。川崎（2012）から引用。

⁵⁴ 福島（1993：31）。

- 一、首張所列日本字母、其旁亦注以華音、使學者讀去自能一目了然。
- 一、東字拼法頗與西文相同。書中所載拼法、旁注華音、無不辨正。學者用心研究、自能得其正音也。
- 一、是書所載東字一本東國字體、并無一字杜撰、而所譯華文、亦不以土語夾雜其中。
- 一、所注字音系就江浙口音、易於通用。而東國之音中國無字相肖者甚多、書中俱以反切取音。凡旁加一柱者、均須反一音而讀之、以志辨別。
- 一、書中所分各類名目、悉照中國類書之例、句斟字酌、縷析條分、便於查覽。
- 一、是書專為初學者而作、只從省便、并未多錄言語。然苟以是書、熟讀則酬應之地、貿易之場、與日人交談、亦未始不敷所用也。

筆者訳：

- 一、最初の頁に挙げた日本の“字母”（仮名）は、傍らに中国語音で注し、学ぶ者が読んだら一目瞭然になるようにした。
- 一、日本語の“拼法”（仮名の組合わせ方）は西洋語と同じである。本書に載っている“拼法”は、傍らに発音を中国語で注し、いずれも正しく表わしている。学ぶ者は懸命に研究すれば、その仮名の正しい発音を会得できる。
- 一、本書に載っている日本語はすべて日本の字体であり、杜撰なものは一切ない。中国語訳文には土着語が混じっていない。
- 一、注の漢字音は江蘇、浙江の発音を用い、通用しやすくした。日本語の音に似ている中国語の漢字がない場合が非常に多いので、本書では反切で表音する。傍らに傍線があるものは、すべて反切の方法で読まなければならない、区別することを記す。
- 一、本書の分類・名目は、すべて中国の類書の例を参照して、字句を斟酌して、閲覧しやすくした。
- 一、本書は専ら初学者のために作られたが、ただ調べるに便利だが、決して多くの言葉を収録していない。しかし、本書を熟読すれば、日常会話や貿易の場で日本人と会話しても、役に立たないことはない。

『東語入門』は日清戦争以前における中国人の日本語研究の掉尾を飾るもの（福島 1993：31）と言われ、清末に中国人が編纂した『東語簡要』（1884）は「最初の日本語を教える意識を持つ書籍」であり（陳 2014：49）、『東語入門』は『東語簡要』に継ぐもう一つの中国人による日本語研究の専門書である（劉 2007：31-32）。しかも、1900年まで中国人によって編纂された日本語教科書はこの『東語入門』のみである（陳 2014：50）ことは今までの研究で分かった。同時期の他の日本語教科書と比較すると、『東語入門』は次の長所がある。まず、明確な編纂目的を持っている。次に、収録語彙やフレーズが数多くあり、発音が東京音で、現代標準語に近い。第三に、本文の前に日本語の発音を詳しくを説明し、片仮名、平仮名、漢字

の3種類の表記を載せ、読者に対照して練習しやすい。第四に、語ごとに片仮名、音訳漢字を付け、中国語にない発音に「反切」で音を表わすことは読者の日本語学習に便利である（李2003：40）。日本語人材が極めて不足していた清末の中国では、本書の発音の仕方に従って、単語と会話を覚えればすぐに役に立つ、実用的な教科書を意図したものであろう。

一方、『東語入門』の利用に関して、竹中（1998）「日本軍政統治時期対中国人的“教育”」では、日本人が安東（中国遼寧省丹東市）で開いた「日新学堂」で、日本語教科書として陳天麒輯訳『東語入門』（1895）、長谷川雄太郎著『日語入門』（1900）、泰東同文局編『東語初階』（1902）、新智社編『（実用）東語完璧』（1903）が使用されたことを指摘した。そして、続（2016）「中国の日本語教科書研究——清末の日本語教科書に於ける音声教育」は中国人が編纂した最初の日本語教科書の一つとして、『東語入門』が漢字で日本語の発音を示し、中国伝統的音韻学の表音形式「反切」を利用でき、日本語音声教育における役割を評価している。次節では、『東語入門』が教学関係以外の分野でどのように利用されたのかについて考察する。

6.1.2 『東語入門』の利用

『実学報』に訳された日本の新聞記事に現れる片仮名語（延べ語数 346 語、異なり語数 226 語）があり、中国語に翻訳する際、音訳、意識、不訳などの方法が取られた。そのうち、音訳語（延べ語数 233 語、異なり語数 151 語）を本節の研究対象とする。音訳語における片仮名と漢字の対応関係は前節でまとめた（付録4も参照）。

次の例のように、同じ片仮名に対して複数の漢字を対応させることがある。実際の例を併せてみると、一部の片仮名と漢字の対応は比較的安定している。

ア：矮一（26語・15語）	「ウアツツ：烏矮之之」
阿一（4語・4語）	「フアウル：傳阿和魯」
啞一（1語・1語）	「ミケロ・アンゼリン・ゴリ：啞希苦洛」
コ：誇一（12語・6語）	「コロラド：誇洛辣獨」
克一（1語・1語）	「ニコラス：尼克來」
閣一（1語・1語）	「タコヴマ：塔閣戸匣」

「ア」「コ」に対して、それぞれ“矮、阿、啞”“誇、克、閣”を当てることがあるが、そのうち、「ア」と“矮”、「コ」と“誇”の例が多く、対応関係が安定している。その用例数が少ない対応関係は多くの場合、翻訳に携わる当初の訳語である。例えば、王宗海と王仁俊が「口訳筆述」の形で「フアウル」を“傳阿和魯”に、「ニウフアンドラド」を“吳夫阿痕獨拉獨”に音訳しているのは翻訳の初期段階でのことであった。後に王宗海が孫福保と組んで、「ミケロ・アンゼリン・ゴリ」と“啞希苦洛”に音訳した。

- 第2冊「フアウル：傳阿和魯」 王宗海/王仁俊 「巴黎爆裂彈」
- 第3冊「ニウフアンドラド：吳夫阿痕獨拉獨」 王宗海/王仁俊 「新無條約國」
- 第13冊「アラバマ：阿辣拔麥」 程起鵬 「美国誇洛辣獨之開拓」
- 第13冊「ルイジアナ：路以其阿那」 程起鵬 「美国誇洛辣獨之開拓」
- 第5冊「ミケロ・アンゼリン・ゴリ：啞希苦洛」 王宗海/孫福保 「西班牙首相遭難顛末」
- 第8冊「ニコラス：尼克來」 孫福保 「德国與俄国交際」
- 第11冊 " 孫福保 「俄德關係」
- 第3冊「タコヴマ：塔閣戶匣」 王宗海/王仁俊 「奧陸大臣事跡」

次に、『実学報』の片仮名と漢字の対応を『東語入門』の発音説明部分、本文部分と対照して、その利用状況を考察する。

(1) 「いろは歌」

『東語入門』の発音紹介「字母」の部分では最初に「いろは歌」(図6-1)が紹介され、平仮名、片仮名、漢字の3種類の表記が挙げられている。漢字は学習のために附けたもので、仮名の発音を示し、字体も発音も当時の中国語に従う。片仮名と漢字を抜き出すと、下記の通りである。なお、日本語のいろは順の配列にしたがって、「エ」と「エ」を入れ替えた。

右日本字母四十八字其草書曰平假名皆成一字故反為大寫其正書曰偏假名如中國偏傍等類未成一字故反為小寫學者於字母先宜考求聲音辨正依次請熟然後學習 拼法則次序不紊入門亦易矣	み	三	ミ	コ	コ	伊	井	れ	レ	リ	リ	い	イ	
	シ	布	工	工	工	の	ノ	ろ	ッ	ぬ	ヌ	ろ	ロ	
	原	工	工	工	工	松	オ	つ	ツ	る	ル	ハ	ハ	
	ひ	ヒ	あ	ア	ア	く	ク	ね	子	を	ヲ	ハ	ハ	
	本	モ	木	木	木	也	ヤ	那	那	わ	ワ	ホ	ホ	
	世	セ	息	息	息	ま	マ	ら	ラ	か	カ	へ	へ	
	す	ス	司	司	司	け	ケ	山	山	よ	ヨ	と	と	
	九	シ	痕	痕	痕	ふ	フ	ら	ラ	た	タ	ち	ち	

表6-1 『東語入門』掲載「いろは歌」

イ	ロ	ハ	ニ	ホ	へ	ト	チ
以	洛	哈	泥	化	海	託	氣
リ	ヌ	ル	ヲ	ワ	カ	ヨ	タ
利	奴	路	啞	滑	卡	搖	他

レ	ソ	ツ	ネ	ナ	ラ	ム	ウ
立	沙	之	内	那	辣	磨	烏
弁	ノ	オ	ク	ヤ	マ	ケ	フ
伊	諾	唾	苦	耶	麦	開	夫
コ	エ	テ	ア	サ	キ	ユ	メ
誇	賢	鉄	矮	殺	<u>克以</u>	油	美
ミ	シ	エ	ヒ	モ	セ	ス	ン
米	希	賢	希	木	息	司	痕

ここで挙げた仮名と漢字の対応と対照すれば、「へ：海」「ヲ：啞」「メ：美」以外の仮名と漢字の対応は全部『実学報』で用例を見付けることができる。しかも、前掲「ア」と“矮”、「コ」と“誇”のように『東語入門』『いろは歌』の漢字が優先に使用されているようである。仮名と漢字の対応のみではなく、「反切」の方法と「江浙口音」の発音も同様に翻訳者に受け入れられた。なぜなら、翻訳者のうち、王宗海が福建省、王仁俊（呉県）、孫福保（呉県）、程起鵬（長洲）の3人が江蘇省の出身であり、日常的にその地域の方言で発音していたと考えられ、また日本語の仮名の発音に近いからである。故に『実学報』の音訳語を作成するに当たり、『東語入門』『いろは歌』を全面的に導入したと言えよう。

(2) 「清音」

ア (矮)	イ (以)	ウ (烏)	エ (賢)	オ (唾)
カ (卡)	キ (<u>克以</u>)	ク (苦)	ケ (開)	コ (誇)
サ (殺)	シ (希)	ス (司)	セ (息)	ソ (沙)
タ (他)	チ (氣)	ツ (之)	テ (鉄)	ト (託)
ナ (那)	ニ (泥)	ヌ (奴)	ネ (内)	ノ (諾)
ハ (哈)	ヒ (<u>黒以</u>)	フ (夫)	ヘ (海)	ホ (化)
マ (麦)	ミ (米)	ム (磨)	メ (美)	モ (木)
ヤ (耶)	イ (以)	ユ (油)	エ (賢)	ヨ (揺)
ラ (辣)	リ (利)	ル (路)	レ (立)	ロ (洛)
ワ (滑)	弁 (伊)	ウ (烏)	エ (賢)	ヲ (啞)

『東語入門』は「いろは歌」の後に「清音」(50字)を紹介した。五十音順で並べ、発音「ン」を挙げていない。「清音」と「いろは歌」はほぼ同じ漢字を並べているが、「ヒ」だけ「ヒ：黒以」という「反切」形式を採用した。『実学報』は音訳語3語に「ヒ：黒以」を取らず、全ての「ヒ」に「希」を当てた。

『実学報』が「清音」の「ヒ：黒以」と異なる音訳語：

「カヒ一：卡希」

「フリドリヒ：夫利獨希」

「エルフヒンストン：愛路府希愛司托愛」

(3) 「濁音」

ガ (額) ギ (穉以) グ (餓) ゲ (呆) ゴ (岳)

ダ (達) チ (其) ツ (治) デ (笛) ド (獨)

ザ (若) ジ (其) ズ (是) ゼ (席) ゾ (孰)

バ (拔) ビ (皮) ブ (捕) ベ (培) ボ (薄)

『東語入門』「濁音」では4行、20字を挙げていて、「四ツ仮名」の「ヂ」と「ジ」に同じ漢字を当てるが、「ツ」と「ズ」を分けてそれぞれ漢字を当てている。ザ行をダ行の後ろに並べていることは通常の五十音順の配列と異なる。『実学報』では『東語入門』の「濁音」に従って音訳する例が少なくない。ただし、「ゲ：呆」「ズ：是」を採用せず、「ゲ：穉、開」「ズ：司」を当てた例も一部ある。しかも、清音の「ケ：開」「ス：司」の対応と同じで、恐らくその翻訳者が清音と濁音を区別せずに翻訳したと考えられる。

『実学報』が「濁音」と同じ対応の音訳語：

「リガ：利額」

「スギ：司穉以」

「ヤング：耶痕餓」

「アヲサンゴ：矮辣煞痕岳」

「ザンジバル：若痕其拔路」

「ローゼン：洛席痕」

「ウキダル：烏伊達路」

「タウアヅキ：他烏矮治克」

「ベンガル：培痕額路」

「ボンベイ：薄痕培以」

『実学報』が「濁音」と異なる対応の音訳語：

「ゲーリツク：穉力致果閣」

「シカゴ：雪茄閣」

「ゲリロ：開立洛」

「ラチーズ：癩氣司」

(4) 「次清音」

パ (派) ピ (披) プ (普) ペ (配) ポ (撲)

「半濁音」は『東語入門』で「次清音」と称する。『実学報』では『東語入門』の「次清音」に従って音訳する例もあれば、「ピ：披」を採用せず、「ピ：皮、普」を当てた例もある。

なお、『実学報』音訳語には「ポ：撲」ではなく、「ポール：樸路」のように、「樸」を当てている。手書きの字体では「樸」と「撲」が区別しにくく、古くから通用するためであろう。

また、「キューバ：氣油派」のように、濁音に半濁音の音訳字を当てた例や、「エムプレス・オブ・チャイナ：也莫籀來斯惡士氣耶已奈」のように、半濁音に濁音の音訳字を当てた例もある。「プレストン：夫來思獨」のように、清音と濁音を逆にしている例もある。その理由に、日本語原文では字が小さく、濁音と半濁音が見分けられないことが考えられる。

『実学報』が「次清音」と同じ対応の音訳語：

「スペール：司配路」 「パラナ：派辣那」
「プレストン：普立司托痕」

『実学報』が「次清音」と異なる対応の音訳語：

「エムプレス・オブ・チャイナ：也莫籀來斯惡士氣耶已奈」
「キューバ：氣油派」 「ハマピシ：哈麥皮希」
「フィリップ：夫利普沙」 「プレストン：夫來思獨」
「ポール：樸路」 「ポトージ：樸托其」

(5) 「拼法」

イハ (以滑)	イヘ (以賢)	イフ (以烏)	イヒ (以以)	ロウ (羅)
ハヘ (哈賢)	ハウ (化)	ハフ (化)	パフ (普)	バウ (部)
バフ (部)	ニホ (<u>泥唾</u>)	チヨ (曲)	チャ (<u>氣耶</u>)	…… [146組]

仮名を組み合わせて発音する「長音」「拗音」などは『東語入門』で「拼法」と称する。この部分では 146 組の仮名と漢字の対応が挙げられている。発音の仕方を非常に詳しく書いて、著者も「此係東字拼法夫。東語之所以千變萬化、而層出不窮者、均不外此四十八字拼合而成。學者於是書、誦習既久、自不難造於高明之域焉」⁵⁵と自負する。つまり、この部分では日本語における 48 字のすべての組合せを網羅していて、ここに挙げているものを身に付けたら日本語学習の上達が順調になるだろう。

この部分では先に挙げた 4 項の漢字のほか、「ア：阿」（例えば、「アウ：阿烏」）など新しく出てきた漢字が数文字ある。しかも、仮名と漢字の対応が「1 対 1」に限らず、「2 対 1」（例えば、「ロウ：羅」「チヨ：曲」「ジウ：求」）や、「3 対 1」（例えば、「チヨウ：曲」「リヨウ：

⁵⁵ 筆者訳：こちらは日本語の仮名の組合せ方である。日本語が無限に変化しているのはこの 48 字の組合せてできたもののほかはない。学習者は本書を持って、長く熟読したら、日本語学習が順調に進めるわけである。

料)の対応も出てきた。『実学報』の音訳語にはこの部分に出た漢字と同じ例がいくつもあ
る。例えば、「アラバマ：阿辣拔麥、ルイジアナ：路以其阿那」「トロント：托羅痕托」と
「ア：阿」「ロ：羅」がある。

(6) 本文部分の利用

まず、共通語彙の音訳について、『東語入門』に収録された 1922 語のうち「フヨウ」1 語の
みが『実学報』原文に現れた。『実学報』では『東語入門』「いろは歌」に提示する仮名と漢字
の対応を施すのに対し、『東語入門』では「拼法」に従って「夫欲」と音訳した。

『実学報』 「フヨウ：夫揺烏」

『東語入門』 「フヨウ：夫欲」

そして、独自の漢字使用について、下記のように、著者が『東語入門』を編纂する際、発音
説明を一貫して使用したわけではない。撥音「ン」に漢字“痕”のほかにも、“音”を当てるこ
ともある（「ケンチウ：克音氣烏」）が、多くの場合前の仮名と組合わせて鼻音 [n] [ŋ] を帯びる
漢字を当てている（「ニンジン：寧近」）。また、「ツ：特是」「ポ：潑啞」「パ：潑阿」のような
「反切」形式も使用された。

『東語入門』発音説明と異なる片仮名と漢字の対応：

「ケンチウ：克音氣烏」

「スイギン：息鬚音」

「ニンジン：寧近」

「メンジュ：楡樹」

「リンゴ：林岳」

「ハツカシイ：哈特是卡希」

「ポルトガルコク：潑啞路託額路誇苦」

「ヨウロツパ：欲洛潑阿」

一方、『実学報』は『東語入門』の発音部分、本文に挙げられていない仮名と漢字の対応を
使用している。下記の音訳語がその例である。

『東語入門』にない片仮名と漢字の対応：

「アラサゴ：矮辣煞痕岳」

「ウエルフネウヂンスク：烏賢路夫内烏其痕斯苦」

「カワイ：卡懷衣」

「カノヴァス：卡諾烏矮司」

「エムブレス・オブ・チャイナ：也謨簿來斯惡土氣耶已奈」

「オーリー・ゼームソン・シンディケート：化利 席磨沙痕 希痕笛以利苦」

「プレストン：夫來思獨啞」

6.2 『実学報』における『策鰲雜摭』の利用

『東語入門』にない片仮名と漢字の対応は、別の書物を参照した可能性がある。そこで、清末中国人の日本に関する書物を調べた結果、葉慶頤の『策鰲雜摭』（1889）が見つかった。『策鰲雜摭』巻8「事物異名」の最後に「音注日本字母正草二体」が挙げられ、“字母”“字音”という名で、それぞれ「いろは歌」と「五十音図」を紹介している。（図6-2、6-3）

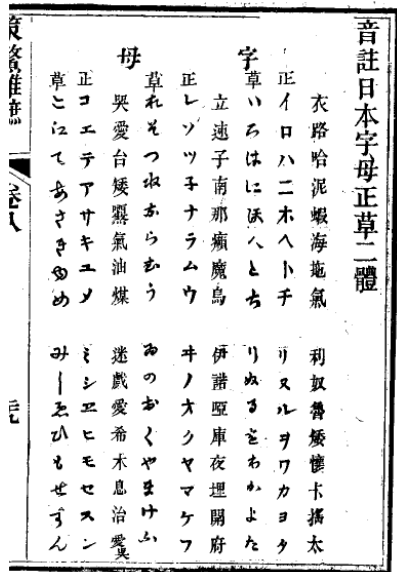


図6-2 「音注日本字母正草二体」その1

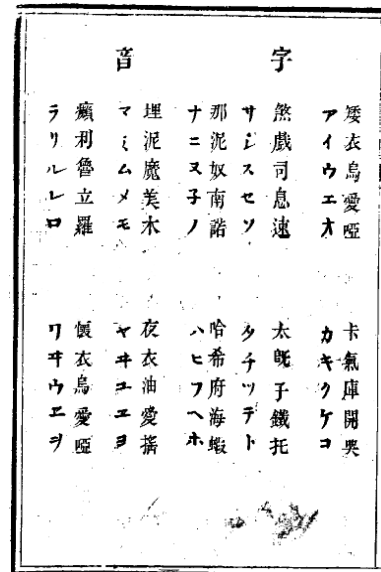


図6-3 「音注日本字母正草二体」その2

「字母」							
イ	ロ	ハ	ニ	ホ	ヘ	ト	チ
衣	路	哈	泥	蝦	海	拖	氣
リ	ヌ	ル	ヲ	ワ	カ	ヨ	タ
利	奴	魯	矮	懷	卡	搖	太
レ	ソ	ツ	ネ	ナ	ラ	ム	ウ
立	速	子	南	那	ラ	魔	烏
キ	ノ	オ	ク	ヤ	マ	ケ	フ
伊	諾	啞	庫	夜	埋	開	府
コ	エ	テ	ア	サ	キ	ユ	メ
哭	愛	台	矮	煞	氣	油	煤
ミ	シ	エ	ヒ	モ	セ	ス	ン
迷	戲	愛	希	木	息	治	愛吳

「字音」										
ア	イ	ウ	エ	オ	カ	キ	ク	ケ	コ	
矮	衣	烏	愛	啞	卡	氣	庫	開	哭	
サ	シ	ス	セ	ソ	タ	チ	ツ	テ	ト	
煞	戲	司	息	速	太	既	子	鉄	托	
ナ	ニ	ヌ	ネ	ノ	ハ	ヒ	フ	ヘ	ホ	
那	泥	奴	南	諾	哈	希	府	海	蝦	
マ	ミ	ム	メ	モ	ヤ	キ	ユ	エ	ヨ	
埋	泥	魔	美	木	夜	衣	油	愛	搖	
ラ	リ	ル	レ	ロ	ワ	キ	ウ	エ	ヲ	
癩	利	魯	立	羅	懷	衣	烏	愛	啞	

前節で掲げた『東語入門』と『策鰲雜摭』を対照した結果、『策鰲雜摭』の「音注日本字母正草二体」に挙げられた片仮名と漢字の対応に『東語入門』と同じものが 25 組ある。両者の一致率は、五十音図の半分の割合である。つまり、『東語入門』を編纂した際、『策鰲雜摭』を参照した可能性もあれば、著者二人が日本に滞在していた時期が近く、直接的な交流があって、音訳字を互いに影響し合った可能性もある。

そして、『実学報』音訳語における片仮名と漢字の対応を『策鰲雜摭』と対照した結果、下記の音訳語 16 語に、『東語入門』に挙げられていない 10 組の対応（「イ：衣」「キ：氣」など）が見られたので、『策鰲雜摭』を採用したと見てよかろう。（括弧の中は所在冊・翻訳者）

- イ：衣 — 「ダイナマイト：太衣那麥衣托」「カワイ：卡懷衣」（10・程）
- キ：氣 — 「キューバ：氣油派」（13・程）「ポチロフスキイ：普氣洛夫司氣衣」（10・程）
- サ：煞 — 「アフサンゴ：矮辣煞痕岳」（10・孫）
- タ：太 — 「タウンスピル：太烏痕司希路」「ルーター：路太」（9・程）
- フ：府 — 「エルフヒンストン：愛路府希愛司托愛」（9・程）
- ラ：癩 — 「ラチーズ：癩氣司」（9・程）
- ル：魯 — 「ハミルトン：哈米魯通痕」「フアウル：傳阿和魯」（2・王/王）
 - 「ミルウーキー：米魯和既」「ミルウオーター：米魯和夏塔」（2・王/王）
 - 「モルヴェン：莫魯戸由痕」（2・王/王）「エナルジャー：那魯其耶」（4・王/孫）
 - 「グラン・オフ・インニー・ド・ラ・レジオンドノール：古拉痕夏富以主現獨拉蘭其夏痕道諾魯」（2・王/王）
- ワ：懷 — 「カワイ：卡懷衣」（10・程）
- エ：愛 — 「エルフヒンストン：愛路府希愛司托愛」（9・程）
- ン：愛 — 「エルフヒンストン：愛路府希愛司托愛」（9・程）

上記 16 語の音訳語を所在冊から見ると、第 2 冊（6 語）、第 9 冊（4 語）、第 10 冊（4 語）と前期と後期に集中している。翻訳者から見ると、王宗海/王仁俊（6 語）、程起鵬（8 語）が多く使用している。中期の翻訳者孫福保は『策鰲雜摭』をあまり参照しなかったと言えよう。

所在冊による語数：

- 第 2 冊（6 語）
- 第 4 冊（1 語）
- 第 9 冊（4 語）
- 第 10 冊（4 語）
- 第 13 冊（1 語）

翻訳者による語数：

- 王宗海/王仁俊（6 語）
- 王宗海/孫福保（1 語）
- 孫福保（1 語）
- 程起鵬（8 語）

ア	イ	ウ	エ	オ	カ	キ	ク	ケ	コ	
阿	伊	烏	葉	窩	開	嘎	基	姑	客以	鍋
サ	シ	ス	セ	ソ	タ	チ	ツ	テ	ト	
撒	細	司	舍	索	塔	基	訾	疊	多	
ナ	ニ	ヌ	ネ	ノ	ハ	ヒ	フ	ヘ	ホ	
拿	你	路	内耶	儒	哈	西	夫	黑	火	
マ	ミ	ム	メ	モ	ヤ	幷	ユ	エ	ヨ	
麻	米	母	墨	磨	牙	同前	由		約	
ラ	リ	ル	レ	ロ	ワ	幷	ウ	エ	ヲ	
人而	利	路	内	諾	漣	烏以	同前	維	我	

このうち、前掲二書と異なる片仮名と漢字の対応が多く存するが、二書と重複する対応以外に、『実学報』の音訳語と同じものは見つからなかった。つまり、傅雲龍の『遊歴日本図経』にまとめられた「伊呂波歌」「五十音図」は参照されなかったと言えよう。

次に、黄遵憲が著した『日本国志』（1895）は 40 巻あり、巻 33「學術志二」の「文字」の節で日本語に関する詳しい紹介があった。そのうち、日本語の仮名の発音を音訳字にしたものが 10 字のみ挙げられている。「阿、衣、烏」以外、『実学報』と同じものが見つからず、参照されなかった可能性がある。

四十七字之外有五十母字，譜其音不出支微歌麻四韻。其發端之五音為阿、衣、烏、噎、
唄，次為加、基、苦、結、啞，其他準此。

筆者訳：47 字のほかに 50 の母字もある。その発音は支、微、歌、麻の 4 韻のほかない。その発端の 5 つの発音は阿、衣、烏、噎、唄で、次に加、基、苦、結、啞があり、他はこれに準ずる。

そして、前掲『実学報』に参照された『東語入門』と『策鰲雜摭』の独創性について、時代を遡って調べてみた。木村・李（1973）の研究によると、『東語入門』が清代中期の『吾妻鏡補』と 70%程度の共通語彙を持ち、『吾妻鏡補』に典拠を得たとしたが、仮名と漢字の対応という観点から見ると、『東語入門』のほうが完成度が高い。『吾妻鏡補』に挙げられた「いろは歌」（図 6-5）を見ると、下記のとおり不完全なものである。

例えば、「エ」の場所を「メ」の前にあり、「ソ」「マ」が離れて 2 箇所に出現し、異なる漢字と対応している。また、中国語“永”“女”の発音が「リ」「メ」と合わず、「ヒ」に音訳漢字が当てられなかった。

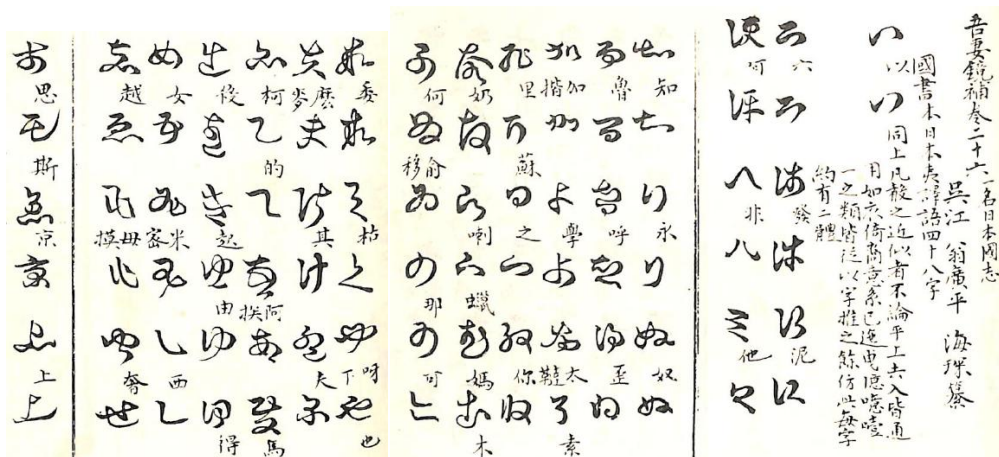


図 6-5 『吾妻鏡補』掲載「いろは歌」

イ	口	ハ	ニ	ホ	ヘ	ト	チ	
以	六	発	泥	呵	非	他	知	
リ	又	ル	ヲ	ワ	カ	ヨ	夕	ソ
永	奴	魯	呼	歪	加措	與	太韃	素
レ	ソ	ツ	ネ	ナ	ラ	ム	ウ	
里	蘇	之	你	奶	喇蠟	媽木	何	
井	ノ	ヒ	才	ク	ヤ	マ	ケ	フ
俞移	那可		委	枯	呀下也	麼麦	其	夫
コ	テ	ア	マ	サ	キ	ユ	エ	メ
柯	的	阿挨	馬	殺	起	由	得	女
ミ	シ	エ	モ	セ	ス	ン	ン	
米密	西	越	母摸	奢	思斯	京	上	

『吾妻鏡補』と『東語入門』の「いろは歌」には音訳漢字 8 字が重なっている（「イ：以」「ニ：泥」「ヌ：奴」「ツ：之」「マ：麦」「フ：夫」「サ：殺」「ミ：米」）。このほか、『実学報』音訳語に『吾妻鏡補』と一致する漢字が見つからなかった。

また、明清時代の『日本館訳語』『東語簡要』『遊歴日本図経』『鶴林玉露』『琉球館訳語』『使琉球録』『音韻字海』『中山伝信録』『琉球入学見聞録』と対照した結果、『実学報』の音訳語に参考とした書物を見出すことができなかった。よって、『実学報』の音訳語は『東語入門』と『策驚雜撫』に依拠して作られたと結論してよいと思われる。

6.4 まとめ

本章は『実学報』の音訳語を研究対象とし、片仮名と漢字の対応関係から『実学報』に利用された書物を検討した。教科書『東語入門』が初めて中国人によって編纂された日本語研究の専門書として、教育関係以外の分野での使用は今まで論じられていなかった。本章の考察を通して、近代新聞の翻訳に清末中国人が編纂した教科書、及び文化人の著書が音訳語の作成に利用されたことが分かった。具体的には下記のとおりである。

まず、『実学報』の翻訳に陳天麒の『東語入門』が広く利用された。『東語入門』「いろは歌」の仮名と漢字の対応を全面的に導入した。「濁音」「次清音」（半濁音）の漢字をも多く使用したが、翻訳者にとって濁音、半濁音及び清音の区別が曖昧だった。

次に、『実学報』の翻訳に葉慶頤の『策鰲雜摭』が利用された。前期と後期において、翻訳者王宗海、王仁俊、程起鵬の三人は『策鰲雜摭』を利用したが、中期の翻訳者孫福保はあまり参照しなかった。

『実学報』の翻訳において、参照した二書の引用頻度は、『東語入門』のほうが多いと言える。二書以外の典拠となる書物を利用した可能性は低い。

第7章 音訳語から見る『実学報』と『時務報』の関係

日清戦争後、中国では維新変法を紹介する新聞が多数発行された。1895年から1898年までに、中国で創刊した新聞社は27社に達した⁵⁶。それらの新聞には、日本の新聞記事の中国語訳を掲載したものがあり、中でも比較的正確に出典記録を残しているのは『時務報』と『実学報』である。本格的に日本の新聞記事を訳出し、中国社会に提供したのは『時務報』の「東文報訳」が最初とされている。当時の中国では、本格的な日本語教育がまだ始まっておらず、日本人漢学者の古城貞吉が『時務報』の翻訳を勤めた。一方、その翌年に刊行された『実学報』は当初二人による「口訳筆述」の形を取っていたが、次第に一人の手によって翻訳されるようになった⁵⁷。

両紙に翻訳された日本の新聞記事は、漢字表記のある外来語より片仮名表記のみのものが多かったので、片仮名で表記された外来語の翻訳に関して考察することは、当時の翻訳状況の一端を明らかにすることになると思われる。そこで、本章では片仮名单一表記語の翻訳を中心に、両紙における翻訳状況を比較し、それぞれの特徴を明らかにしたい。そして、『時務報』がそれまでの新聞と異なる体裁を取っていたが、後の新聞のモデルになったため、外来語の翻訳においても『実学報』が『時務報』の影響を受けたか検討したい。

手順として、まず、両紙のソース記事に現れた外来語の種類とその翻訳状況を示す。次に、単語単位で両紙共通の外来語の音訳語を比較する。そして、両紙の音訳語における片仮名と漢字の対応関係とを比較し、翻訳者の母語干渉による用字傾向、音訳語漢字の発音が日本語・中国語の発音との関係から両紙の関係を考察する。

両紙に関して、中日同形語の観点から漢語を中心にする研究が行われている。『時務報』に関して、翻訳者古城貞吉の就任経緯を明らかにした沈（2009）、借用語の判定をする朱（2012a、2012b）などがある。『実学報』に関して、ソース記事の掲載紙を『時事新報』『東京日日新聞』『神戸又新日報』など9種類の日本の新聞・雑誌に確定した陳（2017a）、812語の日本漢字語の使用を確認した秦（2010b）などがある。

しかし、外来語の翻訳に関する研究は極めて少ない。王（1992a）は「アフリカ」、王（1992b）は「オーストラリア」を中心に、通時的に外国地名の漢字表記を検討した論考である。原則として、外国地名の当て字表記はなるべく原音に近い漢字を使うが、同音異字の場合

⁵⁶ 上海図書館編『中国近代期刊編目彙録』（1965-84）による。

⁵⁷ 翻訳者の担当範囲は「東報輯訳」欄：「第2-3冊王宗海口訳王仁俊筆述」「第4-5冊王宗海口訳孫福保筆述」「第6冊-第11冊孫福保訳」、「東報訳補」欄：「第9冊-第14冊程起鵬訳」。

は、「筆画数の多少」「漢字の持つ意味」という副次的な要因も関係すると指摘している。

7.1 研究資料と研究対象

『時務報』は、維新運動時期において最も販売され、影響が大きかった新聞である。1896年8月9日に上海で刊行され、1898年7月26日に光緒帝の『『時務報』を官報にする』という勅諭が下されて終刊されるまで計69冊が発行された。本社は「上海福州路福建路口」にあり、初期の「総理」（社長）は汪康年で、「主筆」（編集長）は梁啓超である。体裁は毎冊約20頁、石版印刷、連史紙、「論説」「諭折」「京外近事」「域外報訳」などの欄（コラム）を設けた。「域外報訳」欄は全冊の2分の1を占め、主に「英文報訳」「東文報訳」「路透電音」の名で各外国語の中国語訳を掲載した。本格的に日本の新聞記事を訳出し、中国社会に提供したのは『時務報』の「東文報訳」が最初である。日本人の漢学者の古城貞吉がその翻訳を勤め、594本に及ぶ日本の新聞記事を中国語に訳した。

『実学報』はその翌年に創刊され、維新運動時期において最も保守的な人の耳を動かすことができ、さらに革新的な人の心も奪うことができた（「最足以動守旧者之聴、且足以奪維新者之心」）新聞である（湯 1993 : 439）。本社は『時務報』と同じ都市で、「上海英大馬路泥城橋鴻文局間壁」にある。『実学報』の印刷、装丁、用紙、体裁などは全部『時務報』を模倣している。「域外報訳」の部分に「英報輯訳」「東報輯訳」「法報輯訳」などの欄を設けた。読者の希望に応じて、第9冊から「東報訳補」欄を増やし、中国人翻訳者4名による日本の新聞記事の中国語訳を掲載している。

両紙の関係を検討するには、下記の調査範囲を選定しなければならない。『時務報』全記事のうち最も多く翻訳された『東京日日新聞』掲載記事122本と訳文122本を選び、『実学報』は全ソース記事138本と訳文139本を調査範囲に入れる。

『時務報』：ソース記事—『東京日日新聞』掲載記事122本（全144本、うち22本未詳）

中国語訳文—122本

『実学報』：ソース記事—138本

中国語訳文—139本（うち同じソース記事の訳文が2本ある）

研究対象は両紙に翻訳された外来語である。明治30年頃の外来語の分類は、石井（2013）の分類方法に従う。氏は表記形式によって「単記形式」「ルビ形式」「併記形式」に分け、さらに構成要素によって8種類に分けた。

記号	構成要素	例
単記形式：イ	本行片仮名	「タイムス」
ロ	本行漢字	「亜米利加」
ハ	本行アルファベット	「Lothair」
ルビ形式：ニ	本行漢字＋ルビ片仮名	「 ^{カナダ} 加奈陀」
ホ	本行漢字＋ルビ平仮名	「 ^{まっち} 隣寸」
へ	本行アルファベット＋ルビ片仮名	「 ^{ジャルシー} jalousie」
併記形式：ト	本行片仮名＋本行アルファベット	「ペーン Payne」
チ	本行漢字＋本行アルファベット	「 ^{げんざいでき} 現在の Present」

『時務報』に翻訳された『東京日日新聞』の掲載記事 122 本を調べると、「イ・ロ・ハ・ニ・ト」の 5 種類がある。また、『実学報』のソース記事全 138 本を調べると、「イ・ロ・ニ」の 3 種類がある。頻度の高い形式は「イ・ニ」類である。本章では「イ」類を「片仮名单一表記語」と称し、これを中心に考察していく。

両紙には音訳が主に施され、意識、音訳＋意識、意識＋音訳の方法も取られた。それぞれの語数（延べ数）は次のとおりである。例は、ソース記事の表記：『時務報』『実学報』の表記の順に示す。

	『時務報』	『実学報』	例
音訳	429	233	「アラバマ：阿辣拔麥」
意識	76	37	「ナポレオン：法人」
音訳＋意識	44	×	「ダイナマイト：得米多炸藥彈」
意識＋音訳	1	×	「ニュー、ゼーランド：新西蘭」

7.2 両紙における共通外来語の翻訳

7.2.1 両紙とも音訳した語

『時務報』と『実学報』において共通に出現した外来語が 17 語ある。片仮名表記に多少の差異があるものの、同じ語と認定する。17 語の共通外来語と両紙における音訳語は下記のとおりである。なお、スペースの関係で語例の「」を省く。

『時務報』	『実学報』
① アノトー：亞諾倫	アノトー：矮諾託

② イルクツクス：爾勞活是	イルクートスク：以路苦託斯苦/司路/司苦
③ オデツサ：阿得斯可伊/俄的都沙	オデツサ：啞笛之殺
④ カリホルニヤ：屹里佛兒你亞	カリフォルニア/ヤ：卡利夫啞路泥矮/耶
⑤ キュバ：古巴	キューバ：氣油派
⑥ コトリン：哥得林	コトリン：誇託利痕
⑦ ザバイカル：也米革兒	ザハイ/ザバイカル：殺哈以/若拔以卡路
⑧ シカゴ：芝嘉高/是家閣	シカゴ：雪茄閣
⑨ タイムス：泰晤士	タイムス：他以磨司
⑩ ニコライフスク：尼可賴夫士克	ニコラエ/エフスク：泥誇辣賢夫斯路/司路
⑪ ハミルトン：波美兒頓	ハミルトン：哈米魯通痕
⑫ プード：伯得/伯度	プ/フード：普獨/頗督
⑬ ブラゴウエスチエンスク：布拉郭威什 臣斯克	ブラゴウエスチエンスク：浦拉岳烏賢斯氣 痕斯克
⑭ フレデリック：布列的律克	フレデリキ：夫立笛利克以/夫立笛以克
⑮ ムラウイ/ピエフ/ヴォーフ：摩拉肥合夫	ムラヴィーヨフ：磨辣烏以揺夫
⑯ ロイド：路以德	ロイド：洛以獨
⑰ ロバノフ/ツフ：魯馬能務	ロバノフ：洛哈諾夫

両紙における共通外来語の音訳語は同じものがない。17組の音訳語を比較しながら、その特徴を見よう。

(一) 訳語全体に当てる字数を見ると、『時務報』が少なく、『実学報』が多い。

例⑥「コトリン」⑨「タイムス」のように、『時務報』で「哥得林」「泰晤士」と3文字の音訳語を当てるのに対して、『実学報』では片仮名に逐一漢字を当て、「誇託利痕」「他以磨司」と4文字の音訳語を当てている。

(二) 両紙とも清音と濁音の区別が曖昧である。

『時務報』では例⑥⑭のように、清音「コト」「フ」に無気音の漢字哥[kə]、得[tə]、布[pu]を当てている。『実学報』では例⑮⑰のように、濁音「ヴ」「バ」にゼロ声母の漢字烏[wu]、軟口蓋摩擦音の哈[xa]を当てている。

(三) 両紙とも長音「ー」を無視する傾向がある。

例①⑫⑮のように、『時務報』と『実学報』がともに長音「ー」に音訳字を当てない傾向がある。例⑤も『実学報』で長音に対応する音訳字がない。

(四) 両紙とも促音「ツ」に漢字を当てて音訳した。

例③「オデツサ」はオデッサ (Odessa) の古い表記であり、ウクライナの黒海に面する港湾都市の名前である。両紙では促音表記にそれぞれ漢字「都」「之」を当て、「ツ」の音と合わせている。

(五) 基本的に「1片仮名対1漢字」の対応であるが、両紙とも例外がある。

例⑤「キユバ：古巴」⑩「ニコライフスク：尼可頼夫士克」のように、『時務報』では片仮名と漢字を「2対1」の関係で対応しているのに対し、例⑭「フレデリキ：夫立笛利克以」のように、『実学報』では「1対2」の関係で対応する例もある。

(六) 両紙とも片仮名の音からかけ離れた漢字がある。

『実学報』では例①「アノトー：矮諾託」の「ア：矮」、例⑬「ブラゴウエスチエンスク：浦拉岳烏賢斯氣痕斯苦」の「ゴ：岳」「エ：賢」のように、漢字の中国語発音が片仮名からかけ離れている。一方、『時務報』では例③「オデツサ：阿得斯可伊」は「ツ：斯」か、「サ：斯」か、「可伊」は何か見当がつかない。

(七) 『時務報』には現代中国語に残る音訳語が2語あり、『実学報』にはない。

例⑤「キユバ」⑥「タイムス」は『時務報』で「古巴」「泰晤士」と音訳され、しかも現代中国語に残っている。一方、『実学報』の音訳語「氣油派」「他以磨司」は現代には残らない。

7.2.2 片方が音訳した語

『時務報』と『実学報』において一方が音訳した外来語が下記の4語ある。

『時務報』	『実学報』
⑱ アレキサンドル：亞力山大、亞歷山德	アレキサンダー：なし
⑲ ビスマーク：俾斯麥	ビスマルク：なし
⑳ ルーブル：留布兒、留	ルーブル：兩
㉑ ナポレオン：拿破崙	ナポレオン：法人

4組の音訳語は『時務報』で音訳され、しかも現代中国語に繋がっている。例⑱⑲⑳の音訳語「亞力山大、俾斯麥、拿破崙」は現代中国語と同じ表記である。なお、例㉑「ルーブル」の音訳語として、調査範囲では現代中国語と同じ音訳語「盧布」が見当たらないが、『大阪朝日新

聞』掲載記事の訳文に音訳語「盧布」がある⁵⁸。『宛字外来語辞典』（1979）で確認した結果、「厶歴山大、厶歴山徳、留、拿破崙」が収録され、外来語の漢字表記として日本語で使用されていた。外来語を翻訳した際、古城氏がこれらの宛字表記を音訳語にしたことが分かる。一方、『実学報』では「ルーブル」を中国の貨幣単位「両」、前後の文脈によって「ナポレオン」を「法人」と意識している。

7.3 両紙における片仮名と漢字の対応

両紙における片仮名と漢字の対応関係をまとめると、概ね付録 3、4 のとおりである。例を挙げながら両紙における片仮名と漢字の対応の特徴を見てみよう。

7.3.1 両紙における片仮名と漢字の字数対応関係

まず、両紙において片仮名 1 文字に対して複数の漢字を対応させることが確認できた。付録 3 の『時務報』では「ル：路、兒、爾、而、律、羅、樂、雷、力、了、留、郎」のように、最多 12 字の漢字と対応している。付録 4 の『実学報』では「サ：殺、煞、沙、薩」「ポ：薄、巴、樸、普」と最多 4 字の漢字で対応している。

一方、語単位において、片仮名と漢字の対応が「1 対 1」だけではなく、『時務報』では「2 対 1」乃至「3 対 1」の場合も多く見られる。例えば、

アイ：愛 — 「アイワゾウスキー：愛華茶斯奚」
ウイ：威 — 「デ、ウイツテ：的威都的」
ヴァ：華 — 「カネヴァロ：卡里華羅」
バイ：米 — 「ザバイカル：也米革爾」
ヒユ：守 — 「ヒユアンチャカ：守安茶加」
フオン：豊 — 「アルフオンソ：亞兒豊梭」

それに対して、『実学報』には片仮名に逐一漢字を当てる原則があり、つまり「1 対 1」が主な表音方法であるが、発音に近い漢字がない場合、「反切」のような方法を用いて「1 対 2」で音を表すものが 2 例ある。例えば：

「フレデリキ：夫利笛利克以」 「スギ：司拵以」

⁵⁸ 原文：「露国ノヴォスチ新聞は露国が近頃海軍拡張費として九千万^{ルーブル}留を議決せしに関して評論する所ありしが」（『大阪朝日新聞』1898年6月15日掲載「露国印度洋に意あり」）

訳文：「俄國頃欲増添水師。議定費用九千萬盧布。諾暴斯地報論云。」（『時務報』第 66 冊掲載「俄國蓄志於印度洋」）

7.3.2 両紙における片仮名の音に合わない漢字

『時務報』の原語の音に合わない漢字の例を多数挙げられる。ただし、それらの漢字を日本語で音読みすると通じる。呉音読みの「都、奈、具」、漢音読みの「加、齊（斉）、馬」、及び漢音と呉音が同じ「我、波、本」がその例である。日本人翻訳者の母語干渉と考えられる。例えば、

- カ：加 — 「カザン：加竄」
- ガ：我 — 「ナイガー：那爾我」
- グ：具 — 「グロスベナア：具魯士比那斯」
- サイ：齊 — 「サイプラス：齊布羅是」
- ツ：都 — 「オホーツク：俄喝都克」
- ナ：奈 — 「エレナ：埃列奈」
- ハ：波 — 「リトハ：里得波」
- ボン：本 — 「ボンツー：本都」
- ミ：未 — 「クリミヤ：苦里未亞」

『実学報』にも現代中国の標準語で発音するとやや不自然な漢字が多数見られた。翻訳者が福建省（王宗海）、江蘇省（王仁俊、孫福保、程起鵬）の出身で、方言による訛りのためであると考えられる。例えば、

- ア：矮 — 「アランカ：矮鐵痕卡」
- エ：賢 — 「ウエツクス：烏賢之苦司」
- オ：唾 — 「オリガ：啞利額」

7.3.3 両紙における片仮名と漢字の安定した対応

付録 3、4 の片仮名に当てられた複数の漢字の中に、両紙とも比較的安定した対応が多くある。「ア」を含む語を例に、『時務報』は「ア：亜」、『実学報』は「ア：矮」の対応関係が安定している。

『時務報』	語数（延べ・異なり）	例
ア：亜	— (30語・13語)	「アール：亞歩路」
ア：阿	— (2語・1語)	「アムール：阿穆爾」
ア：哀	— (1語・1語)	「アラスカ：哀拉斯格埃」

ア：奥 — (1語・1語) 「アルサス・ローレン：奥而賽斯鹿林」
 ア：和 — (1語・1語) 「サンステフアノ：倉唔士的福和奴」

『実学報』	語数	例
ア：矮	— (26語・15語)	「ウ <u>ア</u> ツツ：烏矮之之」
ア：阿	— (4語・4語)	「フ <u>ア</u> ウル：傳阿和魯」
ア：啞	— (1語・1語)	「ミケロ・ <u>ア</u> ンゼリン・ゴリ：啞希苦洛」

7.3.4 両紙における撥音、長音、促音の音訳

(1) 撥音「ン」の音訳

付録3『時務報』では「ン：吾、唔、五」の対応がまとめられたが、「吾」は4例、「唔」は3例、「五」は1例あるのみである。多くの場合、「ン」は前接仮名と組合せて発音するため、音訳する際にも多くの場合[n] [ŋ]の音を持つ漢字1文字で訳した。例えば、

オン：恩 — 「オンス：恩斯」
 タン：旦 — 「スタンダート：斯旦達得報」
 フオン：豊 — 「アルフオンソ：亞兒豊梭」
 ラン：蘭 — 「アランイエス：亞蘭耶斯」
 レン：連 — 「アレン：亞連」
 ロン：郎 — 「クロンダイク：克郎大哀克」

付録4『実学報』では「ン：痕、𠵼、愛」とも訳しているが、「𠵼」は2例、「愛」は1例のみあり、「痕」は82例ある。「ン」と「痕」の対応関係が圧倒的に多く、安定している。

『実学報』の音訳の方法について時間的に見れば、「ン：𠵼」の対応は、王宗海と孫福保の共同作業による翻訳初期の訳語である。程起鵬は「東報訳補」欄で最初は一度だけ「ン」に「愛」を当てたが、以後「ン」を訳す時「痕」に統一した。

「シチー・オフ・ペ <u>キン</u> 」	(第4冊 王宗海／孫福保)
「ブレスト <u>ン</u> 」	(第4冊 王宗海／孫福保)
「エルフヒ <u>ン</u> スト <u>ン</u> 」	(第9冊 程起鵬)
「ブレスト <u>ン</u> 」	(第11冊 程起鵬)

要するに、両紙において、『時務報』では「レン：連」のように「2対1」の方法を多用す

るのに対して、『実学報』では「ン：痕」を多用した。

一方、『時務報』の「ン：吾、唔、五」の対応と『実学報』の「ン：痕、叻、愛」の対応とは字形から無関係のようであるが、『漢語方言発音字典』で確認した結果、方言ではいずれも鼻音を帯びている。『実学報』のほうは翻訳者の母語干渉と考えられるが、『時務報』は古城氏の「ン：吾、唔、五」の使用において、彼の母語干渉というよりは中国人翻訳者と同じく上海あたりの方言（上海方言：吾[ŋu]、唔[ŋh]、五[ŋ])の影響を受けたと推測される。

(2) 長音「一」の音訳

付録 3、4 では長音「一」を挙げておらず、7.2.1 でまとめたように、共通外来語 17 語の翻訳において、両紙とも長音「一」を無視する傾向があるが、片仮名と漢字の対応を全般的に考察すると、『時務報』では長音「一」に漢字を当てる音訳語も数例見つかると、『実学報』では見つからなかった。イ段の長音に「以、爾」、ウ段の長音に「務」、エ段の長音に「埃」と発音の近い音訳字が当てられている。

「キ一ブル：奇爾勃爾」

「シ一ル：是爾兒」

「ビ一ク・ヒル：比以克」

「ク一：克務」

「ブ一チニ：伯務地尼」

「ディリー・メ一ル：的利米埃兒」

(3) 促音「ツ」の音訳

7.2.1 でまとめたように、共通外来語 17 語の翻訳において、両紙とも促音「ツ」に漢字を当てているが、『時務報』では「オデツサ：俄的都沙」のほか、多くの場合音訳字が当てられていない。一方、『実学報』は多くの場合「ツ：之」の対応に則って漢字を当てている。

『時務報』：

「オデツサ：阿的士」

「カルカツタ：加爾各搭」

「ブリヤツト：莫利耶德」

「ポールチツク：巴爾結克」

「マツキンレー：麥見尼」

「ラツトマル、ハウブト：拉得麥兒好布土」

『実学報』：

「ウエツクス：烏賢之苦司」

「オデツサ：啞笛之殺」

「カムサツカ：磨殺之卡」

「デツカン：笛之卡痕」

「ファイリツピン：夫以利之皮」

「マリポツト：麥利薄之託」

「ゲーリツク：穉力致果閣/主顧閣」

「ドーリツク：獨里此古攔」

7.4 両紙訳語と用字異同の原因

7.4.1 既存語と新語の利用

『時務報』の訳語はできるだけ既存の訳語を使用し、『実学報』は新語を積極的に使用する傾向がある。この点について秦（2008）、陳（2016、2017b）が詳しく論じている。『実学報』の翻訳者の中にも、注釈を付けるなどをして慎重に新語を取り扱う者もいたが、おおむね新語を積極的に使用する傾向がある。次の例のようである。

『時務報』訳語

「加奈陀/加奈多：加拿大」

「独逸：德國」

「会社：公司」

「大統領：總統」

『実学報』訳語

「加奈陀/加拿陀：加奈陀/加拿陀」

「独逸：德國/德意志國」

「会社：會社/公司」

「大統領：大統領」

7.4.2 両紙における母語干渉

『時務報』は、翻訳者が日本人であるため、日本語の影響で「ナ：奈」「サイ：齊」など日本の音読み規則に従っていた。一方、『実学報』は、前章で論じたように、教科書『東語入門』（1895）の発音説明、特に「いろは歌」の片仮名と漢字の対応と高い類似性を持ち、著者陳天麒の言う「反切」の注音形式も受け継いだと推測される。

イ	ロ	ハ	ニ	ホ	ヘ	ト	チ
以	洛	哈	泥	化	海	託	氣
リ	ヌ	ル	ヲ	ワ	カ	ヨ	タ
利	奴	路	唾	滑	カ	揺	他
レ	ソ	ツ	ネ	ナ	ラ	ム	ウ
立	沙	之	内	那	辣	磨	烏
キ	ノ	オ	ク	ヤ	マ	ケ	フ
伊	諾	唾	苦	耶	麦	開	夫
コ	エ	テ	ア	サ	キ	ユ	メ
誇	賢	鉄	矮	殺	<u>克以</u>	油	美
ミ	シ	エ	ヒ	モ	セ	ス	ン
米	希	賢	希	木	息	司	痕

また、『東語入門』の凡例「所注字音系就江浙口音、易於通用」（注の字音は江蘇・浙江辺りの発音を帯び、通用しやすいのである）から、音訳に選ばれた漢字が個人の訛りと言うより、その地域の通用性から考えた結果であろう。したがって、『実学報』の翻訳者たちにも、刊行地の上海周辺在住の読者たちにも通用したと考えられる。

7.4.3 「中西文合璧表」との関係

英語の固有名詞の訳語を統一するために、『時務報』は第14冊から第46冊まで「中西文合璧表」を設け、計1037語の英語とその中国語訳を載せた。古城氏の音訳語がそれらの訳語と同じものが8例ある。したがって、古城氏は「中西文合璧表」の英語訳語を参照したと考えられる。

『時務報』東報訳語

「クロンダイク：克郎大哀克」

「クリート：革雷得」

「ダンダス：膝臺斯」

「マッキンレー：麥荊來」

「マンロー：孟綠」

「莫斯科：木斯科」

「ムラヴィーヨフ：摩拉肥合夫」

「^{ユール}ウラ爾山：烏拉山」

「中西文合璧表」訳語

Klondyke 克郎大哀克

Crete 革雷得

Dundas 膝臺斯

Mackinley 麥荊來

Munro 孟綠

Moscow 木斯科

Mouravieff 摩拉肥合夫

Ural 烏拉山

一方、『実学報』も同じ構成である。「中西合璧表」という名で、「英報輯訳」欄の後ろに置かれる。第3、7、10、13冊に現れ、計227語の英語と中国語訳がまとめられている。ただし、日本語の音訳語は「中西合璧表」との関係が薄く、別々に工夫を凝らしたようである。

『実学報』東報訳語

「ウイリアム：烏以利矮」

「キューバ：氣油派」

「シカゴ：雪茄閣」

「セイロン：息以洛痕」

「中西合璧表」訳語

William 威廉

Cuba 古巴

Chicago 雪加哥

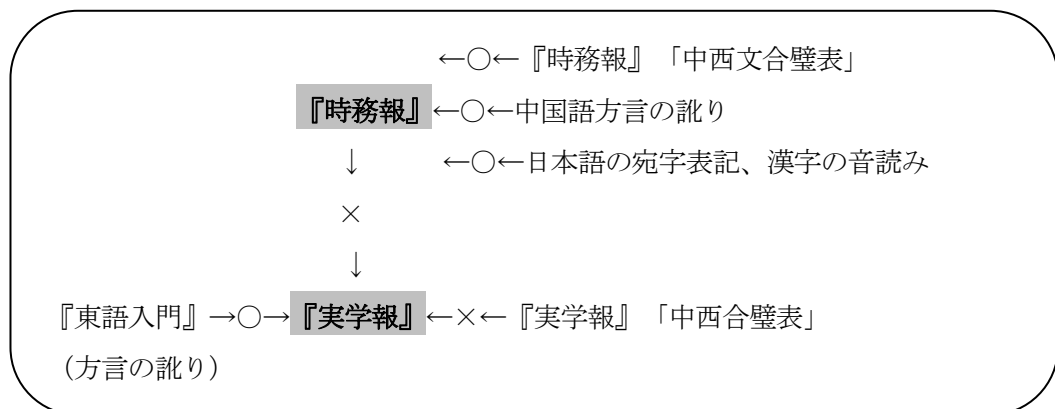
Ceylon 錫蘭

7.5 まとめ

『時務報』『実学報』における音訳語を中心に考察した結果を下記のとおりまとめられる。

- イ、『時務報』に比べて、『実学報』の音訳語は概ね字数が多い。『時務報』では「2 対 1」「3 対 1」の形式を多用した一方、『実学報』では片仮名と漢字の対応が「1 対 1」の原則を守るが、「反切」の注音形式を利用して「1 対 2」の例もあるからである。
- ロ、両紙とも片仮名の発音に近い漢字を当てて音訳語の作成に工夫したが、母語干渉の現象も見られる。特に、古城氏は自分の母語干渉のほか、既存の中国語を尊重しつつ、方言訛りの漢字も用いた。
- ハ、両紙とも上海で刊行された新聞であるが、『時務報』の古城氏の音訳語は同紙「中西文合璧表」を、『実学報』の翻訳者達は『東語入門』を参照して日本語の新聞記事の翻訳を行ったと推測される。
- ニ、外来語に対して、『時務報』の音訳語と『実学報』の音訳語との間に参照関係はない。

以上のことを踏まえて、『時務報』と『実学報』の関係を次のように示す。



終章

1 全体のまとめ

本論文は、1897年に上海で刊行された『実学報』を対象として、その「東報輯訳」「東報訳補」欄のソース記事、日本漢字語の受容状況、翻訳の際に参照した書物、『時務報』との関係など翻訳事情を分析し、清末の中国人による翻訳の初期における中日語彙交渉の実態を実証的に考察したものである。

本格的に日本の新聞記事を訳出し、中国社会に提供したのは『時務報』の「東文報訳」欄が最初とされている。その翻訳者は日本人漢学者の古城貞吉氏であった。『実学報』は『時務報』の翌年に刊行され、日本語翻訳者の協力を欠くなか、中国人翻訳者4人によって139本の訳文を中国社会に提供した貴重な言語資料である。しかし、『実学報』への研究は不十分であった。『実学報』に関する研究は主に中日同形語の観点で行われ、その成果によると、『実学報』の訳文では日本漢字語812語が使用され、特に中国で「科学」という言葉を最初に使用したのは『実学報』「東報訳補」欄であることが分かったが、翻訳者の日本漢字語への受容度に関しては触れていなかった。また、日本漢字語以外の翻訳や、翻訳の際に参照した書物、『時務報』の訳語との関係などにも触れていなかった。

本論文は、序論で挙げた課題をめぐって、中日同形語の視点からの研究を補って、翻訳の視点から『実学報』の日本漢字語を再検討し、また、視野を広げて日本語の外来語の翻訳から『実学報』の翻訳事情を考察した。本論文で明らかにし得たことを以下にまとめる。

第1章では、先行研究とその問題点を指摘し、本論文の研究課題を示した。

第2章では、ソース記事の再調査によって、実在しなかった新聞や出典記録のない記事などを探し出し、『実学報』に翻訳された日本の新聞記事138本を明らかにした。出典記録の間違いを訂正したうえで、『実学報』を通して中国に導入された日本の新聞を9種に確定した。そして、近代日本の新聞における類似度の高い記事と照合して、紙面が汚れた記事の内容を明瞭に判読できた。

第3章では、同一ソース記事に基いた2本の訳文を取り上げ、翻訳者の間の用語傾向を考察した。138本のうち、前期と後期に2人の翻訳者によって翻訳されたのは『中外商業新報』明治30年9月14日掲載の「廣東金礦の発見」のみであった。それに基いた孫福保・程起鵬両氏の訳文2本を日本語原文と照合し、文字・語彙・文単位での考察によって、字面では程氏が原文に近いが、原文の意味を伝える面においては孫氏が優れていることが分かり、程氏が新語を積極的に使用したのに対して、孫氏が比較的慎重な態度を示している結果を得た。

第4章では、まず『実学報』における日本漢字語の位置付けを提示した。そして、注釈付

きの語と注釈なし語に分けて翻訳者の日本漢字語への認識を検討した。注釈付き語に関して、孫福保氏を主として、訳文に多くの注釈を残してきた。それらの注釈内容を分析した結果、翻訳者が漢文教養を活かして説明しようとした姿勢が見られるが、「巡查」「方針」のように日本漢字語の意味に理解されなかったことのほか、「諏訪」のように漢字表記語を日本漢字語と誤解されたことも分かった。一方で、注釈を付さない語に関して、日本漢字語「時間」を例に考察した。近代の重要な概念としての「時間」が原文に現れず、日本独自の意味の時をかぞえる単位の「時間」に対して、その時代に一番相応しい訳語“點鐘”が施されたほか、同形語“時間”が『実学報』の翻訳より中国社会に紹介され、短期間中国社会に受け容れられたと推定した。

第5章では、『実学報』に翻訳された日本の新聞記事に掲載されている外来語をA類「漢字あり片仮名語」とB類「片仮名単一表記語」に分けて翻訳状況を分析した。漢字表記がある場合、その漢字表記を継承しやすいが、漢字表記がない場合、音訳、意識されたり工夫したなか、翻訳作業が進むにつれて音訳語に当てられた漢字に一定の規則性が見えた。また、同紙に掲載された「中西合璧表」と比較した結果、英報訳語を参照しなかったことが分かった。

第6章では、『実学報』音訳語における片仮名と漢字の対応関係を利用して、音訳語の作成に参照した書物を考察した。陳天麒の日本語教科書『東語入門』（1895）の発音の説明部分と本文内容と照合した結果、『実学報』音訳語を作成する際、「いろは歌」をはじめ、『東語入門』から強い影響を受けたことが分かった。さらに、『東語入門』と異なる片仮名と漢字の対応を他の日本語研究資料と比較した結果、『実学報』の前期と後期に黄慶頤の『策鰲雜摭』（1889）「音注日本字母正草二体」を参照した音訳語が十数語見つかった。そこで、『実学報』の翻訳時、上記二書を参照したことが明らかになった。

第7章では、『実学報』の音訳語を『時務報』と比較対照し、『実学報』の翻訳の特徴を検討した。両紙における共通外来語の翻訳、両紙における片仮名と漢字の対応から考察した結果、両紙音訳語には参照関係が見られないが、それぞれの母語干渉があるにも関わらず、ともに中国語方言訛りの音訳字が見られる。そして、『時務報』は中国既存語を尊重しつつ、同紙中国人による英報訳語を参照したのに対して、『実学報』は同紙の英報訳語を参照せず、『東語入門』などを参照して機械的に音訳語を施した特徴が見られた。

以上のことから、本論文は、清末日本へ留学した中国人が活躍する前の段階に、積極的に日本の新聞記事を翻訳し、中国社会に紹介する『実学報』の翻訳事情をめぐって、中日語彙交渉の実態を実証的に明らかにした。本研究を通して、『実学報』に翻訳された日本の新聞記事をすべて確定し、従来の中日同形語の視点の研究を補って、翻訳の視点から日本漢字語を検討すべきことを提案した。また、音訳語における片仮名と漢字の対応から参照した書物を確定した。今後の研究に新しい分析方法を導き出す意味で重要な意義があると考えられる。

2 今後の課題

本研究は語彙の考察でありながら、翻訳者の方言、特に音声の研究にも関連していて、重要な意義があると考えられる。しかし、筆者の力不足で検討しきれないところも多くある。今後の課題としたい。

まず、本研究によって、翻訳者が日本漢字語を積極的且つ慎重に使用し、漢文の教養を活かして翻訳を施した努力が見られるが、翻訳者4人に関する日本語の学習歴がまだ分からない。今後多くの関係資料を探し、本格的な日本語教育が始まる前の中国人の日本語学習状況を追及する。

そして、本研究では外来語の音訳例を利用して、翻訳時の参照書物を確定したほか、『時務報』との関係などを明らかにしたが、漢語、和語のほうからの考察をしなかった。和語の翻訳例を挙げてみると、「為替」に対して、『時務報』と『実学報』はともに“匯票”と訳している。今後、漢語、和語の面からも両紙の翻訳状況を考察し、両紙の関係を全面的に検討すべきである。

また、研究範囲を広げて、当時中国の新聞翻訳に尽力した日本人漢学者や、日本に留学する経験のある中国人による翻訳と対照し、初期の日本語翻訳の全般の翻訳状況、その間の影響関係などを明らかにしたい。

参考文献

<論文の部>

- 石井久美子 (2013) 「大正期の『婦人公論』における外来語表記の変遷」『人間文化創成科学論叢』15 pp.1-9
- 石綿敏雄 (1997) 「外来語の表記」『漢字講座第4巻 漢字と仮名』明治書院 pp.312-334
- 王 敏東 (1992a) 「外国地名の漢字表記について——『アフリカ』を中心に」『語文』58pp.12-34
- 王 敏東 (1992b) 「外国地名の漢字表記をめぐって——『オーストラリア』を中心に」『待兼山論叢(文学)』26 pp.17-39
- 王 宝平 (2013) 「清季赴日民間文人葉慶頤考」『浙江外国語学院学報』2013-1 pp.40-48
- 尾崎 實 (1980) 「時点と時段——“～点鐘”の用法から——」『尾崎實中国語学論集』(2007) 好文出版 pp.133-144
- 川崎晴朗 (2012) 「明治時代の東京にあった外国公館 (2)」『外務省調査月報』2012-1 pp.37-62
- 木村 晟、李 俊生 (1973) 「『東語入門』略注」『駒澤大学外国語部研究紀要』2 pp.69-92
- 魏 維 (2016) 「清末の日本語学習書からみる日本語教育——『寄学速成法』を通して」『国文学攷』230 pp.1-14
- 呉 劍杰 (2003) 「論張之洞湖広任内的外才引進」『武漢大学学报』(56-2) pp.185-193
- 黄 彬 (2008) 「關於『漢訳日本辞典』及其詞彙」『中日研究生国際論壇 2008 漢語漢文化論叢』白帝社 pp.229-248
- 国立国語研究所 (1987) 「外来語の表記」『雑誌用語の変遷』国立国語研究所報告 89 秀英出版 pp.186-189
- 朱 京偉 (2009) 「『民報』(1905-1908) 中的日語借詞」『日本学研究』19 pp.1-16
- 朱 京偉 (2012a) 「『時務報』(1896-1898) 中的日語借詞——文本分析与二字詞部分」『日語学習与研究』2012-3 pp.19-28
- 朱 京偉 (2012b) 「『時務報』(1896-1898) 中的日語借詞——三字詞与四字詞部分」『日本学研究』22 pp.94-105
- 朱 京偉 (2013) 「『清議報』中的四字日語借語」『日語学習与研究』2013-6 pp.10-20
- 朱 京偉 (2015) 「『訳書彙編』(1900-1903) 中的二字日語借詞」『漢日語言对比研究論叢』第6輯 華東理工大学出版社 pp.48-60
- 朱 京偉 (2017) 「『訳書彙編』(1900-1903) 中的三字日語借詞」『漢日語言对比研究論叢』第6輯 華東理工大学出版社 pp.221-235

- 邵 艶紅 (2013) 「『明六雑誌』在中日詞彙交流中的作用与影響」『日語学習与研究』2013-3 pp.37-44
- 邵 艶紅 (2014) 「從『明六雑誌』看明治初期的日語三字詞」『日語学習与研究』2014-6 pp.46-52
- 沈 国威 (2009) 「『時務報』の東文報訳と古城貞吉(東アジア文化交流——人物往来)」『アジア文化交流研究』4 pp.45-71
- 秦 春芳 (2007) 「『実学報』日本語翻訳記事の新漢字語——『日本国語大辞典』における初出用例との比較」『広島大学教育学研究科紀要 第二部 文化教育開発関係領域』56 pp.241-250
- 秦 春芳 (2008) 「中国近代新聞と日本新漢語の導入——日本語記事「清国膠州湾」の中訳を例として」『或問』15 pp.109-124
- 秦 春芳 (2010a) 「『実学報』に見える近代中国語の日本漢字語借用」『国文学攷』205 pp.1-13
- 秦 春芳 (2010b) 『近代中国語における日本漢字語借用に関する研究——定期刊行物の翻訳記事を中心に』広島大学博士論文
- 続 三義 (2016) 「中国の日本語教科書研究——清末の日本語教科書に於ける音声教育」『経済論集』42巻1号 pp.127-137
- 竹内弘行 (2014) 「『時務報』東文報訳の考察——古城貞吉が伝えた欧米・日本・中国の状況と思想」『名古屋大学中国哲学論集』13 pp.77-106
- 竹中憲一 (1998) 「日本軍政統治時期対中国人的「教育」」『北京教育史叢刊』1-2 pp.25-35
- 陳 娟 (2012) 「早期中国人編纂の日語教材——以『東語簡要』『東語入門』『東語正規』為例」『東アジア文化交渉研究』5 pp.281-303
- 陳 娟 (2014) 「清末中国人の日本語学習史に関する研究——教科書と辞書を通して」関西大学博士論文
- 陳 静静 (2016) 「公定尺度の単位「キロ」について」『北海道大学文学研究科研究論集』16号 pp.115-128
- 陳 静静 (2017a) 「近代日本新聞の中国への導入について——『実学報』『東報輯訳』『東報訳補』欄の場合」『北海道大学文学研究科研究論集』17号 pp.67-82
- 陳 静静 (2017b) 「『実学報』における日本の新聞記事の翻訳について——『中外商業新報』掲載「廣東金礦の發見」を例に」『或問』32号 白帝社 pp.119-136
- 松井利彦 (2008) 「近代日本語における《時》の獲得—新漢語「時間」と「期間」の成立をめぐる一」『漢字文化圏諸言語の近代語彙の形成—創出と共有—』関西大学出版部 pp.43-83
- 松岡洗司 (1982) 「外来語の歴史」『講座日本語学 4 語彙史』明治書院 pp.90-114

- 山本彩加 (2009) 「近代日本語における外国地名の漢字表記——明治・大正期の新聞を資料として」『千葉大学日本文化論叢』10 pp.108-78
- 湯浅彩央 (2013) 「『航米日録』の外国地名表記」『立命館文学』630 pp.812-822
- 李 益順 (2015) 「試析晚清期刊中的科学概念認知」『湘潭大学学报』第39卷第1期 pp.135-139
- 李 益順、陽徵雄 (2016) 「国内誰最早使用「科学」詞彙考弁——兼与樊洪業先生、汪暉先生商榷」『湖南工程学院学报』第26卷第4期 pp.42-45
- 李 小蘭 (2002) 「清末日語教材之研究」浙江大学修士論文
- 李 小蘭 (2003) 「試論清末東文学堂日語教科書」『解放军外国语学院学报』26-2 pp.38-42
- 李 小蘭 (2006) 「清末中国人編日語教科書之探析」『杭州師範学院学报 (社会科学版)』4 pp.97-102
- 李 玲、陳 春華 (2012) 「維新報刊的「面目体裁」——以『時務報』為中心」『中国現代文学研究叢刊』第12期 pp.128-138
- 劉 賢 (2017) 「清末の中国人が編纂した日本語教科書における文法教育——内容、方法と理念」『或問』31号 pp.113-131
- 劉 凡夫 (2012) 「以黄遵憲『日本国志』(1985)為語料的日語借詞研究」『日語學習与研究』2012-3 pp.10-18

<著書の部>

- 宛字外来語辞典編集委員会編 (1979) 『宛字外来語辞典』柏書房
- 荒川清秀 (1997) 『近代日中学術用語の形成と伝播——地理学用語を中心に』白帝社
- 荒川清秀 (2018) 『日中漢語の生成と交流・受容——漢語語基の意味と造語力』白帝社
- 京都大学文学部国語学国文学研究室編 (1968) 『纂輯日本訳語』京都大学国文学会
- 慶應義塾図書館編 (1967) 『慶應義塾大学雑誌目録：和文編』慶應義塾図書館
- 黄河清 (2010) 『近現代辞源』上海辞書出版社
- 伍 傑編 (2000) 『中文期刊大詞典』北京大学出版社
- 佐藤 亨 (2007) 『現代に生きる幕末・明治初期漢語辞典』明治書院
- 支那研究会編 (1918) 『最新支那官紳録』富山房
- 上海図書館編 (1965-84) 『中国近代期刊編目彙録』上海人民出版社
- 上海図書館編 (2014) 『上海図書館館蔵近現代中文期刊総目』上海科学技術文献出版社
- 朱 京偉 (2003) 『近代日中新語の創出と交流——人文科学と自然科学の専門語を中心に』白帝社
- 朱 鳳 (2009) 『モリソン「華英・英華字典」と東西文化交流』白帝社
- 常 曉宏 (2014) 『魯迅作品中的日語借詞』南開大学出版社
- 邵 艷紅 (2011) 『明治初期日語漢字詞研究——以明六雜誌為中心』南開大学出版社

- 沈 国威 (1994) 『近代日中語彙交流史——新漢語の生成と受容』 笠間書院
- 沈 国威 (1995) 『「新爾雅」とその語彙——研究・索引・影印本付』 白帝社
- 沈 国威 (1999) 『「六合叢談」(1857-58)の学際的研究』 白帝社
- 沈 国威 (2008) 『近代日中語彙交流史——新漢語の生成と受容 (改訂新版)』 笠間書院
- 沈 国威 (2010) 『近代中日詞彙交流研究——漢字新詞的創製、受容与共享』 中華書局
- 鮮 明 (2011) 『清末中国人使用的日語教科書——一項語言学史考察』 中央編訳出版社
- 全国図書連合目録編輯組編 (1981) 『1833-1949 全国中文期刊連合目録 (増訂本)』 書目文献出版社
- 惣郷正明、飛田良文編 (1986) 『明治のことば辞典』 東京堂出版
- 臧 励和ほか編 (1980) 『中国人名大辞典』 上海書店
- 孫 建軍 (2015) 『近代日本語の起源』 早稲田大学出版部
- 藤堂明保編 (1978) 『学研漢和大字典』 学習研究社
- 陳 力衛 (2001) 『和製漢語の形成とその展開』 汲古書院
- 湯 志鈞 (1993) 『戊戌時期的学会和報刊』 台湾商務印書館
- 南京大学歴史系中国歴代人名辞典編写組編 (1989) 『中国歴代人名辞典 (増訂本)』 江西教育出版社
- 西田長寿 (1961) 『明治時代の新聞と雑誌』 至文堂
- 橋川時雄編 (1982) 『中国文化界人物総鑑 (復刻版)』 名著普及会
- 樊 蔭南編 (1978) 『当代中国四千人録 (増訂版)』 波文書局
- 飛田良文 (2002) 『明治生まれの日本語』 淡交社
- 福島邦道 (1993) 『日本館訳語攷』 笠間書院
- 宮田和子 (2010) 『英華辞典の総合的研究—19世紀を中心として—』 白帝社
- 李 運博 (2006) 『中日近代詞彙的交流——梁啓超的作用与影響』 南開大学出版社
- 劉 建雲 (2007) 『中国人の日本語学習史——清末の東文学堂』 學術出版社
- 劉 正燾ほか (1984) 『漢語外来詞詞典』 上海辞書出版社

<使用資料・データベース・辞書>

- 『西遊記』 2005年 吳承恩作 中野美代子訳 岩波書店
- 『実学報』 (影印本) 1991年 中華書局編輯部集 中華書局
- 『時務報』 (影印本) 1991年 中華書局編輯部集 中華書局
- 『集成報』 (影印本) 1991年 中華書局編輯部集 中華書局
- 『神戸又新日報』 1897年 神戸大学所蔵
- 『時事新報』 (復刻版) 第16巻- (9) 1992年 龍溪書舎
- 『中外商業新報』 (復刻版) 第63巻 2005年 柏書房

- 『東京経済雑誌』第 893-896 号 1897 年 北海道大学所蔵
- 『日本』(復刻版) 第 27 卷 1989 年 ゆまに書房
- 『日本金融史資料 明治・大正編』第 8.9 卷 1956 年 日本銀行調査局編 大蔵省印刷局
- 『日本金融史資料 昭和編』第 5 卷 1963 年 日本銀行調査局編 大蔵省印刷局
- 『朝日新聞』データベース「聞蔵Ⅱビジュアル」:『大阪朝日新聞』『東京朝日新聞』
- 『毎日新聞』データベース「毎索」:『大阪毎日新聞』『東京日日新聞』
- 『近代史数位資料庫』<http://mhdb.mh.sinica.edu.tw/index.php> (「近代春秋 TIS 系統」「近代史料全文資料庫」「近現代人物資訊整合系統」)
- 『中国哲学書電子化計画』<https://ctext.org/zhs>
- 『漢典』<http://www.zdic.net/>
- 『漢語方言発音字典』<http://cn.voicedic.com/>
- 『漢語大詞典』(1986-94) 羅竹風ほか編 上海辞書出版社
- 『近現代漢語新詞詞源詞典』(2001) 近現代漢語新詞詞源詞典編輯委員会編 世紀出版集團、漢語大詞典出版社
- 『大漢和辞典』(修訂版) (1984-86) 諸橋轍次編 大修館書店
- 『大広益会玉篇』(復刻版) (1987) 顧野王 中華書局
- 『大字典』(普及版) (1965) 上田万年 講談社
- 『中華大字典』(1915) 徐誥ほか編 中華書局
- 『日本国語大辞典』(第 2 版) (2000-02) 日本国語大辞典第二版編集委員会、小学館国語辞典編集部編 小学館
- 『日本大百科全書』(第 2 版) (1994-97) 小学館
- 『A DICTIONARY OF THE CHINESE LANGUAGE PART II』(1819) ROBERT MORRISON (複製本) 『華英辞書集成』(1996) ゆまに書房
- 『A DICTIONARY OF THE CHINESE LANGUAGE PART III』(1822) ROBERT MORRISON (複製本) 『華英辞書集成』(1996) ゆまに書房

付 圖

(1) 孫福保訊文

廣東金礦發見

近日中國廣東省城地方。現派礦務委員莊鶴清。及聶楊二礦師。同往德慶州開建縣之湧流地方。於此有精良之金礦脈苗發見。試驗礦質之所含真金。約計一擔金砂。可值洋銀五十圓。最下者。每擔亦值七八元。現由廣東同省官吏及紳民等。集資合成股本洋銀三十萬圓。設立公司。經營計畫。再由該委員及礦師同至該礦地方。辦理開采。又廣西蒼梧縣連亘之湧北卡。水黎老。金雞山等地方。一帶均查有金礦。甚為富足云。

譯中外商業新報西九月十四日

(2) 程起鵬訊文

廣東金礦之發見

近來清國廣東省城。派遣礦務委員莊鶴清。及聶楊兩礦山技師。昨於德慶州開建縣之湧流地方。視察金礦脈之發見。已得試驗確實。每礦一擔。最上當得金價洋銀五十圓。最下亦得金價洋銀七八圓。已由該省當差之官民合資。先以株金三十萬圓。為計畫會社之費。再由該委員及技師。向該地方招股。又廣西之蒼梧縣。連互涌北下。水黎老。金雞山等地方。一帶。均金礦為極富云。

譯中外商業新報西九月十四日

『実学報』第6冊/363-364頁 吳鼎孫福保訊 「東報輯訊」欄

「廣東金礦發見」

譯中外商業新報西九月十四日

近日中國廣東省城地方。現派礦務委員莊鶴清。及聶楊二礦師。同往德慶州開建縣之湧流地方。於此有精良之金礦脈苗發見。試驗礦質之所含真金。約計一擔金砂。可值洋銀五十圓。最下者。每擔亦值七八元。現由廣東同省官吏及紳民等。集資合成股本洋銀三十萬圓。設立公司。經營計畫。再由該委員及礦師同至該礦地方。辦理開采。又廣西蒼梧縣連亘之湧北卡。水黎老。金雞山等地方。一帶均查有金礦。甚為富足云。

『実学報』第14冊/873-874頁 長洲程起鵬訊 「東報訊補」欄

「廣東金礦之發見」

譯中外商業新報西九月十四日

近來清國廣東省城派遣礦務委員莊鶴清。及聶楊兩礦山技師。昨於德慶州開建縣之湧流地方。視察金礦脈之發見。已得試驗確實。每礦一擔。最上當得金價洋銀五十圓。最下亦得金價洋銀七八圓。已由該省當差之官民合資。先以株金三十萬圓。為計畫會社之費。再由該委員及技師。向該地方招股。又廣西之蒼梧縣。連互涌北下。水黎老。金雞山等地方。一帶。均金礦為極富云。

(3) 日本語記事原文

● 廣東金礦の發見

近頃清國廣東省城より派遣せられたる礦務委員莊鶴清及聶、楊兩礦山技師の一行は德慶州開建縣管下の涌流地方に於て精良なる金鑛脈を發見したる由なるが試験の結果は鑛一擔に付き最上なるは所得金價洋銀五十弗に當り最下なるは同洋銀七八弗に當る由にて同省官吏は差當り官民合資を以て株金三十萬弗の會社を組織するの計畫を為し該委員及技師は再び同地方に出張したる由、尚廣西の蒼梧縣に連互して涌北卡、水黎、老金、雞山等の地方一帶均しく金礦に富めりと云ふ

「廣東金礦の發見」 中外商業新報 明治30年9月14日2頁(振り仮名を省く)

近頃清國廣東省城より派遣せられたる礦務委員莊鶴清及聶、楊兩礦山技師の一行は德慶州開建縣管下の涌流地方に於て精良なる金鑛脈を發見したる由なるが試験の結果は鑛一擔に付き最上なるは所得金價洋銀五十弗に當り最下なるは同洋銀七八弗に當る由にて同省官吏は差當り官民合資を以て株金三十萬弗の會社を組織するの計畫を為し該委員及技師は再び同地方に出張したる由、尚廣西の蒼梧縣に連互して涌北卡、水黎、老金、雞山等の地方一帶均しく金礦に富めりと云ふ

付 録

付録1：漢字あり片仮名語

(1) 漢字表記を継承した語

番号	片仮名表記	漢字表記	種類	中国語訳	注記
1	アジア	亜細亜	地名	亞細亞	
2	アフリカ	亜弗利加	地名	亞弗利加	
3	アルメニア	亜爾米尼亞	地名	亞爾米尼亞	
4	ヴェーンナ	維那	地名	維那	
5	ヴェインナ	維納	地名	維納	
6	ウスリー	烏蘇利	地名	烏蘇利	
7	ウスリー	烏蘇里	地名	烏蘇里	
8	ウラジホストツク	烏拉西保斯徳	地名	烏拉西保斯徳	
9	カナダ	加拿陀	地名	加拿陀	
10	カナダ	加奈陀	地名	加奈陀	
11	カフィー	珈琲	一般	珈琲	
12	ガラス	硝子	一般	硝子	
13	カルサツカ	哥爾薩	地名	哥爾薩	
14	クルド	克爾奴	地名	克爾奴	
15	サイベリア	西伯利	地名	西伯利	
16	サガレン	薩哈連	地名	薩哈連	
17	サンフランシスコ	桑港	地名	桑港	
18	シベリア	西伯利亞	地名	西伯利亞	
19	シベリア	西比利亞	地名	西比利亞	
20	シベリヤ	西伯利	地名	西伯利	
21	シントピーターズブルグ	聖彼得堡	地名	聖彼得堡	
22	スペイン	西班牙	地名	西班牙	
23	スエス	蘇士	地名	蘇士	
24	セーントピーターズパーク	聖彼得堡	地名	聖彼得堡	
25	セン	盛	人名	盛	
26	チール	両	数詞	兩	
27	チリ	智利	地名	智利	
28	テプライム・アインレーション	威嚴ある孤立	句	威嚴 孤立	
29	トーケン	定位（貨幣）	固有	（貨幣之）定位	誤
30	ニウヨーク	紐育	地名	紐育	
31	ニコリスク	尼古来斯克	地名	尼古來斯克	
32	ノツト	速度	数詞	速度	
33	パリ	巴里	地名	巴里	
34	パリー	巴黎	地名	巴黎	
35	ハワイ	布哇	地名	布哇	
36	ヒリツピン	比律賓	地名	比律賓	
37	ブラジル	巴西	地名	巴西	

38	ペルシヤ	波斯	地名	波斯	表題
39	ベルリン	伯林	地名	伯林	
40	ペンス	片	数詞	片	
41	ポンド	磅	数詞	磅	
42	ボンベイ	孟買	地名	孟買	
43	メツト	海里	数詞	海里	
44	メツト	節	数詞	節	
45	ユフロツパ	歐羅巴	地名	歐羅巴	
46	ランプ	洋燈	一般	洋燈	
47	レール	軌條	一般	軌條	
48	レール	鐵軌	一般	鐵軌	
49	ロンドン	倫敦	数詞	倫敦	
50	ワシントン	華盛頓	地名	華盛頓	

(2) 既存の中国語に変更した語

番号	片仮名表記	漢字表記	種類	中国語訳	注記
1	アフリカ	亜弗利加	地名	阿非利加	
2	イタリー	伊太利	地名	意大利國	
3	オーストリア	奧地利	地名	奧地利	
4	クリー	苦力	一般	力夫	
5	グレーター・ジヤーマエー	大なる獨逸	句	德意志語	
6	セーントピーターズパーク	聖彼得堡	地名	大彼得堡	
7	ダイナマイド	爆裂弾	一般	彈子	
8	チール	両	数詞	斤	
9	ドイツ	獨逸	地名	德國	
10	ドイツ	獨逸	地名	德意志國	
11	ドイツ	獨逸	地名	德(帝)	俄帝-誤
12	ドル	弗	数詞	大羅	
13	ナイフ	洋小刀	一般	小洋刀	
14	ニューヨーク	紐育	地名	紐約	
15	ピストル	拳銃	一般	銃	
16	フイート	呎	数詞	英尺	
17	フランス	佛蘭西	地名	法蘭西	
18	ボート	端艇	一般	杉板	
19	マーク	馬	数詞	(千萬匹)馬	誤
20	マイマイチン	壳買城	地名	互市之區	誤
21	ミトライーズ	機關砲	一般	機器噐	
22	ルーブル	留	数詞	圓	
23	レピユブリーフランサー	佛蘭西共和国	地名	法蘭西共和國	
24	ロシア	露西亞	地名	俄羅斯	
25	ロシヤ	露西亞	地名	俄羅斯	
26	ロシヤ	露西亞	地名	俄國	

(3) 未訳出の語

番号	片仮名表記	漢字表記	種類	中国語訳	注記
1	ガス	瓦斯	一般	無し	
2	キロメートル	基米	数詞	無し	
3	シベリヤ	西伯利	地名	無し	
4	デンマーク	丁抹	地名	無し	
5	ドイツ	獨逸	地名	無し	
6	ノースシー	北海	地名	無し	
7	フイート	呎	数詞	無し	
8	マイル	哩	数詞	無し	
9	ユフロツパ	歐羅巴	地名	無し	
10	ルーブル	留	数詞	無し	

付録2：片仮名単一表記語

(1) 音訳の語：

番号	片仮名語	品詞	中国語訳	番号	片仮名語	品詞	中国語訳
1	アノトー	人名	矮諾託	30	クロード	地名	苦洛獨
2	アラバマ	地名	阿辣拔麥	31	クロマツ	固有	苦洛麥之
3	アランカ	地名	矮鐵痕卡	32	クキンスランド	地名	苦意痕斯拉痕獨
4	アヲサンゴ	固有	矮辣煞痕岳		クキンスランド	地名	可以烏斯拉痕獨
5	アンガラ	地名	矮痕額辣	33	ケープコロニー	地名	開之普誇洛泥
6	イルクートスク	地名	以路苦託司苦	34	ゲーリツク	固有	穉力致果閣
	イルクートスク	地名	以路苦託斯路		ゲーリツク	固有	穉里主顧閣
	イルクートスク	地名	以路苦託司路	35	ケルベルク	人名	化苦地方
7	ウアツツ	人名	烏矮之之	36	ゲレロ	地名	開立洛
8	ウイリアム	人名	烏以利矮磨	37	コトリン	地名	誇託利痕
9	ウエツクス	地名	烏賢之苦司	38	コルシニヨ	人名	誇路希泥搖
10	ウエルフネウヂン スク	地名	烏賢路夫内烏其 痕斯苦	39	コルベット	固有	誇路培之託
11	ウラグウニー	地名	烏利餓烏賢	40	コロラド	地名	誇洛辣獨
12	ウンテル・デン・ リンデン	地名	烏痕鐵路 笛痕 利痕笛痕	41	サガレン	地名	殺額痕
13	ウキダル	地名	烏伊達路	42	ザハイカル	地名	殺哈以卡路
14	エークル	数詞	賢苦路		ザバイカル	地名	若拔以卡路
	エークル	数詞	賢苦	43	サン・パウロ	地名	殺痕之派烏洛
15	オーリー・ゼーム ソン・シンディケ ート	一般	化利 席磨沙痕 希痕笛以利苦	44	ザンジバル	地名	若痕其拔路
16	オデツサ	地名	啞笛之殺	45	サンタアクーダ	地名	殺痕他矮苦
17	オハカ	地名	啞哈卡	46	シウキーチ	一般	希烏伊氣
18	オリガ	地名	啞利額	47	シカゴ	地名	雪茄閣
19	カール・フロセル	人名	卡路 夫洛息路	48	シチー・オフ・ベキ ン	一般	西幾握夫攀開呬
20	カヌドス	地名	卡奴獨司	49	シヤートル	地名	西亞托嚕
21	カノヴァス	人名	卡諾烏矮司	50	シエルソン	地名	希賢路沙痕
	カノバス	人名	卡諾拔司	51	シンディケート	一般	希痕笛以利苦氏
22	カヒー	一般	卡希酒店	52	スイスフォルス	地名	粉米絲富亞羅斯
23	カムサツカ	地名	磨殺之卡	53	スーチヤン	地名	司氣耶痕
24	カラワン	一般	卡辣滑痕(隊 商)	54	スギ	固有	司穉以
25	カリフォルニア	地名	卡利夫啞路泥矮	55	ストレーチンススク	地名	斯託氣痕斯路
	カリフォルニヤ	地名	卡利夫啞路泥耶	56	スペール	人名	司配路
26	カワイ	地名	卡懷衣	57	セイロン	地名	息以洛痕
27	キューバ	地名	氣油派	58	セウエリヨーフ	地名	息烏賢利以搖夫
28	グラン・オブ・イ ンニー・ド・ラ・ レジオンドノール	固有	古拉痕夏富以主 現獨拉蘭其夏痕 道諾魯	59	ダイナマイト	一般	太衣那麥衣托
29	クルップ	人名	苦路之普	60	タイムス	固有	他以磨司

番号	片仮名語	品詞	中国語訳	番号	片仮名語	品詞	中国語訳
61	タウアヅキ	固有	他烏矮治克	94	ハミルトン	地名	哈米魯通痕
62	タウンズビル	地名	太烏痕司希路	95	パラナ	地名	派辣那
63	タコヴマ	地名	塔閣戸匣	96	バンクーバー	地名	澎痕果牌
64	タブレス	地名	他普立司	97	ハンブルゲル・ナ ヒリヒテン	地名	哈痕夫路開路 (機關新聞紙)
65	タルカワノ	地名	他路卡烏	98	ピルマ	地名	皮路麥
66	チャバス	地名	哈司洲	99	ファウル	人名	夫矮烏路
67	チャンバレー	人名	豈耶痕白蘭	100	ファウル	人名	傳阿和魯
68	チルル	地名	氣路路氏		ファルブ	人名	路夫
69	ザーナ、ベレシナ	地名	治那培希那		ファルブ	人名	夫矮路夫
70	ツランスウフル	地名	之辣痕司烏矮路	101	フィリッピン	地名	夫利普沙
71	テアーガーデン	地名	笛痕之笛矮額		フィリッピン	地名	夫以利之皮
72	テウセンアサガホ	固有	鐵烏息痕矮若額 化	102	フウテウサウ	固有	夫烏鐵烏煞烏
73	デツカン	地名	笛之卡痕	103	フード	數詞	普獨
74	テムブル	固有	鐵磨普路		プード	數詞	頗督
75	ドーリツク	一般	獨里此古攔	104	フオール	人名	夫啞路
76	トロント	地名	托羅痕托	105	フヨウ	固有	夫搖烏
77	ドネイペル	地名	獨內衣配路	106	ブラゴウエスチン スク	地名	浦拉岳烏賢斯氣 痕斯苦
78	ナイル	地名	耶以路	107	フリドリヒ	地名	夫利獨希
79	ナタル	地名	那他羅	108	プレストン	人名	夫來思獨咄
80	ナント	一般	那痕託		プレストン	人名	普立司托痕
81	ニイハウ	地名	泥衣哈烏	109	ブレスラウ	地名	捕立司辣烏
82	ニウジーランド	地名	泥烏拔之辣痕獨	110	フレデリキ	人名	夫立笛利克以
	ニュージランド	地名	泥油其之辣痕獨		フレデリキ	人名	夫立笛以克
83	ニウフアンドラド	地名	吳夫阿痕獨拉獨	111	ヘラルド	地名	里拉羅道
84	ニコラエフスク	地名	泥誇辣賢夫斯路	112	ベンガル	地名	培痕額路
	ニコラエフスク	地名	泥誇辣賢夫司路	113	ポートルランド	地名	巴篤拉痕獨
	ニコラエフスク	地名	泥誇辣賢夫斯路	114	ホーリー・ゼーム ソン・シンディケ ート	一般	化利 席磨沙痕 希痕笛以利苦
85	ニコラス	人名	尼克來	115	ポール	地名	樸路
86	バイカル	地名	拔以卡路	116	ポチロフスキイ	一般	普氣洛夫司氣衣
	バイカル	地名	拔以卡	117	ポトージ	固有	樸托其
87	ハヴアンナ	地名	哈烏矮沙那	118	ホノルル	地名	化諾路
88	バカカイ	地名	拔卡卡以	119	ホヘンゾーレン	人名	痕孰立痕
89	バク	地名	拔苦	120	ボルタ	人名	撲路他
90	バサン	固有	拍商痕閣	121	ボンベイ	地名	薄痕培以
91	ハバロフカ	地名	哈拔洛夫卡	122	マヨンハ	地名	麥搖痕哈
92	ハバロフスク	地名	拔拔洛夫斯苦	123	マリボツト	地名	麥利薄之託
93	ハマビシ	固有	哈麥皮希	124	ミケロ・アンゼリ ン・ゴリ	人名	啞希苦洛

番号	片仮名語	品詞	中国語訳
125	ミルウーキー	地名	米魯和既
126	ミルウオーター	地名	米魯和夏塔
127	ムラヴィーヨフ	人名	磨辣烏以揺夫
128	モミ	固有	木米
129	モルヴェン	固有	莫魯戸由痕閣
130	モルツカ	地名	木路之卡
131	モンモースシヤイヤ	固有	謨痕謨使西邪已亞閣
132	ヤクートスク	地名	耶苦託司苦
133	ヤング	人名	耶痕餓
134	ヨハネスブルク	地名	搖哈内司捕路苦
135	ラチーズ	地名	癩氣司
136	リオ・ジヤネイロ	地名	耶内以洛
137	リガ	地名	利額
138	リポイ	地名	利薄以
139	ルイジアナ	地名	路以其阿那
140	ルーター	地名	路太
141	ルリフ	人名	路利夫
142	ロイド	固有	洛以獨
143	ロー・ウアー・カリ フオルニヤ	地名	卡利夫啞路泥耶
144	ローゼン	人名	洛息痕
	ローゼン	人名	席痕
	ローゼン	人名	洛席痕
145	ロバノフ	人名	洛哈諾夫
146	ロレツク	一般	洛立之苦
147	ワラチエ	固有	懷癩氣賢
148	エーンド・デユア	人名	賢痕獨 笛油矮
149	エナルジャー	固有	那魯其耶閣
	エナルジャー	固有	那魯其那閣
150	エムプレス・オブ・ チャイナ	固有	也謨簿來斯惡士氣耶已奈
151	エルフヒンストン	地名	愛路府希愛司托愛

付録2：片仮名単一表記語

(2) 意識の語：

番号	片仮名語	品詞	中国語訳	注
1	アラメダ	地名	兩公園名	
2	ウイルヘルム	人名	俄帝	誤徳
	ウキルヘルム	人名	徳帝	
3	ウエーバー	人名	俄公使	
	ウエーバー	人名	公使席氏	
4	カノー	固有	捕漁之船	
5	キヤンタール	数詞	斤	
6	クロムスタツド	地名	貴国	
7	シンディケート	一般	銳意成就此事者	
8	スペール	人名	俄公使	
9	ソカロ	地名	兩公園名	
10	ターレル	一般	銀貨	
11	チャイナ・ガゼット	一般	某報館之訪事人	
12	デッキ	一般	艦	
13	トークン・モニー	一般	銀貨	
14	ナポレオン	人名	法人	
15	パーセロナ	地名	西班牙國京	
16	ハバナ	固有	此貴價者	
17	フォール	人名	法國大統領	
18	ブルケー	固有	美酒	
19	ベテルホツフ	固有	俄（宮殿）	
20	ベンコ	地名	附近地方	
21	ボンネット	固有	出入之際婦人首戴之物	
22	メツト	数詞	里	
23	モスクウ	地名	公爵之府	誤
24	リンデン	地名	（過）此者	
25	ルーブル	数詞	兩	
26	レボソ	固有	出入之際婦人首戴之物	
27	ローゼン	人名	席公使	
28	エナルジヤー	固有	英瀛船	
29	ネーブル	地名	化苦地方	

付録2：片仮名単一表記語

(3) 未訳出の語：

番号	片仮名語	品詞	番号	片仮名語	種類
1	アール エフ	一般	35	ダブルエンデツド	固有
2	アカニシ	固有	36	チヨロレット	一般
3	アカメガシハ	固有	37	ツーロン	地名
4	アダン	固有	38	テアーガーデン	地名
5	アラバ	地名	39	デッキ	一般
6	アレキサンダー	地名	40	テフマメ	固有
7	アヲサンゴ	固有	41	トクサ	固有
8	イルクツツク	地名	42	バーシヤル・オーニングデツキ	固有
9	ヴェリトリア	地名	43	パイナプル	一般
10	ウンテル・デン・リンデン	地名	44	ハバロフカ	地名
11	エノキマキ	固有	45	ハムブルゲル・ナハリヒテン	固有
12	エレベートル	一般	46	パルマン	固有
13	カカオ	一般	47	ピーターホーフ	地名
14	カクラサン	一般	48	ビスマーク	地名
15	カナドス	固有	49	ビスマルク	人名
16	キーエフ	地名	50	ビュルク	地名
17	キール	地名	51	フオール	人名
18	キルギース	固有	52	フォツシツシエ、ツァイツング	固有
19	クロカシ	固有	53	フヨウ	固有
20	クロムスタツド	地名	54	ブラゴエチエンスク	地名
	クロンスタット	地名	55	フレデリキ	人名
21	コペンハーゲン	地名	56	ベテルホツフ	固有
22	サキシニー	地名	57	ヘラルド	地名
23	サザンカ	固有	58	ボゲ	地名
24	サボテン	固有	59	ホチル	固有
25	シイ	固有	60	ホノルル	地名
26	シケ	一般	61	マツバボタン	固有
27	シングル	固有	62	マンニングトン	固有
28	スカーレット	一般	63	ムク	固有
29	スパーデツキ	固有	64	リュージェン	地名
30	スペシャルポンプ	固有	65	レフリゲレドチングマシーン	固有
31	スポル	地名	66	レモン	一般
32	スリーデツキ	固有	67	ロイラル	固有
33	タイムス	固有	68	ロープ	一般
34	タコノキ	固有			

付録3：『時務報』における片仮名と漢字の対応

仮名	漢字	仮名	漢字	仮名	漢字	仮名	漢字	仮名	漢字
ア	阿、亞、哀、奧、和、兒	イ	也、以、一、哀、爾、	ウ	烏、務	エ	也、合、埃、爾	オ	俄、阿、爾
カ	卡、加、喀、各、訖、哈、革、家、嘉、格、蓋	キ	奚、基、奇、啟、奎	ク	苦、克、活、括、古、革、恢、肯	ケ	給	コ	哥、可、古、高
サ	沙、撒、賽、薩、殺、三、士	シ	西、悉、昔、斯、獅、是、士、什、芝、申、朱	ス	斯、是、士、氏、希、使、司、思	セ	些、西、哈	ソ	梭、沙
タ	打、搭、大、帖、達	チ	的、之、地、希、丁、結、久	ツ	都、子	テ	的、得、等	ト	德、得、偷、盜、拖、當、他、達、脫、都、土
ナ	那、拿、納、奈	ニ	尼、爾、你、宜、利	ヌ	なし	ネ	呢、尼、了、里、納、利、亞、提	ノ	諾、挪、那、奴、能
ハ	哈、赫、波、洽	ヒ	比、非、穢、系、蘇	フ	夫、福、甫、浮、弗、務、布、和、非	ヘ	很、黑、耶、溫	ホ	喝、拂、呵、可、荷、貨、波
マ	麥、馬、莫、默	ミ	米、美、密、未	ム	晤、唔、穆、摩、莫、毋、木、門、米	メ	米、美、密、麥、眉、木、敏	モ	莫、茅、摩、麻、膜
ヤ	亞、耶、也			ユ	酉、裕			ヨ	約、阿
ラ	拉、剌、鄰、兒、羅、那、拿	リ	利、立、里、理、雷、裡、律、爾、耶、米	ル	路、兒、爾、而、律、羅、樂、雷、力、了、留、郎	レ	列、力、歷、雷、拉、利、里、來、爾、尼	ロ	羅、魯、鹿、體、樓、綠、路、爾、拉、恪
ワ	華、亞、倭、維	ヰ	なし			エ	賢、埃	ヲ	なし
ン	吾、唔、五								
ガ	卡、加、喔、我、格、喀、瓦、賸	ギ	義、奚、古	グ	具、古、克、我、爾、虞	ゲ	カ	ゴ	哥、古、閣、郭
ザ	沙、也、耶	ジ	士、尼、爾、衣、埜、都	ズ	子、斯、士、瑞	ゼ	色、車、斯、梭、謝、捷、耶	ゾ	茶
ダ	達、打、得、那、拿	ヂ	直、士	ヅ	自	デ	的、地、得、爾	ド	得、德、多、大、東、度、都、達、竇
バ	巴、把、馬、伯、白、罰、米、勃、具、他	ビ	比、卑、俾、彼、布	ブ	不、布、伯、勃、薄、夫、母、莫、木、ト、維	ベ	比、勃、伯、彼、委	ボ	伯、罷、摩、波、莫、木
パ	巴、帕、喀	ピ	卑、肥、比、拍	プ	布、伯、甫、普、毛、爾	ペ	巴、披、皮、拍	ポ	木、破、巴、群

付録4：『実学報』における片仮名と漢字の対応

仮名	漢字	仮名	漢字	仮名	漢字	仮名	漢字	仮名	漢字
ア	矮、阿、啞	イ	以、已、衣	ウ	烏	エ	賢	オ	啞、和、夏
カ	カ	キ	克以、氣、克	ク	苦、可	ケ	開	コ	誇、古
サ	殺、煞、薩、沙	シ	希、之、西	ス	司、斯	セ	息	ソ	沙
タ	他、太	チ	氣、幾	ツ	之、此	テ	鐵	ト	託、托、篤
ナ	那	ニ	泥、尼	ヌ	奴	ネ	内	ノ	諾
ハ	哈	ヒ	希	フ	夫、府、富	ヘ	里	ホ	化、保
マ	麥	ミ	米	ム	磨、木	メ	なし	モ	木、莫、謨
ヤ	耶			ユ	油			ヨ	搖
ラ	辣、拉、癩	リ	利、立、里	ル	路、魯、羅	レ	立、来、蘭	ロ	洛、羅
ワ	滑、懷	キ	伊、以、意			エ	賢、愛	ヲ	辣 (ママ)
ン	痕、愛、咍								
ガ	額	ギ	猗以	グ	餓	ゲ	猗、開	ゴ	岳
ザ	殺、若	ジ	其	ズ	司	ゼ	席、息	ゾ	孰
ダ	達	ヂ	其	ヅ	治	デ	笛	ド	獨、道、督
バ	拔、派	ビ	希	ブ	浦、簿	ベ	培	ボ	撲、簿
パ	拍、派	ピ	皮、普	プ	普	ペ	配、攀	ポ	薄、巴、樸、普

謝 辞

本論文は筆者が北海道大学文学研究科博士後期課程在学中に行った研究成果をまとめたものです。博士後期課程の三年間、様々な方に多くの御助言とご協力をいただきました。この場を借りて、厚く御礼申し上げたいと思います。

まず、指導教官である池田証壽先生に感謝したいと思います。何を研究すればよいか迷っていたときや、自分がやりたいことが他人に研究されたとき、いつも暖かく励ましの言葉をいただき、研究とは何か、論文とは何かなどを教え、一步一步研究の道に導いていただきました。先生が三年間労を惜しまず指導していたおかげで、本論文の仕上げに辿り着いたのです。

論文の執筆にあたり、小野芳彦先生、加藤重広先生、佐藤知己先生、李連珠先生より多大なる助言をいただきました。貴重なアドバイスのおかげで、本論文を完成させることができ、深く御礼を申し上げたいと思います。

そして、学会発表と論文投稿において、飛田良文先生をはじめ、田中章夫先生、沈国威先生、陳力衛先生、朱京偉先生ほかおおぜいの先生方に貴重なご指導を賜ったことを深く感謝申し上げます。

また、留学生である私の日本語を添削していただいた、中国文化論講座の研究員である加藤慎司様に感謝しております。ネイティブの日本語に直すだけでなく、研究に関しても多くのご意見をいただきました。言語情報学講座池田先生ゼミの皆様にも感謝しております。ゼミでの交流を通して、各分野の研究に接することができ、研究方法なども大変勉強になりました。

最後にいつも暖かく見守ってくれた家族に感謝したいと思います。経済的負担を一人で抱えている主人、病気と闘う母、家族を支えている父、子供の世話をしてくれる義理の両親にも感謝いたします。子供にさびしい思いをさせて、母として申し訳ない気持ちでいっぱいです。テレビ電話で「ママ、抱いて」と言われたとき、涙ぐみました。それも論文を仕上げる原動力となりました。論文で詰まったとき、家族のことを思うと力が出るようになりました。

ここに御礼を申し上げられなかった方々も含め、皆様に心から感謝を申し上げたいと思います。